
円周率の天才

Y-m a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円周率の天才

【NZコード】

NZ66U

【作者名】

Y-ma

【あらすじ】

非凡な自分を模索するあまり、交差する人間の業に陥る青年の焦燥的な憂鬱が巻き起こすファンタジー

前触れ（前書き）

アラサーと呼ばれ始めたのは成人式のあの日から… そつやつて生きていくのだろうとぼんやりしていた、奇しくも成人式の帰りの電車内での出来事からすべては始まった

前触れ

円周率…円周率は3

違うのだろうか?

円周率は だ・様・御 様・

私は溜め息混じりに空を仰いだ…

円周率を何桁…いや、何万桁だな

暗記でき、暗唱できても生きた心地はしない…

円周率は3…いや、御 様だつ。

「私は円周率の天才である」

終電間際の電車さえ、半端に見えるこの家路に
私は異人となつたのだ…

吊革が揺れていのをさえわかる

さてさて
私が何者なのか
誰もがわかるよつこ
しかし、円周率のよつこ見えることはぜつしたらいいものか?

電車内を我が物顔で見渡してみる

恐らくなんらかのヒントが散りばめられているだろつ…な

フフッ…

冥界への切符

3で意識すれば人は道を踏み誤ることはない……

そればかりだ……

成人式は勢いで四次会まで行つたが……相変わらず無茶な連れだ……

電車内が寂しく感じる

それよりも四次会まで参戦した自分が愚かしい

いや、四次会まで企てた奴らが愚かしいのだが

私は自己顯示欲のようなものを見え隠れさせ

血口正當化とまではいかないが……

余韻に浸りたがっていた……

「お兄さんアラサーなんだつて？？？」

耳元で囁くような声が聞こえてきた

声の方を向くと

一つ皿の… これは坊主だろ？

何といつか… 見習いの袈裟を着込んだ一つ皿小僧が…

表向き無反応な私の内をノックした…

心臓が酷く高鳴る…
よ、妖怪…

「あ、おひつ、やうだとも、俺はアリサーだぜ。」

微笑を浮かべ、一つ目小鎧は黙つてへった

下手な妖怪

沈黙が5分ほど続いた…

その間、一つ田小僧はずっと私を好意的な田で見つめていた…

す、少なからず笑みを浮かべていた。と言わざるを得ない…

だ、だいたい

一つ田小僧など…下手な妖怪に今更ビクつく男ではないだろう? 私と
いう人間だつ。

「お、おひーひ、一つ田小僧つーお、俺はアラサーだぞ? それが
どうした? 一つ田小僧めつ

ペチッと

私は一つ目小僧の頭を張つた

一つ目小僧は、顔を真っ赤にして
私に言い返してきた。

「叩かないで…叩かないで…僕には目が一つしかないのだから、叩
かないで…叩かないで…」

下手な妖怪の下手な言い回し…

都会の風がいかにこの下手な妖怪に覗面するか
思い知らせてやる！

ペチッペチッ

ペチッペチッ

私は頭を叩き続けた…
何度も何度も…

一つ田小僧はさらに真っ赤になり、やがて
自ら光を放つような赤い、人型の雷球のようになつた…

「酷いっ！ 酷いっ！ 何度も何度も頭を叩いて… 酷いっ！ 酷いっ…」
うなつたら、その忌まわしい右手にとりついでやる

ひつー！

謂われてみれば。

都会人も、「とりつく」だの
そう言つたリアルな表現には弱い…

急いで

引っ込めた右の手のひらが横にパックリ割れ

その傷口が目玉になつた…

辺りに一つ田小僧はなく
その田玉に姿を変えたようだつた

開き直りのアラサー

「うわあーっ……」

「ううで笑うと「だだ？」とお笑い芸人向けのサクラに対する新人教育。

そんなニュアンスで遅れて私は発狂した…

「田…田が手に…」

当たり前の話だが、私の叫び声を聞きつけ、車掌らしき人物が慌てて私の居る車両まで飛んできた…

それはそれは何事かと言つよつた面持ちで
私に駆け寄ってきた

「お客様、如何なさいましたか?」

私は涙ながらに
自分の手のひらを車掌に見せた

ギョロギョロ…

ギョロギョロ…

「うわっ……お……お客様。これは……テレビの撮影か何かですか？」

おいおい…

これがサクラ営業の本番だつたら…

いや、素人臭くて良いかもしけん…

「へ、うん……そつだとも……マジビビッ…フフシフフシ」

私は半ば放心状態で車掌のそれに会わせることで必死だった

そのせいか

車掌は幾分かホッとした様子で辺りを見回した

「カメラは見当たりませんが？お客様…私もね？オカルトの類は得意ではないし、これがテレビ撮影用の特殊メイクと言うなら話は別ですが、撮影許可なく…つまり、アポなしとなれば、些か場が悪い…駅所まで来てもらいますけど？それともガチですか？」

そう言われてみたら…

ガチな方がまだ良いんじやないか？

痴漢やスリじやあるまいし…色々詮索されても…困るしな

「そ、そなんだよ。

ひ、一つ目小僧がさ？手にとらつてしまつてさ？」

車掌は物わかりの良さげな顔をして

後ろを振り向いた…

「お客様…一つ目小僧には、一つ目なりにも、目があるじやないですか？私には目も鼻も口もないんですよ？」

後ろを振り向いていた車掌がこちらを向き直した瞬間…

目、鼻、口のない顔が顕れた

うつかり

凝視してしまった私は電車を乗り違えたのだと思わざるを得なかつた…

「ひこっ… のっぺらぼう…」

私は立ち上がり、自分の足で逃げることを余儀なくされた

「お化け列車だ…」

乗客も車掌もみんな化け物だ」

成人式… 成人式を思い出せば、幾分か落ち着ける…

そうだ… そうだ…

成人式では、知事だかなんだかが、若者に沿った話しか方とかで祝辞をやつていたが、かなりナウかつたんだった…

「君達はさ~生き残った尊いメンズだろ? もつと胸を張りなよ?」

だつたか?

二次会では、このまま行くとセーラー服で成人式でなきゃなんないよ…

とか…マジ受けたよなあ…

三次会でラーメン食べて

四次会で…なんだっけなあ…

思い出せない…

円周率なんだよ…円周率

なぜか、成人式の話が吹き飛ぶくらい
円周率に固執してたんだ…

なんだつたか…

四次会は確か肝試しに

廃校になつた高校に入つたんだつたか？

季節外れの肝試しだつたが…

そつなんだ…

円周率の計算方法は

円周を求める際

円の面積を求める際と同じなんだよ…

直径 × π = 円周。 であり

半径 × 半径 × π = 円の面積。 なんだから

そこから π の値を求めるのは簡単なんだ…

しかし…じゃあ ってなんなんだ？って…アレ？

四次会はどうなったんだっけ？

チキン野郎

四次会で、私は肝試し嫌いなことに気づいていた…。

自分の知らない世界が開けるなんて
身の毛の竦立つ虚しさだ…

「おまえってホント、チキン野郎だよな？」

同級生なのに、誰より頼もしいタツちゃんが、私に一喝した…

「良いか？知らない世界なんてないに越したことはないんだよ？さわらぬ神に祟りなしだ。わかるよな？もういや、お前のタイミングで来いよ？先に行ってるからな？ひやつ、30分こいつと話込んでたよ…」

そう言つと

タツちゃんが廃校に駆け足で入つていった

もうかれこれ、30分くらいタツちゃんに口説かれていたのも隠し
よつのない事実だ…

しかし、他のメンツが先に廃校に向かつてから、30分たつたのだ
と思つことにした…。

チキン野郎で結構さ…

身の毛が弥立つ…

きっとみんなすぐに血相変えて戻つてくれるや…

行くんじゃなかつた

知るんじやなかつた
つてね。

しかし、さらに30分たつたにも関わらず
みんな戻らなかつた…

私は妙な開放感に救われたように
みんなが廃校に向かつてから一時間後…その場から立ち去り
このお化け列車に乗つてしまつたわけだ…

さわらぬ神に祟りなしか…

最初はピンとこなかつたのにな…

化け物列車の車窓から

私は夢の中でも目を覚ますのが得意だ。
どんな良い夢も悪い夢もすぐに覚める…

しかし、夢は続いたままだ…

化け物列車が単に化け物列車なのか?
冥界に入り込んでしまったのか?

それだけでも確認したい…

私は左の窓をのぞき込んだ

延々と続く田園風景…

見慣れた建物や店…

冥界には入り込んでないみたいだ…

よかつた

次の駅まで耐え抜けば

元通りだ…

「あんた…地獄に落ちたのかい？」

ギーッギーツ

ギーッギーツ

包丁を研ぐ老婆の姿があつた。山姥だ。

「私も長年生きていれば、謂われもない言い掛けりはあるもんだ。
山姥だの、鬼婆だのねえ……しかし、どうだい？あんたの頭が人を見
損なつてやしないかい？ヒヒッ……」

ギーッギーッ

ギーッギーッ

電車の揺れを構つこともなく、包丁を研ぎ続ける老婆をまともな人間と捉えるのはなんとも難しく…

「つ、つまり、私の被害妄想であり、極度の幻覚症状を引き起こしていると言いたいのか？そんなバカな…」

と言いたいところだが

化け物列車と自負したのは、他でもない私なのだ…

化け物だろうが、こちらの精神状態を指摘してくる以上…郷に従え
つてやつか…

「違う…私は山姥で鬼婆だ…ハッ裂きにしてくれる…」

ギー・ツ… ガタンッ

研ぎ石を床に乱暴に置き捨て
鎧だけの包丁を私に突きつけてきた…

「ちよつ… 待て。 あなたは人間だ… 鬼婆ではない…」

私の説得も虚しく、山姥はジロジロと近付いてくる…

「ヒッヒッヒッ… セラピストさんのお肉はどんな感触かな? ヒッヒッ」

説得は諦めよ、
うづく

相手は鬼婆、山姥なんだ

「うわあーっ！！」

山姥を一押ししてから
私は走り出した

一駅耐え抜けばいいんだ

山姥の質問

「後一押ししていれば…」

「ヒツヒツヒツ…なかなか逃げ足の早いセラピストさんだねえ…私も長年生きていれば、こんなに逃げ足の早いセラピストさんに出会えるんだねえ…」

山姥の速さには勝てず、追いつかれた私は、首根っこを掴まれ、右のシートに放り投げられた…

「な、なんなんだ?この列車は…一つ田小僧このつぱりぼうつに鬼婆に…私の恐怖心が見せる幻だつ…!…」

すると…どうだらうか

辺りは閑古鳥が鳴くほどガランとしていたかに見えたのに…

乗車率80%…といったほどか？

人間が大量に…いる

二重幻覚（がら空きの車内に妖怪）：

いや、人集りを避けたいがあまり見えた幻覚だつたのか？

「ちよつ…退いてくれませんか？」

私はそうだつた
シートに座つたのだつた…

奇しくも見知らぬ老婆の上に…

「す、すみません」

慌てて席を立つも

怪訝な顔をしてそっぽを向く老婆…

周りはどうやら、私の気違ひじみた行いをそれぞれ知っているらしく
(こちらは妖怪と戦っていたのだと言うに…)
すっかり、萎縮していた…

一駄耐え抜けば…か

私は幻覚を見ていた…

なんて自己中心的な幻覚なんだ…

「ひつ……」

右手にはまだ目玉が残っていた…

弱み

右手にある田玉に集中したいものだが、化け物列車だと錯覚してい
た時に、乗客に何か失態を働いてはいいか?と気にならずには
いれなかつた…

一度覚めた夢の続きを見るのが困難なようだ
それが地獄だつたとしても、悪夢だつたとしても、それは同じよう
だ…

「よお。あんちゃん?人の頭ペチペチ張りよつてからに、いきなり
発狂してどつか行きよつたが、どうしてくれやんや?…」

身の丈60寸はあるうかといつ、派手なスーツを着たスキンヘッド
の熊みたいな…極道屋が

金の縁がガツチリついたサングラスをインテリジェンスに扱い

私の前に立ちはだかつた

人はこういった現実を逃避したがるものだ

しかし、まあ…不幸中の幸いってやつだ
右手にある目玉に
なんとか集中することができそうだ…

「フフフッ 見たまえ！君の知らない世界の幕開けだーー！」

バッ

と右手の手平を「これ見よがしに」曝した
奴さんこれに度肝抜かれて、すたこいつやだ。

ギョロギョロ

ギョロギョロ

「な、なんや？それは？手品かなんかやろ？笑わしょるなあ…どれ
？貸してみい。決つたるわ。」

ダメだ…

抉られてはダメだ

極道屋が私の細腕をむんずと掴み、目玉に手をかけた瞬間：

また、あの赤い雷球が顯れ、極道屋の額に目玉が移った：

「うわっ…あれ？おい。右手の目玉はどうして消えたんだ？」

私はこじぞとばかりに、極道屋の隙をついて
その場を走り去った…

神の思ひ召しとでも言わんばかりに、丁度、駅に着いた頃だったの
で、一目散に私は下車したのだった

フフフッ…化け物の一丁上がりだ

幻肢痛

時に、私の右手からなくなつた目玉だが、一抹の違和感を残している…

現実的な表現をするなら、あの極道屋にドスで切りつけられたことにでもしようか…

こんなとき人は妙に強気になる…

うまく切り抜けられはしたが、仮にそのまま極道屋にハマリ、とやかく因縁を付けられ続けたにせよ、その苦難を乗り越え生き抜けることができた自分を想定してしまつ…

どこか英雄伝のようなヘラクレス像を思い描く…

頭の中の友達はしきりに休むなっ！！休むなっ！！を繰り返す…そのような偽りの強さに頼つては、痛い目に遭うと…

丸裸にされた気分だ…

BOOOM BOOM . . .

携帯が鳴っている…

「あつ…タツちゃんからだ…どうしようかな…」

私は急に我に返つたよつて、鼓動を高鳴らせた…

「もしもし…タツちゃん…めん…やつぱ怖くていけなか…」

自分の不甲斐なさを晴らしたい一心…と懇こხや…タツちゃんから
の電話は逆に私を呼ぶものだった…

「た、助けて…ツブーツブーツブー」

タツちゃん…

タツちゃんかうのひのひだ…廃校で何があったのか?

「いや、タツちゃんが一~~ざ~~居でもうつて、廃校に来させようとした
に決まってる…タツちゃんだもんな…」

私は強気だったのだ…

タツちゃん達の優しさに甘えたのかもしれない…

右手の違和感が些かの痛みに変わったことに気づきながら、私は帰路についたのだった

守護大名達の調和

家に着いた…

何の気なしにテレビをつけると、地方チャンネルのニュース（つまり、地元の事件ってわけだ）が流れていた…

「物騒な世の中だ…」

と呟く私はすでにアラサービィるではなく、アラフォーやもしかれない…

「ん？」

火事で全焼した

廃校より11人の焼死体が発見されました

だつて…！

「あの廃校じゃないか？いや…待てよ…11人は多すぎる…タツちゃん入れても5人しかいなかつたはず…いつたい何があつたんだ？」

タツちゃん…あの電話はガチだつたんだね…

私は僅かながらの希望を胸にタツちゃんに電話した…

プルルルル

プルルルル

「はいっ太刀川ですけど。」

あれ？普通に出たな…

「あつ！タツちゃん？デコポンだけど？ニュース見た？あの廃校全
焼したんだよ？」

タツちゃんは氣怠そうにそれに答えた

「火付けたのは俺らだけど、焼死体に関しては知らないよ…『ロボン何で来なかつた？みんな半狂乱で大変だつたんだぞ？』『ポン守れんやつた奴がユダとか、危なかつたんだぜ？』」

そんな…

自分一人いなideだけで

廃校が全焼するなんて…タツちゃん達らしいや

「ハハツ、メンゴメンゴ…タツちゃんらしくやん？」

タツちゃんもなんだか疲れているみたいで、話を切り上げたかったのか…もしくは…いや…そんなことはないか…

「トーポンもあんまり競争と競争で遭いつからや。仮をつけなよ~おやすみ。」

「うそ、おやすみ。」

詳しく述べたいんだが、タッちやんに無理をせむわけにはいかないし

いいよな…

添え木

廃校の火事について、考えを巡らしてみた。
タツちゃん達が悪ノリで火を付けたにせよ

焼死体が11体も発見されたなんて…

タツちゃん達、気が気じゃないよな…

気に病みすぎて

また火を付けなきゃいいけど…

あのとき…あのとき自分も廃校に行つていれば…

b
o
o
o
m

b
o
o
o
m

ん
?

メール
だ
:

送り主は…あ、悪魔っ！！

『次は御前だ！－！悪魔より』

ひつーーーー

何なんだ…メアードも知らなこやつなのよ、既に悪魔と結婚されてる…

また…幻覚か？

だとしたら、悪魔の正体は…タツナギさん？

タツナギさんじい悪ノリかな？

『「いや、この悪魔めつ……お前は誰だ？！」』

と返信したところ、

boom

boom

返事が来た

『悪魔は悪魔だ…次は御前だ!! 悪魔の生贊となる柔肉の子羊は御前となる…』

「フッ……なんかウケるよ。

私はまた異次元に迷い込んだのだと…仮にタツちゃんの質の悪い悪戯にせよ。

これはもつ異次元と捉えるしかない…

「ザ、ザザー…あくまじめことひつをせんじたわるからが
る。たとえば…」

いきなり、テレビが砂嵐になり
悪魔が話し始めた…

「たとえば、そのベッド。せことどひつをはんてさせへ、ひじかし
てやうひ…」

ズズズツ
…

私を乗せたベッドが独りでに動いた…

「せひに、くうかんじょひでせこしけせぬ…こまべつじせうつかし
たじゅうたいだ」

私を乗せたベッドは宙に浮かび、さらりとクルクル回転した。：

添え木2（前書き）

クルクルと激しく回転するベッド…突如現れた悪魔の仕業だと、にわかには信じがたいテロポンの心情は天変地異を匂わせていた。

添え木2

クルクル回るベッドに私は歯を噛みしめ、じがみついた…

どひしそうもない…

私達は落トしよひとしていたのだらうか…

悪魔からの曲がりなりの浮遊感とこひフレゼント…

私は歯を噛みしめるばかりだった…

「わかつたか?・むしけらめーー!」

その一言を最後にテレビは消え、砂嵐は去つた…

しかし、ベッドはクルクルクルクル回っていた…

歯を噛みしめる私に対し、ベッドはクルクルクルクル回っていた…

と、飛び降りるしかない…

言つても10寸程度の高さではないか？

そのままでは酔つてしまつ…

「見てるよ？悪魔めつ…」

意を決し、ベッドから飛び降りた私は…

ことわざりに、着地を失敗した…

足首を肉離れしたのだつた…

激痛が走り、腫れ上がった足首のそれはまるで悪魔がとりついた腫瘍のようで、私は付け焼き刃の祈りを行い、すぐに向き直った。

「悪魔め…私のセーフティーライフを駆逐せんとする悪魔め…この肉離れの痛み…忘れるものか…」

肉離れの痛みを、歯を食いしばり耐える私は、あのクルクル回るベッドでの私に酷似していた…

「くしゃくしゃ…くしゃくしゃ…」

すべては、悪魔の算段であったのか?
悪魔は果たして去つていったのか?

そればかりが、思考を畳めて離さなかつたのだ。

最悪な啓示…

私は肉離れをする運命だったのか…

ペースエンバー

卑屈になれど、拭えぬ恐怖心…

悪魔が何をしてきても抗い得ない確信がある…

それはやがて、無垢への嫉妬に変わる…

ピュアへのテーザ…

私は天使に出会いたいのだ…

悪魔を中和してくれる天使に…

「例え……て、天使を墮としてさえも…幸せにすがりたい…これ以上の罰は…」

まだクルクルと回るベッドに私は、狂犬病めいた反応を示した。

水を避けるような…

涎が滴り落ち…

カーペットを濡らすが…構いもしない…

いや、構い過ぎて忘れている…

その程度の仕業など、じつでも良い…

私は平和を愛しているのだ…

「早く！…魔力よ静まれ！…なぜまだベッドは回転したままなんだ
！…」

クルクルと回り続けるベッドに固執すること、寧ろ、心が微少なりにも和らいだ気がした…

涎で濡れたカーペットを手で拭い…

私はそれでも部屋から出た…

b
o
o
o
m

b
o
o
o
m

ジキル博士とフランケンショタイン

家から出た私は、慌てるでもなく、スピードのロイヤルストレートフラッシュが揃つたかのような、ポーカーフェイスを保つたままだつた：

ポーカーフェイスと言えば万物共通の悪癖、と高を括るものだが…

考えすぎはよくない…

もう一つの人格は穏和なフランケンショタインかもしれないからだ

しかし、ここでスペードのロイヤルストレートフラッシュを叩き出そうものなら、人々は遠慮なく私の人生にハイド氏を探り出すだろう…

まあ、そんな心境だといつわけだ。

テレビの突撃レポートでもない限り、部屋で回り続けるベッドなど
バレるわけもない…

「…『テコポン。』

あつ・タツちゃん

タツちゃんは筋肉質であり、逞しく、白いタンクトップにGパンを
履き
ラッパーが付けそうな極太のプラチナのチェーンを首から掛けてい
た
しかし、相変わらずの粒みみたいな瞳は…私には愛らしく見えた

「や、やあ…タツちゃん。」

タツちゃんは私の呼びかけに少し目を逸らし、親指を立てた。

「トーポン…あのとモトーポンが俺らに一言”WHAT'S UP?”って言ってくれてたら…バカやらなかつたよ…マジですか。でも、信じてほしい…ホーミー同士悪さはやるかもだけど、サイコなマークをチョイスするブローはブローだ…わかるよな?」

タツちゃんの話はdon't miss itなんだ。

絶対聞き逃せない
この辺りのルールなんだ…

「当たり前さ……タツちゃん達はマジックパないけど、絶対殺しなんてしないに決まってる…」

タツちゃんは口を抑え、涙を流した…私にはわかる。これがホーミーティアだと…

「うぐっ…サンキューな? テコポン…だが、コップは既に俺達を二ガだと思い込んでる…テコポンは俺達のマムであり、ハウスであつてほしいから、この件には関わらないで欲しいんだ…」

私は男として、戦士としての自我が芽生えたことに気づいた…まさに、スペードのロイヤルストレートフラッシュだ…

しかし、ホーミーなんだ…私はポーカーフェイスを貫いた

「オーライだよ？みんなの在るべき場所を俺が守つてみせるよ？」

私とタツちゃんはアームレスリングみたいな、かたい握手を交わし

その後は無言で去った

互いの道を歩きだしたんだ…

聖水の存在

ひとつ問題がとつあえず止付いた……」ヒヒヒヒヒ……タツちゃん達を信じるしかない……

あのベジデは自分で治めるしかないんだ……

元在る場所……社会の掟……

タツちゃんは高鳴るアドレナリンを抑えるために、オートバイに跨り、ウイリーしながら

「…………」

と耐え抜いていた……

タツちゃんの良き理解者、カミカゼはタツちゃんの常に先回りをしていました…

タツちゃんのアドレナリンがあるボルテージを超えたとき、カミカゼはオートバイのキーをさっと取り、オートバイをふかし温める…

タツちゃんの急激なリクードオートバイのエンジンがイカレではヤバいからな…

カミカゼはタツちゃんを最も理解する男…

私にもカミカゼみたいなホーミーがいたらな…

つて、都合良すぎだ…

呪いには靈媒師の御祓いとか聖水とか…

「はっ！…それだっ！…近くの教会に行って聖水を分けてもらおう」

私はカミカゼのように速く…いや、もつと…いや、もつともつと速く走り出した…教会に向かって

精神と時の…

教会…

田頃は辛氣臭くて…むしろ粋がつっていた私だが、なぜだか古傷が痛む。

そんなときに神の仕業とか思い立つから呪われてるんだろう…

迷える子羊は**何人なんびと**も教会なるもので救われ、仮に言つなら私のような不幸を神の仕業と位置づけたんだろう…

「神への冒瀧ではないか？私が冒瀧しているなど、神こといつては…」

私は深い溜息をつき

ただ、今抱える問題に集中した…

パッと見、洋館にあるような、こぎつぱりとしていて、それでいて大きな門の向かつて右側に、人が通るほどのドアがついている。

そこから、私は我が物顔（少なからず、そう思つほど）の奇行なのだ。自分にとつては）で入り、更に教会の建物内にノックもなく入つた…

勢いを忘れるで逃げ出しそうになれる…

教会内に侵入？し、立ち尽くした眼前には十字架が掲げられ
周りにはオペラグラスが神話を語つている…

しかし…見渡しても神父様？司祭様？はない。

「悪魔と出合いましたね？」

心臓が口から飛び出しそうなくらい、私は驚いてしまった…

背後から…背後から声がした…

断罪

十字架に向かつて並ぶ長椅子に座り、喉元まで出掛けた心臓を飲み込んだ私は、コトのあらましを神父様に伝えた…

聖職者なる振る舞いで、目尻の下がった優しい目が鋭く光つた…

「悪魔に出会い…ベッドが宙に浮き、止め処なく回り続ける…だから、それを治めるために私の聖水が必要と?にわかには信じがたい話ではありませんか?神の御前、汝の訴えの真偽は神のみぞ知るものではありますが、神聖なる価値のあるこの聖水を汝に与え賜うべきか?思慮に困る限りですよ?簡単に言いましょう…神の御心の範疇を優に超えています。」

私には神父様が何を言いたいのかさっぱり分からなかつた…

「神の御心の範疇と言つと… それほど強力な悪魔… つまり魔王… まさか魔神? 私もにわかじこみの知識しかありませんが… そんな…」

神父様はしばし考え込み、奥の棚に向かい歩き出した。その棚から取り出し、私の眼前まで運ばれた精巧な瓶の中では、美しく輝く聖なる水が波打っていた。それを私に見せ神父様は話し始めた。

「ええ… 仰るとおり小悪魔程度の悪さには思えません。問題の次元が違いますね… あなたの見解が正しいと言うことにしましょう。して、500万円にてこちらの聖水をお譲りしましょう…」

私は啞然とした… 辺りを見渡し、傍聴人はいないのか? と声なき声で訴えていた…

私は健全な生活を大枚叩いて買わなければならないのか?

「そ、そんなつ……私は困り果てた迷える子羊何ですよつ……いい加減なことを言わないでください……！」

私は立ち上がり、神父様に言い放つた。が、激は空を切り、神父様は首を横に振つた。

「神は皆に平等なのです。あなたなら一目置いて500万円すぐ払えなければ怠慢であると神は仰っています……」

最初の意気込みはどうやら、慣れない信仰に安易に手を出した自分が悪いんだろうか……

神の裁きはまるで、閻魔大王との謁見に似ていた。」

「怠慢ととりれるのは耐え難い……」の話はなかつたことにしていた
ださたい。」

私は神父様の返事も聞かず、急ぎ足で教会を後にした

自己神格化の代名詞

私はポケットに手を突っ込み、イライラ、イソイソと歩いていた。

神父？ 神父がなんだ？

私の何が神の恩恵を消費していたと言つんだ？

どうせまた、なんたらが食卓に並ぶまで、などと私の存在を脅かそうと叫うんだる…

そのなんたらが食卓に並ばなければ、お百姓様だらうがなんだらうが、成り立たないではないか？

違うのか？

少なからず、私が神から『え賜れたものを食すとき、彼らはそう捉えるに決まつてゐる…。

私は食べるこじが仕事なのだと…

半永久的な現実は、私の思考よりは遅く
しかし、命はそれに左右されている…

風がヒューッと吹いた。決して痛くもない、頬を撫でるような風
だつたのだが、いまの私にはあまりに重い仕打ちだった

「あ、―――つ―――！」

私は半狂乱になり、辺りをのたうち回った。

「何故だ！ 神は神は何故私を見離した！ ……あ、―――つあ、―――つ…あ、―――つ」

私の中で、天変地異が起きた。

今まで優しいと感じていたことが厳しく、厳しいと感じていたことが優しく感られた。

自給自足？自己神格化？
これが自我なのか？

わからない…

そして…私は気を失った

未知との遭遇

「メラサマセーーー！フレフレハアクマダーーー！メラサマセーーー！」

眩い光の元、何やら単調な話し方をする声にどやされ、私は目を覚ました…

銀色のタイツを全身に纏い、真っ黒で巨大な目はまるで、マッカーサー大尉のように鋭く私を見つめていた…

「アクマダーー！ワタシガアクマダーー！ワタシガアクマダーー！」

何度も自分を悪魔だと自負する…え、エイリアン？グレイ…か。は、

私を困らせた。

辺りは柔らかいイメージを帯びた精密な機械群が立ち並び、他のグレイ…宇宙人が何やら操作をしていた。

「あ、悪魔？お前が人ん家のベッドをクルクル回してたのか？」

宇宙人はバカに長い指をブルブル震わしながら、私の質問に答えた。

「ソウダ。オマエノベッドハドウリヨクゲンニナツタ。ハンエイキユウテキニリヨウ…カツヨウスル…」

動力源になるのか…

寄りによつて私のベッドが…

「シンパイスルナ?ワタシタチノチョウサノケツカ、モットモコノ
チイキニガイノナイドウリヨクゲンニナツタカラ…シンパイスルナ
?」

心配するなつて言われても…

「……あつ…ううつ…」

言葉にならなかつた…

宇宙人達が重力に関係なく、高所にある機械にふわふわ浮いて、作業しているのを見ているうちに、体に感覚が戻ってきた（というよりは、体に意識が行かなかつたというか…四肢五臓六腑のような感覚だろうか？）

「うおっ…なんだこれは？」

体中を縛り付ける物はない…
しかし、体が動かない…

金縛りのよつな

内臓は無意識に動いているといつも、に…

「カツテニウゴケナイヨウナマリヨクヲツカツテイル。ワレラハア

クマダカラダ。」

そう言い残し

宇宙人はふわふわとマンションドアに向かって三階に登ったが、いつ
か？

そのまままで行き、何やら作業し始めた…

もう…何が何やら
うちに帰りたいとも思えず（なんせ、ベッドがクルクル回りっぱな
しだから）

出口を探すなど、そんな余裕もなく

魔力…魔力…
彼らの話に合わせなければ…

突破口を…はつたりか？紳士的に？いや…負けを平に認めよ？…

「あ、悪魔よ！…私の負けだ。さあ…私を解き放ちたまえ…！」

1体の宇宙人が私の方を向き、私の足を右、左の順番で指さした。

「ドコニテモイケ…！」

そう言つと、宇宙人はまた作業に戻つた…

確かに、私の両の足は動くよつになつた…

足だけ

宇宙人の励まし方

「あ、ーつー！足しか動かねーつー……なんとかしゃがれーつー……」

私はとうとう…と言つか、案の定壊れた…。

勝負に出たのだ…

壊れたと詰つのに

前向きな発想を本線に、最悪の事態を…想定していた…。

「ひつ…あ、ーつー！…げ、激痛だけを伴うとかだろ？麻酔によつて除去されたすべての”痛み”がお前等の手によってこの施設に蓄積されていて…ひつ…いや、よ、止せ？わかるだろ？わ、私のベッ

ドが……む、無害なんだ。」

咄嗟の思いつきにしては、宇宙的で残酷で……ぞ、斬新だし、有り得
そうな最悪の事態だ……

「はあ……はあ……はあ……見てみる? もはや、拷問の意味もない……。ひ
つ……み、止せ……。」

また、1体の宇宙人が今度は私の耳元までやつて来て囁くように話
し始めた……。

「アンシンシロ? コヒツジヨ。セカイハカクニヨツテホロブ。オマ
エガシヌノハソノアトダ。アンシンシロ? ソレトモ、カクデセカイ
ガホロブマエニ、アンラクシサセテヤロウカ? イマノオマエナラ、
ワカルハズダ。」

茫然自失…

絶望の中に光を見た私は、茫然自失した…

「人類と共に滅びたい…私を家に帰してくれ。」

私はそう言い残し、意識を失つた…。

stay

そう……私は楽観視していたのかもしれない。
あれほど喚いた私なのだから、目が覚めたときには、地についたベ
ッドでした……みたいな

そんな期待をしていた……

「オキロー・ワタシタチハアクマダー！」

眩いばかりの真っ白な部屋ではまだ幾体もの宇宙人がふわふわしな
がら、作業していた。

あ、悪魔だ……

「オマエニチカラヲヤル。ミツツノナカカラエラベ。ヒトツハソラ
ヲトブチカラ。フタツハミタイモノヲミルチカラ。ミツツハワタシ
タチノナカマニナルチカラ。サアエラベ。」

ち、力？

私は悪魔と契約を交わしているのか？

いや、待てっ

私なりにこの究極の3択を吟味しようじゃないか？

何々？

まず、空を飛ぶ力か…奴さん方ふわふわ浮いてやがるな…確かに

うーむ… 良い…

二つ目は見たいものを見る力…か…千里眼みたいなものか?

…良い…

最後に宇宙人になれる力…か

「お、おい…なぜ、私にそんなチャンスがあるんだ?」

宇宙人は無表情だが、不思議そうな顔で私を眺めた。

「ザンネンダガ…チャンステハナイ。コレハラクインダ…。オマエノベツドヲドウリヨクゲンニスルニハ、オマエニチカラヲアタエルシカナイ。コトワルケンリハナイ。」

喜ぶ暇もなく、私は現実に引き戻されていった。

周回遅れ

輝いている人間を見る度に私は、私のようなものは常々思っていたことがある。

やがて、終わりは来てそれでも生きよつと願つなら、私のようになると…

人生はそうあるべきだし、そうあれば…多くの人が救われるから…

輝いている人間の発するメッセージには常に多くの人を客観視する意図が含まれているが

私が望んでいたのは、終わり…手中にあつた輝きの終わりなのだ…

「ときに、異星人よ? 三つの力、一度ずつ試させてくれはしないだ
らうか?」

宇宙人が少し笑ったような気がした…

「イイダロウ… スコシハハナシノワカルヤツノヨウダ…」

違つた… 私は私を手のひらの上に乗せただけだ。

私の体は嘘のように軽くなり、縛り付けられていたかのよつた閉塞感は寸分もなく

体が浮き上がった…

”私はバカ正直な人間です”とでも言わんばかりに体が浮き上がった…

「コレガソラヲトブチカラダ。オマエガコノチカラヲカクソウガ、
ヒケラカソウガワタシタチニモンダイハショウジナイ。タダ、チカラヲホジスルダケデ、スバラシイドウリヨクゲントナル。」

寸分の閉塞感もない私の感覚は寸分でも良いから閉塞感を…

この力は間違っている…

インスタントパラドックス

「ヨシッ。オマエガヒランダトオリ、ソラヲトブチカラコアタエタ。
チキュウニモゼン。」

躊躇ではないが、反論の余地なく私は蒼い光に包まれた…

光から覚めた私は、薄暗い部屋の中にいた…

ボンبونとベッドが相変わらず回り続ける部屋

タツちゃんの薦めで、ファンになつたアイドルグループ『シェパー
ディブオブブードル』のポスターが貼つてあり…

タツちゃんは SOPシェバーディフオブーナルを危険視すると同時に愛していると言っていた…

タツちゃんが言つには、油田は半年で完成するよになつた。とか
地球に飛来した隕石は、地球側の石からの逆輸入だ。とか

SOPにテイープだつた…

ボンボンボンボン…

すでに、動力源となつてしまつた私のベッドはタービンのように力
強く廻つていた…

私はベッドより一〇ナメビ高へ浮かんでみた…

「タツちゃんが言つてたな。インスタントパラドックスは神曲だつて…世界が回つているつてことは、最初か現在が嘘つてことりしき…」

タツちゃんといじこいや…

「キラキラ夢を見たの 優しくて嘘をついたのに キラキラ夢を見たの 怖くて嘘をついたのに」

SOPの代表曲『インスタントパラダイクス』を口ずさみながら、私はまた一寸、また一寸と上昇していく：

聖痕現象と聖教徒の淫乱

私は薄暗い部屋の窓からシャボン玉のように飛び出し、空を縦横無尽に駆け回った…。

すべての人間に自分のできる限りの無重力を与えているかのような浮遊感は、重く…とても孤独で…前衛的だった。

異星人の奴らは、私が力を持っているだけで良いことは言っていたけど、どんなカラクリなんだうつな…

超高エネルギーを生み出すカラクリってやつが、あのベッドをクルクル回転させることで生まれるんだる…

まあ…世の中の電力の総てはタービンだから…

要はタービンが回ればいいんだ：

「ハハハッ見慣れた街並みがネバーランドみたいだね…」

夕暮れ時の景色は炬燵に潜り込んだみたいに真っ赤で、誰かが自分を見つけだしやしないかと、かなり興奮していた。

「あつ……えーっ！人間空を飛んでるよっ！知らない人が空を飛んでるよー！」

小学生らしき少年が私を指さし、あたかもスーパーマンかのよつて
しかし、明確に他の友達に伝えていた。

オーラルセックスのような……いや、相手が小学生だからどうつか？

私のような産な奴は、穴があいたら入りたくなるみたいに、薄暗い
部屋に一日散に逃げ帰ったのだった

彼の少年の友達間での信頼を損ねる形になつたか

私は罪悪感の真つ只中にいながら、帰路を得たのだった

私は小学生に怯えていた…

それは、自分の「えられた力を認め始めたからかもしねない…

だいたいが、あの小学生の少年…だけに見られたのか?

実は反芻児で、良い意味でトリ役というか…

皆は既に気づいていて、答えを待っていたとしたら…

それは導かれるように、私を怪人扱い…いや、もはや存在しなかつたことにするやもしない…

薄暗い部屋で、発起を隠匿する」とばかり、考査していたが…

思い出せ…！

私が小学生だった頃

何に心を奪われていたか？

UFOか？エイリアンか？なんだつた？

ダメだ…

まったく思い出せない…

だからこそ、怯えているんだ。

あの小学生がどんな動きをとるのかを…

自意識過剰になり、私は弱いものを探すよつて人道を逸れた虫けらのようの一塊に重んじていった…

空を飛べるからなんだ？

もし、空を”飛べなければ”悩むことではなかつたのに

私は無意識に敬遠していた”回転するベッドに突っ込む”と叫びつ懲行に出でしまつた…

バキッベキッ…

骨が折れる音がした

痛みがどこか遠くにあり、内臓に刺さってやしないか？
砕けた骨が体内に残りはしないか？など

一丁前に医者のような判断をしながら、肉々しいイメージを保ちながら、最後の力を振り絞り、道路上に飛び、降りたのだつた…

薄れゆく存在感

痛みが迫つてくる…
違ひことを考えたい…

ほ、骨が何本も折れてるんだ。痛いに決まってる。あの異星人ども
が早く…早く私を見つけてくれさえすれば…

「つまつ…アコポン…大丈夫か？！」

タツちゃん…

タツちゃんの巡回時間になんとか重なった
タツちゃんになら、すべてを話せる。

「トコポンッ……誰にやられたんだ……トコポンッ……」

安心したせり、なんせりで私はタシカヤんの前で笑ってしまった。

「アハハハハツー・タツカヤ……トコポンッ……」

吐血した…

痛みが襲ってきた…

ヤバい……うう…

「あ、ーっ……」「フフフ、フフフ……」

私の痛みに、タシちゃんは慌てふためき、ケータイを取り出した。そして、救急車を呼んでくれていた。

病院か

どうして吗……説明……

「えつ？患者の状態？…かなり苦しゅうです。血も吐いてるし…なんだろ？…とにかく来てくださいよ…」

タシちゃんが救急車を呼んでるついでになんか考え出さなきゃ……

この大怪我の原因を…

ベッドがクルクル回転していく、それに突っ込んだから？何を言つているんだ…ましてベッドがクルクル回転してる理由なんて…宇宙人の話をするわけにもいかないし…外科と精神科を梯子するのだけはイヤだ…

私の存在感は意識的に薄れていった

タツちゃんの仲間のカーニバル

タツちゃんは仲間を持っている。
一人はすでに紹介したけど、カミカゼ…

タツちゃんの側近的な男

トレードマークは坊主に生える一本線のモニアゲ…

次は、カルテ…物凄くフランクで、時にタツちゃんの自尊心を崩壊させるほど…

トレードマークのもじゅ もじゅ 毛は天パーだけど、カルテは天才パワーの略だつてさ…

んで…次は、カード…

無口で口下手だけど、的確に物事が運ぶ度、カードをお星様と崇める習慣がある…

トレーデマークの金髪の七三分けは、タツちゃんのお気に入り…

最後にカーニバル…

実は、タツちゃんが唯一仲間だといつていなし…七色に染まつた長髪のサイケマン…

タツちゃん曰く、俺がとやかく言わぬ方が、カーニバルの犠牲者が減るからとか…

そんな冷酷無比なカーニバルが、どこからともなく現れ、タツちゃんがあたふたしてるとケータイを取り上げた

「異星人の仕業です。解るでしょ？またベッドみたいですよ？はい
…はい…」

ピッ…

唚然とするタツちゃんを余所に、カーニバルが私を見て屈んだ…

「テコポオン？水臭いぜ？未知との遭遇には一人で立ち向かうべきじやないぜ？必ず、人間にも伝わる答えがあるんだ…」

これからどうにいくやら、一張羅のタキシードを着たカーニバルは、
社会の窓を開いていた…

カーニバルライク

「デコポンも宇宙人に会つたんだろ? デコポンの」ことだから、三つの力、全部欲しいとか間抜けなこと言つたんだよな? あのな... デコポンだけだつたんだぜ? 宇宙人と契約を結んでないのはさ... デコポンは空を飛ぶだけの男になつてしまつたが... ワターシはウチュージンのナカアーマであるから、その大怪我も立ちどころに治せるんだぜ?」

私はタツちゃんの方を向いた...

タツちゃんは目を逸らし場の悪そうな顔をしていた...

「や、そりや... 良いや。じゃ、じゃあカーニバル先生? 頼みます...
ぜ。」

カーニバルは頷き、私にウインクした...。
些かの寒気と共に、私の怪我は完治した...。

「ハツハツハーン。まあ、落ち込むなよ? ドコポンよ? ウチヨージンのナカアーマなのは俺だけだ… タツちゃんは空飛べないぜ?」

えつ?

みんな契約したって言つてたじやないか?

タツちゃん?

私はまたタツちゃんの方を向いた。

「…まあ、やつはいいだ…ト「ポンよ? 鏡を悪くするなよ? じゃあな…」

タツちゃん…

タツちゃん…違う…私は…私は出来心なんかで空を飛びたかった
訳じゃない…「生きたい」一心だつたんだ…

しかし、去っていくタツちゃんの後ろ姿に私は声が出なかつた…

「大丈夫だ。デコポン！カーニバル様がついてるぜ？」

違うっ！

タツちゃんが正しい！！

タツちゃんが正しい！！

宇宙人は本当に悪魔だつたんだ！！

「ウワアアーッ！！」

私は猛り狂い、空に飛び出した…

「タツちゃん！…タツちゃん！…ウワアアーッ！…」

自分の力に恥じながら、それでもその力こそが償いだと気づいたんだ…

ララバイ

タツちゃんが去つていってから、空を飛んだけど、タツちゃんはまだ居た…

居たというか…確認できたといつか…

「『テロポン…違うんだ。タツちゃんと俺は二手に分かれたに過ぎないんだ…宇宙人が言うには、悪魔つてのは宇宙人のことではなく、実際に存在する宇宙科学を持つとしても駆逐できないウイルスみたいなものらしいんだ…そこで、タツちゃんは宇宙科学を”使わない”道を選び、俺は宇宙科学を”使う”道を選んだんだ…宇宙人も仲間なんだぜ?』

空を浮かぶ私の前に、また空を浮かぶカーネバル…一瞬虹でも架かつたかのようなカーネバルの虹色の長髪が、私を見つめているかの

ようだつた…

しかし、頭は混乱するばかり、悪魔とは何なのか？ベッドがクルクル回転する一件は宇宙人の仕業だと解つたし…

「カーニバル…つまり、悪魔とは何なんだ？」

カーニバルは微笑を浮かべ、目を逸らした。

「悪魔が何なのか？が解れば宇宙科学でやつつけられるってのはどうだ？デコポン…まだ時間が掛かりそつか？」

身震いがする質問だつた。すべてがリセットされたような自分らしさを取り戻せたような…

「そんなアバウトなんじゃなくて、悪魔つて…」

するとカーニバルの様子がおかしくなった

急に苦しみ始め、肌は青黒く、目は赤くなり、髪は真っ白になつた

牙が生え、体は一周りは大きくなつた…

「ツマリ、コウイウコトダ。ウチュウカガクノダイショウ...ウワア
ーアーッ...」

カーニバルは物凄いスピードで彼方へ飛んでいった

「あれが...悪魔なのか...」

私は暫く、空に浮かんでいた...いや、浮かびすぎていた。

田下に人集りができていた

「テコポンだつ！」

「あつ、アレ、テコポンだつ！…テコポンだよ。」

あの時の小学生だろうか…

近所では、タツちゃんと連んでるだけで名前が通るもんだし…なタツちゃんの人脈は計り知れない…

が…しかし、バレた…

宇宙人はバしようが、バレまいが構わないと言つていたが…

私に至つてはバレては困るのだ…困るはずだ。

「ハハツ、テコポンの奴死んじまつたか？ありや、幽靈の類だぜ。」

同級生だった館海タチウエの奴にまでバレた…

素潜りの田本記録を持つ館海は真っ白な肌にも関わらず、海が似合う男と皆に知らしめた奴だが…

まさか、私が空を飛ぶとは思つまいな…

「おーいっ!!みんなあつ!!オラは死んじまつただあーつ!!アハハハーッ!!」

私が空を縦横無尽に駆け回つてみると

空から光が伸びてきて、私を包み込み…
体の自由が利かなくなつた…

事もあるうに、館海の前で…これは拐かされている…私は宇宙人達に拐かされている…

「あーつ！…UFOだ…デコポンがUFOに吸い込まれちました
ぜ…！チクショーッ…！不可解で奇妙奇天烈で…あーつ…！デコポンつ…！」

館海が私に何か言ってたみたいだったが、無情にも私はUFOに更迭されていくのだった。

凡庸、水面までの間

光の海を…錨海のやつに会ったからだろ?…

まるで、素潜りをやり終えて、海上に顔を出すまでの浮遊の間…

そんな時間がこの私に『えられた…

記録だけで十分だろう…走馬燈など…

眼前が真っ白になり、私は視界を奪われた…。
また、ベッドに寝かされ、意識だけが続いていた。

「ザンネンダ… テコポン…」

宇宙人にまで「テコポン」と言われる始末… カーニバルが言つとおり仲間つてわけか…

「ザンネンダ… テコポン… テコポンハナンヤカンヤイウテモ、チカラヲヒケラカシタリセンオモトツタンニ、ワテツライワ…」

前に話した宇宙人とは違つたんだろうか…

何やら流暢さに深みがあるといつうか… 言葉尻だけでイントネーションは酷いぐらい単調だが…

「アキマヘンヨ? シヤカイジンナンヤカラ、ナンカモウワカリマッシャロ? タシカニドウリヨクゲンハカクホデキマスケド、ワカリマ

ツシャロ?」

解りまつしゃらす…

残念な私には解りまつしゃらすだつた…

「動力源つて…どんな仕組みなんだ?悪かつたよ。」

私の半ばぶつきらぼうな質問に対し、宇宙人はため息をついた。

「ハア…アンサンセツカチャカラ、カンタンニセツメイセナアカン
ナ…マズ、ドウリョクヲウミダスニハイキトシイケルモノノオモイ
ガヒツヨウナンデスワ。」

”オモイ”か。
確かに仮に電気があったにしても、コンセントにプラグを繋ぐことで電力を得れると”思えない”としたら?

せっかくの発電設備も何もかも嘘になる…

太陽があるから、暑いんだろうが、太陽が熱いかどうかなんて私は
知らない…

つてことかな…

to help

「ホンマハナ? ジケンヲワンサカオコシテ、ヒトビトノチュウモクヲアンサンニムケセヨウオモタンヤケド、マア、アンサンガメダツテシモタカラナ…」

分かるような… 分からないような…
宇宙人は兎にも角にも残念がつている。

「事件と私、どんな意味があるんだ?」

相変わらず、ぶつきらぼうと言つか… カルテほどではないにせよ
些かフランクな質問に宇宙人はまたため息をついた…

「イミツチュー・カナ？ジブンチノベツドガタイヨウヤネン…。ジケンオキマシタ。ハテ？ナンデデショ？アンサンチノベツドガクルクルマワリヨルカラヤツ！—ツテハナシヤナ。ワカリマッシャロ？」

…解りまっしゃら…ないつ…!!

なぜ、それが動力になるのか
私は自分の頭の堅さを呪つた…

いや…諦めるのはまだ早い…

私のクルクル回つてるベッドが太陽…つてことは、UFOが動いて
いるのはベッドがクルクル回転しているからか…

「つまり…つまりだつ！－ベッドがクルクル回転しているから、と
いう即席の既成事実が必要なわけだな？道筋というか…なるほどつ
！－宇宙科学は凄いなつ－！人間の行動によつて生まれる何らかの
エネルギーってわけか？」

宇宙人は深く頷いた…。

「ソウデスネン。ワカリハリマシタカ？ワテトシテハ、アンサンカ
ンレンノジケンヲオコシマクツテ、アンサンハ、トンデニゲルツチ
ユーズシキヲモイエガイトッタンヤケドナ？ドヤ？」

「ドヤ？つて言われてもな…」

「私だつて羨望を受けたいに決まつてゐ
どっちでも良いんだと最初に言つたじやないか…」

「私は空を飛び回り、皆に夢を『えたい！』

すると、宇宙人がまた、深く頷いた…。

「ジャア、アンサンニヒーロー二ナツテモライマシヨウカネ…」

その後、私は宇宙人と私の演じるヒーロー伝について、練り上げたのだった…

「『れは、あくまでも演技だからな?』トコポン。」

タツちゃんと来たら、宇宙人に対して一歩も譲らなかつたとか…
その結果、まあヒーローには私が良いのではないかと提案したそ
うだ。

「しかし、実弾を『テコポン』の心臓に打ち込むわけだから… 宇宙人共
と俺らの絆が試されるわけだ。」

場所はタツちゃんの部屋。シェパード・ディブオブプードルのポスター
で埋め沢山された

ビー・ボーイらしからぬアイドルグッズだけの部屋で私達は、いや、私がヒーローになる為に計画を練っていた。

「タツちゃん…でも、実弾つて大丈夫かな？宇宙人だよ？」

タツちゃんは満面の笑顔でそれに応えた。

「おいおい…失敗したら、俺がデコポンを殺したことになるんだぜ？そこは完璧に大丈夫だ。それより、デコポンの心臓を撃ち抜けるかどうかなんだよ。」

だ、だよな…

タツちゃんはホー!!ーだもんな…

「な、なんだよ。タツちゃん。わ、私を撃つことが楽しいみたいじ
やないか? w」

もちろん、冗談だ

ホー!!ー同士の冗談ってやつだな。

「おもしれーのは、おもしれーけど、それも俺らと宇宙人との絆の
為だ。俺は歴史的なこの瞬間にヘビーな答えが待ってる気がするよ
…」

タツちゃんの話は頼もしく、私の心は興奮し、
それを落ち着かせる」とで一杯だった…

「だね? タツちゃんはスゲーな?」

私達は夜通し、復活祭の計画を話し続けた…

to heart

タツちゃんの配役によれば、鎧海と私を発見した小学生にこのショットを見せれば、確実につまむいりじい…

「だいたい、細かい根回しは要らないんだよな。『デコポン』が空を飛び回つてればよ? まずと注目されるんだからさ。要は俺の拳銃捌きなわけよ…」

タツちゃんは珍しく緊張していた…

タツちゃん曰く、これは集大成であり、油断ならない始まりだってことらしい…

「Life goes onなんて言いたかないが、まず、デコポンは実弾を心臓にぶち込まれるわけだからな… デコポン? 心から、life goes onだ。」

私とタツちゃんは
静まりかえり、互いの右腕を斜めに押し当て、絆を確かめ合った。

「良いんだ…タツちゃん。仮に宇宙人が単なる遊びでこの計画を持ちかけていたとしても、歴史的な…へ、ヘビーな答えが待ってるよね？」

タツちゃんは深く頷いた。
私の伝説が始まるなんて夢にも思わなかつたが、タツちゃんとならやれる気がする…

「ほら、デコポン。これやるよ。SOPのハンドタオルだ。俺愛用のな？」

タツちゃん…

タツちゃんから手渡されたハンドタオルには、『S?P』と赤文字で書かれてあり、桃色のタオル生地と見事にマッチしていた。

「サンキューだよー！タツちゃんー！絶対大事にするよーー。そして、絶対成功させよー！」

私達は計画の成就を予感せざるを得なかつた…

少なからず、あの時の私は浮かれすぎていたのか、疑うこととなかつた…。

タツちゃんが私をどんな目で見ていたかなど…もつてのほかだった

「当たるやうにじてくわるや…」

結局タツちゃんは宇宙人が巧い具合に私の心臓を打ち抜くような弾道を描くだらうと、結論づけた…

「当たつて当たり前、要は無敵のテコポン、不死身のテコポンを知らしめたいわけだからな…」

タツちゃんはとても残念そうだった…

「タツちゃん…私としてはタツちゃんがヒーローにならべきだと思つたんだけどな。私も生半可に空が飛べるから…」

タツちゃんは深く頷いた

「伝わってしまったか…俺はSOPに相応しい男になりたいと田が
な真剣に、それでいて紳士的に思慮していたし、宇宙人の手なんか
借りずに成り上がりたかった…ヒーローになりたかったよ…」

タツちゃん…

私のヒーローなんて名ばかりの…でも…豊かなエネルギーを生み出す

私はエネルギーを生み出す…

「タツちゃん…お、オレやるよ…お…可笑しいかもしけないけ
ど…私なら…タツちゃんだつているし、宇宙科学だつて凄いだろ?」

タツちゃんは親指をグッと立て、私も親指をグッと立て返した…

無敵のデコポン

不死身のデコポン

それがヒーローの条件。私は止まらない優越感を野性で誤魔化していた…

誰だつてそうだ

ヒーローになりたいに決まってる…

始まる…私の復活祭が

ポップインフレ

宇宙科学ほどではないにせよ、我らが高度文明は素晴らしい...
動物の力ではどうしようもないことを、そもそも当たり前のようになってしまったのだから。

我々人類も捨てたものではない。

木陰が巨大建築物となり...

馬が自動車となり...か?

素晴らしい...

そして、それに課せられる重圧もまた...

素晴らしい…

私はクルクル回転するベッドの傍らで眠り
翌朝、復活祭へ向け心の準備をしていた。

「ちんちらおかしくて、臍で茶を沸かせるよ。」

自分への叱咤激励は何というか…言い得て妙だった。

私は居ても立っても居られず、床から跳ね起き（もがひさベジダ）
当たらないよう（元）カーテンを開けた。.

「えつ？あれ？」

寝静まる町並みをつつくみつこ
ザーッザーッと雨が…

boom

boom

それを見計らつたかのようにタツちゃんからのメール

『テコポン。雨天決行だが、忘れるなよ？館海と第一発見者の小学生の前で撃たれるのが最大のポイントだ？？』

だ、だよな…

相変わらずタツちゃんは冷静だ…

私はカーテンを閉め、床についた…

雨天決行だつて……館海や例の小学生は現れるのだろうか？

「こせ、何度だつてひまつむーーー。」

私は夢に入るドアを見つけたかのように
微睡みに更けていくのだった

力業

「よく見てるよ?」

パンツ!!

タツちゃんの掛け声と共に銃弾は私の心臓を貫いた。

激痛だつた……瞬だけ激痛が走つたが

世界中の物好きに分け与えでもしたかのように痛みは消え去つた……

タツちゃんの予想通り、宇宙人がうまくやつてくれたみたいだ……

：明け方

早々と目が覚めた私は
私を呼ぶドアベルで体を起こしたのだった

ドアを開けた先には、館海と例の小学生…

名前を俊哉君と囁つりつい…が、タツちゃんと共に立っていた…

こんなんで良いのか…
雨も強降りの中
館海が私に握手を求めてきた

「テ「ポン——」の奇跡に立ち会えるなんて俺素潜りやつて良かつたよ——！」

色白なのにオーラは色黒…そんなイメージの館海…

「お兄ちゃんって不死身なの？空は飛べるし、不死身だなんて格好良すぎるよ——！スナック菓子持ってきたから——！これで緊張しないで済むよね？」

小学生にしてはデカい五十寸とちょっとはあるだろう。小太りの俊哉君はテカテカのホップに抑えきれない躍動感を蓄えているかのように…太っていた

「ありがとう……一人とも……タツちゃんもつ……絶対うまい

「…………へ

西足は強くなる一方だったが、タツヤんがそれを感じさせないほど冷徹に私の背中を押した

「アーポン。やつれと空を飛べよ。これは遊びじゃない。」
「なんだ。」

タツヤん……

厳しさの中にも優しさが見え隠れするタツヤんの、激に思えなけれ

ばっ！

「オーライ、だよタツヤん……」

私は一步足を前に踏み出すよつて、地面から足を離した

キープ&オーバー

空を飛び回り始めた私はギャラリーを見回した…

視界は雨のため最悪で、と言つよりは館海、俊哉君、タツちゃんと
会わせて3人しかいなかつた…

新しい出会いでもあるものかと、私の思考は悪条件であるにも関わ
らず、楽しめていた…

「よく見ていろよ。」

パンツ!!

タツちゃんの持つてる銃はリボルバー式で、レトロな雰囲気のある小型の銃で、飛ぶ前に見せてもらつたんだが…

当たらぬだりうどひつゝ何の根拠もない自信が私を、私の気分を抑揚させたのも言つまでもない。

のだが、案の定見事に命中…

仰向けにアーチを描いた私の遺体は宙に浮いたまま、多量の出血をしていた…

「わあっ！－タツちゃん！－それホンモノじゃんか！？何してんだよ…！」

俊哉君は戦慄き、周りを走り回ったが、ぬかるんだ地面に足を奪われ、転んだ。

「俊哉っ！—タツちゃんを…テコポンを信じろっ…—これから奇跡が起きるんだ。」

何を思つたか

すつ転んだ俊哉君を抱きかかえ、館海が語つた。

しかし…館海が想定したであらう奇跡は起きなかつた…

宙に浮いたままの私の体は浮力を無くし、地面に叩きつけられた…

「ハ、ハモーハー、トボクン…」

タツちゃんだ…

銃を投げ捨て、私に向かい駆け込んできたタツちゃんもぬかるんだ
地面に足を奪われ、すつ転んだ…

「ハ、チクシ四一〇…トボクン…」

タツちゃんはへたれ込み、空を見上げ叫んだ。

うなだれる3人… もはや、宇宙科学に翻弄され果てた3人には為す術なかつた…

「怖かつたんだ… 宇宙人相手にはコレしかないだろ… コレしか…」

タツちゃんは

緊張の糸が切れたように泣いていた

雨足は一向に修まる気配はない。

私はどうなつてしまつただらつか

タイムオーバー

幽体離脱といつやつだらうか?

銃声をあざとくも聞きつけた住民が通報したらしー…

私の田線は空を飛んでいるときと同じで
見下ろすように、復活祭の後を見ていた

タツちゃんが警察に連行された…

廃校が全焼した一件で疑いはかけられていたものの

タツちゃんの人脈がそれを許さなかつた…

しかし、ここのままでは余罪まで着せられかねない…

タツちゃん

血塗れで倒れる私の体は救急車に乗せられ
おそらく病院へ…連れて行かれた

宇宙人にやられた。と言えば病院も取り合ってくれるはず。

カーニバルがやつてたじやないか？

…タツちゃん

どんな正義だろうと
人の気持ちが入らない世界なんて…

私は興味が持てない…

タツちゃんは悪くないんだ…

私が甦れば、タツちゃんは無問題で解放される…

サイコなマーダーはホーリーじゃない…

あの草臥れた体に戻るべきなのか?
宇宙人は何を考えているのか?

兩足は治まる気配もなく、救急車の赤いランプを頼りに私はフワフ
ワと後を追いかけていた…

レクチン

私は死んでしまったよ
うだ
……
しめやかに葬儀が行われていた
……

運ばれた病院で、医者がタツちゃんを見るなり、

「コレはダメですね……」

と呟答した……

タツちゃんは泣き崩れ、何も言わなかつたが、私にはわかる
……

宇宙人の仕業といつネックが吉にも凶にも出ると云ひ」と

タツちゃんがこの辺りを仕切っていた点からも、嘘を真実に変える力がある（つまり、医者は宇宙人など信じていなかつたわけだ）と捉えざるを得ない

タツちゃんは私を高層ビルの屋上で銃殺し、地面に突き落とした。

ところづ現実を突きつけられたのだった：

タツちゃんが悪い訳じゃないけど…

何故だか、タツちゃんが選んだ道に見えてしまつ…

「タツちゃん…！ありえねえーよ…！俺だつたらこんな仕打ち、その医者の舌を食いつかぎつても取り下げさせいやるつ…！」

カルテが診察室に乗り込んできてから、話はややこしくなつていた…

「こんな馬鹿げた話が通つちまつたら、俺らがあの11人の焼死体を作つたみたいになつちまうじやないか？だろつ？！」

しどろもどろするタツちゃんを余所に、医者はカルテを齧めた

「君… このカルテを見たまえ… 死因である胸の銃痕など気にもならないほど… よほど高い場所から落ちたと見られる… 死体遺棄の疑いさえあるのだよ?」

カルテは押し黙つた…

「そ、空が飛べるんだよ。カーニバルみたいにさ。『ココポンはさ。』

カードが後ろから出てきた…

「空？止してくれ…私もね？直に回転するベッドを見せられたことはあるが、人間界が管轄する問題ではないんだよ？あーっ頭がおかしくなりそうだ…！君たち出ていってくれ…！」

カーニバルは「うなる」とかわっていたのか、現れなかつた…

私はどうなつてしまつたのだろうか…

a f t e r t w o y e a r s

私が死んでから、一年がたつた……

幽体のまま、一年間さまよい続けた……。

町の人々に助けを求めていたのが、一ヶ月くらいか……

何を境にかは忘れたが、願いは暴言に変わった……

しかし、何を喚いてもきっと寒氣を催す程度で、変わり映えはしない……

女風呂を覗いたり……

原発の様子を見たり…

売れ筋バンドのライブの裏側にも行つた…

寒気がしたんだろう…

私は一年間、死ぬ思いで死んでいた…

もちろん、タツちゃんの様子も見に行つたし

カルテやカードだつて…

カーニバルだけ所在が掴めなかつたけど…

二年たつたんだ…

「宇宙人の話なんて誰も信じない… タツちゃんは刑務所で酷い目に遭つてゐるし… 何故、私の意識はまだ存在するんだ？」

元に戻る体はもう無く、私は何度も寺院や教会を訪れたが…

恐らく寒気がしたんだろう…

嘔をされた…

葬儀では癒されない靈体とでも言つのか?

宇宙人と関わったからか?

「辛い…辛い…辛い…宇宙人は本当にタツちゃんにあの計画を持ちかけたのか? 体よく私を葬り去るための口実だったのではないか?」

最後にはタツちゃんまで疑う始末…

カルテやカードは、まだまだタッちゃんをリスペクトしてるのに…

私はどうなつてしまつたのだろうか…

カルテやカードのよう、タッちゃんを支持したい…

カーニバルを探すしかない…

二年間何故か、カーニバルを探そうとしなかったのは、やっぱりタツちゃんが好きだったからだろ？

タツちゃんはカーニバルをホーミーだとは思っていなかつたし、タツちゃんはカーニバルが裏で、何をやってるんだ？と思つてたに決まってる…

宇宙人と同等の力を手に入れた男だから…

そのサンクチュアリは大切にしたかつた…

だが…「コレはたぶん…

そのサンクチュアリ像が独りよがりの先入観つてことなんだと

いろんな意味で考えざるを得なかつた…

カーニバルが行きそうな場所…行きつけの美容室とか男物のランジ
エリーショップとか

虱漬しに…

他の仲間には一年間も付きまとつてたのに…

どうこうわけか

カーニバルに至つては、一、二時間で済ませたかった…のに

見つからない…

一年といつ時間の重みが体中を締め付ける…

「カアーニバル！…ど」に行つたあー…！…！」

たまらなくなつて、私は叫んだ…

カーニバル…カーニバルはホーミーなんだ…
タツちゃんだつて歩み寄ろうとしてた…

すると、空から光が降り注いだ…

私は魔法使いなのか？

地震を感知する電気ナマズなのか？

そんな気分で、恐らくはUFOだが、今の私には救いの箱船：ノアの箱船に選ばれた生命体のように、信じられないほどの満悦の笑みで吸い込まれていった…

「カーニバルめ…寂しがり屋か？…フフフツ」

私は幸せの絶頂にいた

著聞を糧に越する男

UFOに吸い込まれた先には、タツちゃんがいた…

満悦の矛先が些か…狂っていたせいもあるだろうが…直立で立つて
いる嬉しさよりも不動な自分を嘆きたかった

「タツちゃん? タツちゃんがどうしてここへ?」

タツちゃんはニヤリと笑い。モコモコと体を変容させ、カーニバル
になつた…

「探してたのは俺だろ? デコポン? 先入観はよくなないぜ? デコポン
? 現状は把握できるか?」

煮え切らない怒りがカーニバルへ起きたが、如何せん煮え切らないものだけに、平常心を保てた。

「か、カーニバル…あれ以来姿を見せないから、悪魔にとり殺されて死んだのかと思ってたよ？ハハハツ」

すると、カーニバルはまた体をモロモロさせ、体を変容させ、例の宇宙人となつた…

「ゴメイトウ…カーニバルハアクマニオチタアトクサツテシンダ…
テンガイコドクノミニアツタカラ、ジケンニスラナラナカツタガ…

ジユウイチニンノニンゲンヲコロスコトデテニイレタワレワレトド
ウトウノチカラ…ヤツニハツカイコナセナカツタヨウダ…。」

ジユウイチニン…?
か、カーニバルが殺したのか…

あの11人の焼死体は…

「ヤツハタチカワラタニ、ヒトリマタヒトリトサツジンヲオカシ
タ…。ケイサツハレンゾクサツジントハトラエキレズ、ユクエフメ
イトフンディタガ、ヤツニウタガイハカラナカツタ…ソシテ、シ
タイノショブンヲタチカワノチカラヲカリオコナツタワケダ…」

そ、そんな…

タツちゃん達…あの同窓会の四次会でそんなことがあつてたなんて…

「う…嘘だつ…！カーニバルだつて不器用なだけで、サイロなマー
ダーには及ぶわけがない！タツちゃんだつてあんな風に言つてるけ
ど、認めてたに決まつてる…」

宇宙人はどこか不思議そうな顔で私を見ていた…

「オマエガドウオモオウトカツテダガ、キヅクノガオソスギタ…シ
カシ、オマエヲフツカツサセルノガコノケイカクノサイシユウモク
テキダ…」

な、何を言つてるんだ…

私はとても深い意味で我にかえつた…
今更甦つてどうする?
一年だぞ?

葬儀も行われたし

タツちゃんなんか刑務所で酷い目に遭いすぎて…くつ

館海は素潜りの世界ランクに登録し出すし
俊哉君は不登校続き…

カルテはキャバクラの呼び込み

カードはネット詐欺…

「この世に未練はないよ…私はこの世に未練はない…」

宇宙人は相変わらず不思議そうな顔で私を見ていた…

「イヤ、チガウ。キヅクノガオソスギタンダ…ヨミガエルンダ…！」

私は眩い光に包まれ意識を失つた…

カルテの愚痴

甦つた…と言つべきか…呆氣ないと言つべきか…

私はネオン街の道の真ん中で素っ裸で倒れていた…

そして、生まれたての赤ん坊のように、何やら粘膜を全身に帶びていた…

さすがネオン街…

クスクス笑う人は居れど、慌てふためいたり発狂するような人間はいなかつた…

「お、おまえ... テ「ポンじゃないか?」

カルテだ...

メンソーレラブと書かれた派手な黄色のハッピを着ているが、相変わらずのもじや毛は... 相変わらずだった

「ああ... 験つたんだ...」

カルテは発狂した

「あ、ーっーー! 何が験つただ!! 早くタツちゃんを死刑にしろよー。」

！カーニバルの手柄をぶんざる気なんだよ…つて死刑になつたら、タツちゃんの手柄か…つて手柄…か？とにかく…あー…タツちゃんは無罪だろ？サイコなマーダーなんて、タツちゃんじやないよ…カーニバルを探し出して、警察に突き出してやれば…おいおいつ大発見だぜ？宇宙人の存在が公的に認知されるんだぜ？「テコポン？カーニバルの居所は知つてるんだろ？」

湯水のようにカルテが話通したが…話はややこしいカーニバルの説明もややこしい…タツちゃんはやつぱり11人殺したことになつてゐみたいだし…

「カーニバルは死んだよ…宇宙人から聞いた…」

カルテはへナへナと腰が抜けたように座り込んでしまつた…

「な、何が死んだだよ……タツちゃんどうすんだよつ……カーニバルの力は知ってるだろ?…」

うなだれる私の背後から声が聞こえる

「おーいっ……むほつてんなよ?…ちゃんと呼び込めや?…」

“ひひゅ、メンソーレラブでのカルテの上回のようだ…

「おっすみませんっ……もう少しうまポン。話は後だ。じゃあな…」

一度と念の上とほなこだらう。と風にも聞こえたカルテの別れ
際の会話…

私は安易に言葉を信じてゐる所でした

カードの期待

服：服を着ないと…

一人暮らしな私だが、家族はある…既に死んで一年…

ある程度のサイクルが持ち治つた頃か…

粘膜塗れの体を引きずりながら、ネオン街を見渡した…

ん？カードが働く会社が近くにあるな…

腐乱死体のような私は、すでに怖いものはなく、ネオン街の暖かみを感じるに至っていた…

「あつた…」

カードが働く、あまり評判の良くないネット企業…

『チーフ』

出合に系からクレジットカードの制作まで

幅広くやってこむらじいが…

ネット詐欺の汚名は付かないと、…」

私も幽体の頃はよく眺めていた…

「ダメだ… やっぱり上手… 私の家はあるかもしない… ベッドがクルクル回ってるからね…」

一年の時間はすべてを億劫にしていた…

勝手にうなだれた私は思いだしたように口を開んだ…

「あ… むしかして「ポン？」

カードの会社はビルの九階、その窓から待ちかまえていたようにカードが頭からつま先までぴっちりした格好で顔を出した。

ブラウンのスーツに真っ赤な色眼鏡が、ネット詐欺と言つ世間體と相まって、インテリ…かと思わせた。

「おつ…か、カードじゃないか？黄泉の国から戻ったよ？しかし、御覧の通りさ…何か服はないか？」

「ツコリとカードが笑い…社内に入つていった…

「うひの会社のTシャツと短パン…コレで良い？」

Ｔシャツをペンシルと張り、私に見せてくれた…

筆記体で胸元に“chief”と書かれた紺色のＴシャツ…と紺色の短パン

「うーん…突っ込みどころがないなあ…でも、ありがとう…逆に助かるよ…」

カードは私に笑顔を絶やさず、手を振っていた
(^ - ^)ノシ

空中で粘膜の上から着るTシャツと短パンは…カルテのときと同じ感じがした…

「また来るからな?」

「うん、わかってるよ~! テ「ポンも…頑張つて…! テ「ポン…タオルもあるんだけど?」

私はタオルも貰い
夜の空をヨタヨタと飛んで、あのクルクル回るベッヂのある部屋へ
向かった…

私はどうなつてしまつたのか
：

カミカゼの隠匿

なんとか家までたどり着いたが……

そこには思いも寄らない客人が待っていた……

スキンヘッドに一本線のもみあげ……カミカゼだ

真っ黒なつなぎのビニールスーツを着ていたせいか最初、生首かと思わせた……

「こつもの時間までテロポンを待つてたよ……」

そつなんだ…幽体の頃、唯一避けていたのは私自身の家だったのだ…

何故かクルクル回るベッドへの異常なまでの恐怖心からか、忘却に至っていた…

それに伴い…カミカゼも忘れてたつてことだらうか?

カミカゼ…

「…カミカゼ？変なことが起きた…私はカミカゼのことを忘れていた。そんなことはないんだが、ふと気になつた…おまえはいつから私達のホーミーだったっけ？」

カミカゼがニヤニヤし始めた。

やつときましたか？テコポンさん。と言わんばかりの表情だった

「フフフ…思い出したみたいだなテコポン。タツちゃんの幹部は
初めからテコポン、カルテ、カード、カーニバルだよ…私がタツち
ゃんについたのは、ここ最近の話だ…」

やつぱりだ…
カミカゼだけおかしい…

すべてタツちゃんより、早く優れた答えを出していた…
タツちゃんはスポーツマンだと黙っていたが…

本当にやつなのか?

「テコポンが幽体だったとき、一年の時間を費やすように町を動かしていたのも私だ…テコポン…ホー!!」とは狭苦しい集まりだな…」

そんなまさか…幽体だったときだって…

「カミカゼ…おまえはいつたい何者なんだ？」

カミカゼはモコモコと体を変容させ、あのカーニバルがなつて見せた悪魔になつた…

「私が完全体…カーニバルが失敗作だよ…半宇宙人と界隈では呼ぶが…宇宙人と同等の力を持つていて…そして使いこなしていた…デコポン…一年の間、私は生き残る道はないかと模索していたよ…」

半宇宙人…

いや、それより何なんだ？生き残る道とは…

「カミカゼ…言いたいことはわかる…そして完全体なことも…しかし、だのに何故生き残る道などと言つんだ？」

カミカゼは私の住んでいたアパートを見上げ、また私の方を向いた。

「終わつたんだよ…タツちゃんは宇宙人に逆らいすぎたんだ…どんな歴史にも宇宙人の存在は確認されないけど、宇宙人に逆らつたと言つ記述もないんだ…それだけで十分だろ？デコポン…お前が私にかかつた呪いを解いたみたいだ…カーニバルみたいに…」

フシューッ…

嗅いだこともないような何かが腐った臭い…

それよりも田の前にある肉の塊はおそらく…カミカゼだらうか?

カーニバルの最期

私は無気力のまま、部屋にたどり着いた…

ドアノブをさわると、スタンガンほどの電流が勢いよく体中に流れ
た…

氣絶しかけたが…何とか持ち直した。

「こんな酷い静電気くらうなんて…ひひ…」

ガチャツ

ドアが独りでに開いた
もはや、宇宙人のものってわけだ

私は躊躇なく、部屋に入った

部屋に入ると一年前と全く変わらぬ部屋があり、ベッドも変わらず
クルクル回っていた

ザーッ

テレビがつきっぱなしだ…

砂嵐が映ってる…

「か、カーニバルお前…何だこれは？」

砂嵐から突如、廃校らしき映像に切り替わった…

タツちゃんが何かを見て驚いている

「タツちゃん。カミカゼはまだしも、俺やカードより情報遅いぜ？」
この死体の山はカーニバルが一人でやつたんだぜ？」

カルテが自慢げにタツちゃんに説明していた…

「タツちゃん仕方ないよ?ハツタリも底をついたんだ。カーニバル
が宇宙人にもなつてさ。力つけなきや…さ?」

カードもタツちゃんを宥め始めた

「ば、馬鹿言つな……マーダーだる?コレは?しかもかなり名のあ

る奴らじゃないか?「

カーニバルはお手上げだ。と言わんばかりに両の手を軽く挙げ、目を瞑り、首を横に振つた。

「ハツタリは底をついたが、まあ…実力は元からあつたんだよ…名のある奴らとは言え、ゴバンザメみたいなもんさ…タツちゃんと言うクジラに張り付いてたに過ぎないね…」

タツちゃんは、カーニバルには何も言わなかつた…

「火いつけるよ?それなら、こいつらの死がバレた方がタツちゃんダサいわ…」

カミカゼがライターに火をつけた。.

ザーッ

また砂嵐だ。.

「やあ……デ「ポン」…こんな醜い格好で御免よ？俺さ。カーニバルさ。今な？宇宙人に捕まって、ラストレターなるビデオレターを作らされてんの。」

悪魔になつたカーニバルが画面に映つた…
私の方を直視した形で座らされている…

背景はあのコロ内のようにだ…

「宇宙人との契約の中に悪魔になつたら、腐つた肉の塊になるつて
条件があつたんだよな…デコポン…お前つて奴は…まったく調子狂
うぜ？俺がやつた11人の人間も…これで浮かばれるんだろう？デコ
ポンはあの夜来なかつたしな…わかつてたんだろう？タツちゃん以外
には教えといたはずだぜ？宇宙人つつつて信じられなかつたんじや
ないか？ハハハッ…デコポンらしい…なつ…」

フシューッ

カーニバルはどうやら、本当に死んだらしい…

明るみにもでない。闇の中の闇の取引…

私がタツちゃんに会って面会に行つただけで、タツちゃんは無罪放免、釈放された…

「あつ…」ハハハ…「テコポンありが…とハ…助かった…ハハハ…
夢かなあ？」

変わり果てたタツちゃんを直視できなかつた私…

最近気づいたんだ…

大切なものが最初からわかるものじゃないって…

でも、だからって最初つから大切なものって後からわかるなんて言つても見つからないんだって思った。」

愛おしくも短い時間の中で…私だけが生き残ったのか…

「タツちゃんっー今度のアのコンサート行くわよ~。」

タツちゃんは顔がとろけたみたいに笑顔になつた…

「トコポン……ありがとう…」

あんなに頼もしかったタツちゃんが何だか弱々しく見えた…

でも、やっぱり頼もしいのかもな…

「タツちゃん…これからどうじょうかな? 私なんて一年も死んでた
んだ…宇宙人に生き返らせてもうつたけどね」

タツちゃんはいきなり、私から離れうずくまつて震え始めた…

「ハハハ… 宇宙人は… いません…」の世には… いません…」

私はたまらず、空を飛んだ…

「ほら、タツちゃん？ 宇宙人と仲良くなるべきだよ？」

それを見るなり、タツちゃんは顔を真っ赤にし、立ち上がった
右手をピストルみたいにして、左手で右手を握り込み、私に向かつ
て撃ち始めた…

「バーンッ！－バキューンッ！－バキューンッ…『ゴポン…宇宙人
がいなれば、三発は要つたな？フハハッ…』

私はそのまま飛び去りたかったが、タツちゃんの前に降りたつた…

「そうさつー！タツちゃん。私は復活したんだ！…』

タツちゃんはとろけたみたいに笑ってくれた…

型連れの命

「タツちゃんは施設に入った…国が管轄だから安心と言えば安心だけ…ホルマリン漬けになつたようなもんだ…」

何といつか、「嘘く」といつばは「嘘く」よつな独り言がポツリとでた…

タツちゃんは国営のリハビリテーション学院なる施設にて、国が是非ことひひじへ、まるで私から手を離れるやつに連れて行かれた…

私はすっかり、「空を飛ぶ」とが口癖になつてこい…

自慢とか優越感とか、そんなんではない。…
ただ、生き残った使命感がそいつさせていた。

「空なんか飛べたって…もう俊哉君も驚いちやくれないよな…」

定期的に宇宙人に拐かされるが、その度に

ソラカラトブナー！

と怒られる…

何やかんやでタツちゃんは宇宙人からも認められているのかと…

悪魔になつて死んでいつたカミカゼやカーニバルへのリストペクトと
タツちゃんみたいに地に足を着けた地球人というか…

ジレンマは感じずには居れない…

そんな憂鬱な私の前に、何とやらなゲストが現れた…

「し、俊哉君…」

私の独裁といふか排他的空域に…

あの俊哉君が現れた

「『コポン』つーじの町はもうダメだ！…」

『コポン』は一ツクネームだし、ホーリーだと思ひながら…

私は俊哉君にムツとしていた…

to be continue

いつそ俊哉君を叩き落としてやろうかと思つほど、私の無念は増大していた…

「デコポンっ！…宇宙人が町の人間すべてにデコポンにしたのと同じ質問をしてるんだ…今まで沈黙を保っていた宇宙人が何故なんだい？」

同じ質問って何だ？

前置きにデコポンにしたのと同じ質問と同じも書いたのか？

「…で？どんな質問なんだい？」

多分、空を飛んでいる俊哉君を見る限り
あの三択だらうけど…

「馬鹿だな。デコポン。質問と言つたら質問だよ。デコポンになりたいか。カードになりたいか。。カーニバルになりたいか。だよ。」

?

三択は三択だけど何か違うな…

「僕は『コポンになりたかったから、『トコポン』って言つたのや…』

し、俊哉君。

私は俊哉君を誤解していたみたいだ…
宇宙人も趣向を凝らしてるんだな…

「でも… カーニバルを選んだ町の人達が… 腐つて死んじゃったんだ… いっぱい… カードになった人達は… 目を… 目を抉った…」

カーニバルを選んだら、宇宙人となり
私は知らなかつたが、カードを選んだら見たいものを見る力が手に入るのが…

それよりも… 宇宙人はこの町をどうする気なんだ…

「そんな… 俊也君。 それじゃデコポン… 私を選んだ人間はどうなつたんだい？」

俊也君が親指を立て
後ろを指した

「打倒宇宙人…それが『コポン派』…」

士気を帯びてゐるであらう…最早戦士と呼んでいいだらうか?
打倒宇宙人を掲げる戦士達が空に浮かび上がつてきた

勢い立つ△ポン派の戦士達に対し、空から光線が乱発した…

「ハモヤーハー。」

「あ、一つ。」

「モモーハー。」

光線は戦士達に被弾し、蒸発させた。100人はいたであろう△ポン派の戦士達がすべて討ち滅ぼされた…

「ワレワレハウチュウジンダ。」

私達の滞空地点より、更に上空から宇宙人が言い放つた：

「で、デコポン派が…空が飛べれば宇宙人に勝てると豪語していた
デコポン派が…殲滅した…」

小学生だといふのに、一ト前の軍師のように落胆する俊哉君…

私よりも高齢な士氣を持つていたんだな…

「良いんだ…俊哉君…これで良いんだ…誰に憧れようと人智を逸することは許されないことなんだよ？素晴らしい教訓じやないか？」

俊哉君はがっかりした顔で私を見た…

「それは宇宙人を油断させる為の演技ですか？デコポン…宇宙人が一人、二人油断したつて、船内にはたくさんの宇宙人がいたんだから…実力で勝つしかないんだよ…」

俊哉君…君つて奴は…

「俊哉君… 私からはもう云つことはないが… 俊哉君もまだ若いんだから、命は大切にすべきだよ… 少なからず… 宇宙人から与えられた力で宇宙人に勝てるだろつか?」

俊哉君はムスッとした

「だつて… 友達に飛んで見せたら、宇宙人の奴隸のお出ましだとか… 売星奴だとか… 酷い言われ方されて… 宇宙人が憎くなつたんだもん… ううつ…」

泣き出した俊哉君を目の当たりした私…
俊哉君は私に憧れたせいで虧められたのか…

「 ゆ、許せんつ！ 俊哉君のお友達はなんて奴等なんだ！！」

俊哉君は泣きながら首を横に振っていたが

私には何が何やらわからなかつた…

俊哉君は反対したが、私は意を決していた……

空を飛ぶことはとても素晴らしいことだ。それを蔑むなんて、正気の沙汰じゃない。

「俊哉君……大丈夫。お友達はきっとわかつてくれる……」

私は俊哉君の通り学校に行き、俊哉君のクラスに入つていった……窓から

飛べると云つことが、いかに素晴らしいことをアピールしたかっ

たからだ。

「やあ、俊哉君のお友達つ？私はデコポンだよ？」

「啞然とするお友達だったが…」

「氣のせいいかやけにでかい上に何といつか…異国情緒漂うといつか…」

「俊哉の仲間か？俊哉は太刀川さんを裏切ったから仕方ない…私達は外国から来たから、生活年齢が俊哉と違つても仕方ない…」

身の丈60寸を優に越える黒人の男が私の首根っこをヒョイッと掴み、持ち上げた…。

「わっ…ちょっと…ちょっと…」

私は窓から放り出された…

「私達も良い大人だから、俊哉のことは私達に任せればいい…ビバ
スーパーマン」

そのまま黒人は窓を閉めた…

俊哉君は特殊な学校に通っているんだな…
もう少し話を聞いておけば良かった

私はまた、無心に空を飛び、心に開いた穴を塞いでいくのであった

⋮

フリゲ

最近、自負ではあるが鳥と話せるようになった…

よつな氣がする…

空を飛ぶことばかりがすべてではないが、私は空を飛ぶことしか脳がなくなってしまったようだ…

「よこじとわ。トコポン。空は想を歓迎してこのよ」

と隣を飛び去る鳶が話しかけたよつな氣がした…

俊哉君が何故首を横に振っていたのかが、情けないタイミングで閃いた…

「傷口に塩を塗るようなもんだ…俊哉君には悪いことをしたな…有り難迷惑、ノーサンキューってやつか…」

俊哉君の安否を気にしながらも、どこか違う場所。新たな始まりを求めて私は空を漂っていた…

こんなときFFFに拐かされないかな…

今ならわかる。タツちゃんが日頃使いもしないような臭い言葉。

”

life goes on”なんて使っていたかを…

私だってカードみたいに見たいものが見たいし
カーニバルやカミカゼみたいに宇宙科学を使いこなしたかった

「ん？いや、待てよ。しかし、そうなつてくると…カルテの奴は空
も飛べないんじゃ…だいたいあの状態でどうやって断つたんだ？気
になつてきた…」

私はやつかみついでに、カルテの勤めるメンソーレラブに向かうこ
とにした…

私の正義感や理想など語るまでもなく、
越えられるはずの小さな壁を最大の理由にして、空を好き勝手飛び
回っていたにすぎない…

「それでいい……いや、それじゃなべうちや困るよ……」

何羽もの雀が私にそんな風に語りかけてきた

…ような気がした

「…カルトのやつ、タツちゃんみたいになりたいんだどうつか? フフ
フッ…」

私はどうなつてしまつたのか… まだまだ人生を楽しむ氣のようだ

軽蔑していた

私はほろ酔い気分でもあるかのように、ネオン街に降りたつた…

カードの勤める会社「チーフ」に行く気力はないが、カルテのやつ
が勤める? キャバクラ「メンソーレラブ」に行く気力はあつた…

「いらっしゃいませーつー！ メンソーレラブの女の子達は粒ぞろ男
ですよーつー！ 是非是非、メンソーレラブにお越し下さい。」

いたいた… カルテのやつやつてるな?
相変わらずのもじやもじや毛で… フフフッ

少し飛び回つて見せるか？

「はあいへ皿さん。メンソーレラブは最高のキャバクラだよーっ！」

私がネオン街を飛び回り、カルテのやつの真似をしてみた…

密引きつて奴だ…

カルテのやつキョントしてるな…

「おひおいつ！..」「コポン！降りてこい！」は風俗街だぞ？宇宙人は軽蔑されるに決まってるだろ？まして、能力者じや…」

予想に反して…

ネオン街の人並みもカルテと同じことを物語っていた…

「そんなバカな…タツちゃんがつ…タツちゃんがつ！正しいわけないだろつ…」んなの馬鹿げてるつ…一度と手伝つてやらな
いからな？」

私は身を翻し、ネオン街を抜けようつと高層度を上げた…

ヒュンッと向やうものが飛んできた…

「『 ハ 「ポンつー！ そりゃ 有り難いぜ？ もう一 度と来るなつーー！」

私の身を掠めたものは… カルテが飲み残した缶コーヒーの缶だつた…

「あ、危ないだろ？！ 空き缶を… 少し中身が入つてゐるからコーヒー
が体についたじやないか？ 後でベトベトになるだろ？」

ヒュンシとまた何か飛んできた… 鞄だ…

私の左太股に命中した…

「風俗なめんなつ……テロポンの力なんか要らないんだよ……はつ

…」

振り返りもせず、私はネオン街から抜けた
一番高いビルより高く飛んだからだ…

「な、何が風俗なめんなつ……だ…馬鹿げてる…」

そつ……私は一度と来ないつもりでいる……メンソーレラブになど一度
と…

絶対的死

カルテに冷たくされ、私は空をトボトボと漂つばかりだった…

「何なんだ？カルテのやつは…自分だって粒ぞり男とか、ばぜてた
くせに…なんだなんだ…」

私の思考は陰鬱に堅く、暗く懷古的に、逆行催眠を喰らつたよつこ

人生の後悔つてやつばかりを強引に引き当てていた…

強い人間だと思われたい…トラウマを凌駕した外觀にとらわれない
ソサイエティブなスーパー・マンになりたい…

「はっ……そうだ……そうだったんだ……」

私は自分が現世にて、スーパーマンと呼ばれていることに気づいた…

一度死んだというのに…

「つまりだ……カーニバルもカミカゼも蘇るんじゃないのか?…私だって蘇ったんだからな……そうだろ?…宇宙人。」

私は空から空を見上げ、宇宙人に尋ねたが…

返事はなかつた…

「何なんだ… 宇宙人は？ カーニバルやカミカゼは宇宙人の驚異となるから封じられたわけか？ なんて臆病な… うつ…」

意識が半分乗っ取られたような…

意識が乗っ取られたことを認識する意識が半分あるって意味だが…
朦朧とする中、脳髄に刻まれるような声がした

「オマエニオクビヨウアツカイサレテハコマル… ナノデ、セツメイ

シテヤロウ。ニクノカタマリトカシタオマエノナカマデモアツタフ
タリノハンウチュウジンハ、ウチュウジントシテシンダノダ。ウチ
ユウカガクラモツテシテモ、ヨミガエリハシナイ。ワカツタナ?
オマエノシコウハスベテカシシカニアル。ソレヲワスレルナ。」

突き放されたように半分の意識が戻ってきた…
私はスーパーマンではなくパーソンだったのだろうか?

頼りない力瘤を作つてみたが…怪力ではない私はパーソンですらな
いか:

底力

boom

boom

誰かからメールが来た

それは、カードからだつた

『僕が見たいものを見通す力があることは、知ってるよね？済まないとは思つたんだけど、デコポンの未来が見えたんだ…デコポンは力に目覚めるよ…宇宙人は空を飛ぶ力を与えた際デコポンのミトコンドリア細胞にデコポンの意識を繋げている…つまり、デコポンは火の戦士さ…』

ひ、火の戦士や…って言われても…

『唐突すぎるよ?火の戦士ってなんだよ?』

私は俊哉君の顔が一瞬浮かんで消えたことに気づいた…

火の戦士なら、俊哉君も喜んでくれるかな?

象を起こすのさ…因みに空が飛べるのは重力を感知する働きがある
ミトコンドリア細胞が宇宙人の科学力によつて騙されているからな
んだ…デコポンのミトコンドリア細胞は無重力だと信じ込んでいる
ことになるね…』

ミトコンドリア細胞に重力を感知する働きがある…のか?

宇宙人がどこから騙しているかは知らないが…
カードに見たいものを見通す力があることに疑いはないようだ…

『おっおいつ！（。 。 ；）体を騙して飛んでるってわけか？ヤバ
いな…火の戦士なんて尚更だよ…』

私はでも、既に普通の人間の生き方とはほど遠いものになつていて…
どんな現実から逃れられたとしても…その変貌からは逃れられない…
…そんな気がする

『デコポン…僕も特殊な能力を持つていいからわかるよ…99%デ
コポンは火の戦士の力に目覚めるだろうけど…たった1%だけ逃れ
る術があるんだ…』

あるのか?

火の戦士から逃れる術つてやつが…

『それは?1%だよな?できるものなのかな?』

私は必死そのものだつた

『底力に達しないことを…それしかないよ。』

底力：か

わかるような…わからないような…

私はすでに、火の戦士に一步また一步と近づいているような気がして、震いがしていた

決して真似しない為

俊哉君…私はすでに次の段階に入ってしまったよ…

そんな気持ちで俊哉君に会いに俊哉君の小学校へ向かつた…

校門前まで来た私だが、門は閉められていた…

飛び越えたかつたが…私はよじ登り、校内へ入らうとした…

しかし、こう言つたとき空を飛べると言う人間を超越した能力がワントンポ判断を鈍らすことに、まず気付くべきだった…

空を飛んで封鎖された門を飛び越える」とはできるが、よじ登つた?

違つだろ…

「おこひー。おまえ何してんだ? 壊して奴めーー!」

がたいの良い竹刀を持った…恐らく体育教師だらうか?

私を発見するなり、歯みつこってきた…

「し、俊哉君に会いに来ました…ヒーローって言つか…相談役つて
言つか…」

よじ登り途中の情けないポーズはあまりに説得力に欠けていたが…

問題はそこではなかつた…

「俊哉か？鳥になつた俊哉か？あいつはもうすぐ別の場所に引っ越し
すから、余計なことはせんしてくれ。」

な、なんだと？

空が飛べるから…空が飛べるからなのか？

リストラと変わらないじゃないか…

厄介払い？臭いものに蓋？

俊哉君に支持者はいないのか？

私は悲しみの中に確かに怒りを覚えた

「許せん！！腐った教師が！！学校経営の為に、年端もない外国人ばかり抱え込みやがって！！俊哉君こそ大切にすべき生徒だろ？！」

よじ登り、掴んでいた門が溶けた…

しまつた…まさか

「ひつ…ば、化け物。エックスマンは日本の話だつたのか…」

私は場が悪くなり、飛び去りつとした…

「これでも喰らえーー！」

教師が投げた竹刀が私の寸前で燃え尽きた…

唖然とする教師を後目に私は飛び去った…

火、水、土、風、雷

火の戦士の力に目覚めた私は、次の段階などと俯瞰する余裕もなくなっていた…

「火の戦士か…やつてしまつたな…」

私は後悔の念は拭い去れず、ボケツと空を飛んでいた…

カードからメールだ…
気付いたみたいだな。私が力に目覚めたことに…。

『テ「ポン…力に目覚めたみたいだね?』

やはりか…

カードの千里眼は誤魔化せなかつたみたいだ…

『そつなんだ…ついつい怒りを抑えきれなくて』

私だって底力には頼りたくなかつた
だが、仕方ない、自分の運命だと受け止めるしかない…

『そつか…デコポン…火の戦士になつたデコポンに伝えたいことが
あるんだ。宇宙人が飛行能力を与えた人間のうち、デコポンを除い
て、後四人戦士がいるんだ…それは、水の戦士、土の戦士、風の戦
士、雷の戦士なんだ。デコポン…相性によつては争いは避けられな
いよ? 存在し合うだけで互いを否定する係属にあるから…』

な、なんだなんだ?

宇宙人が飛行能力を与えた人間は私以外、消滅したはず…

『そんな。カーデよ？私は誰と相性が悪いんだ？』

覚えたての力で使いこなせるかもわからない火の力を一体どうすれば…

『テコポンの為に言つと、水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士の順に相性が良いんだ…逆に言つと戦闘において『テコポン』にひとつ苦手な順番と言つてもいいね…一概には言えないけど…』

つまり、仲良くしてないとヤバい奴順つてわけか…

やりにくいな…空を呑気に飛んでたからだらう…ツケが回ってきた
か…

『なるほど…水の戦士が一番私の能力を抑えてくるんだな…しかし、
カード…私に苦手意識はないんだよ…』

booom

booom

おそらく、カードからの返信だろうが、私はそれを無視した…
そう、すでに私は水の戦士に対しライバル心を燃やしていたからだ…

意外な水の戦士

はて…水の戦士って誰なんだ?
だいたい、争う意味はあるのか?

私は我に返り

カードからの返信を読むことにした。

『バカはよせ! 水の戦士はデコポンより後に生まれた模倣戦士だから…しかも…タツちゃんなんだ…自分ではネクトンBと名乗り始めたけど…すでに水の力を使いこなしてるよ…』

たつ…タツちゃんが水の戦士?

訳が分からぬ…

ネクトンBってなんだ… ネクトンAは誰なんだ?

私は震える指でカードに返信を打つていた

『タツちゃんが?み、水の戦士なのか?他に私の知り合いが戦士になつてやしないか?教えてくれ』

送信した…

『タツちゃん以外は知らない奴らさ…しかし、宇宙人には関連性が

見えてこないし……いずれ僕にも見えるよくななるだらうね……』

『…タツちゃん以外はまだ見ぬ…なんとやらか…

『わかつたよ。とにかくタツちゃんに会いたいな。居所知らないか?
?』

と送信した直後、何km先だろつか?

突如水柱が上がった

温泉でも掘り当てたか?

…いや、これは運命だよな

「タツちゃんだつ！」

私は水柱の上がる方へ
猛スピードで飛んでいった…

boom

カードから返信が来たみたいだが
…

発汗作用の疑い

水柱に近づくにつれて、空気が乾燥していることに気付いた…

なるほど…そもそもミトコンドリア細胞の働きによる現象だから…
大凡、大気中の水分を集めたってことかな？

しかし、凄い集中力だ…

水柱が徐々に勢いをなくし、姿を消していく…

そこから、人影が現れた…

「タシ タシ やんか… やつぱつ」

タシ タシ やんの姿を見つけるなり、ホッとする私だが…

「あれは誰だ？」

真っ黒に田焼けした身の丈50才ほどの老人がタシ タシ やんに手を翳した…

「ハハハハ… ハ…」

タツちゃんは頭を抑え倒れ込んだ…

「タツちゃん！水の戦士が土の戦士に適うわけないやい？汗くさい
技使いやがつて、土の戦士は能力の無効化、還元化だつてアレほど
言つたじやないか？」

バタリつと倒れたまま動かなくなつたタツちゃん：

奇しくも銭湯屋の前での戦い…

私は恐る恐る

タツちゃんと土の戦士の対立する場へ降りていった…

「…タツちゃん!大丈夫か?」

タツちゃんはピクともしない…

「おや?汗くさ戦士の仲間か?さしづめ風つてここだらうな…タツちゃんは今、ミトコンドリア細胞の使いすぎでダウンしてるがいざれ回復するだらう…超回復を繰り返すことにより能力を高めているんだよ…汗くさいねえ…」

ち、超回復！

タッちやんめつ…自分ばっかり格好付けやがって。

私もなんだか死ぬ氣でやる気が出てきた

「フフフッ…土の戦士だったかな？私は風の戦士ではないっ！！火の戦士だあーっ！！」

両の手を前に突きだし、気合いを込めた…。
徐々に熱を帯び始める両の手…

「…はて？攻撃はまだかな？」

土の戦士は完全に私を嘗めていた…

来る…これは火が出るぞーーー！

「喰らえーつーー！」

思つたより巨大な炎が両の手から飛び出した…

「ハガキヤーつー…！」

土の戦士は炎を全身に浴び倒れた…

「キャーッ！人うが燃えてるう…！」

今までどこにいたのやら…通行人が野次馬と化し始めた…

炎を喰らつた土の戦士の皮膚は爛れ赤黒く変色していた

「そんな…無効化する力があるんじゃないのか？」

私は怖くなりその場から飛び去った

雷の傷

飛び出した…

自分の犯した罪から只、只逃れたいが為に…飛び出した…

「仕方ないだろ?水の戦士の次に私と相性が良いわけだから…なあ
?」

しかし、鳥も飛んでいない…焼き鳥にでもされると思つたか?

「はあ…」

昼下がりの真ん前から来るような… そんな錯覚をした口差しが、少しだけ味方をしてはくれたが…

ため息は深く積み重なる雲のように心を戒めていた…

「よう… 浮かない顔して浮いてんね？ 人には言えない傷跡は… 人に押しつけちゃえればいいさ… 人は… 人と人とは電撃で繋がってるのさ… 僕は雷の戦士タツ… よろしくな？ お前だろ？ 土の戦士を焼いたの？」

60寸はないが、その分タフな体つきで短パン一丁で私の前に立ちはだかっただ金髪のモヒカン頭の… 雷の戦士タツ…

鎧海よつ白い…

「お前が言つとおつなり…焼いたのはお前だな…タツ…雷の傷を持つ戦士よ…」

タツは一本とられた。とわんばかりの表情を浮かべ立てくはくした…

私はその脇をするりと飛び抜けた…

曇下がりの陽が射し込む方へと

風の戦士には氣をつかる

「お、おこり……待て待て……十の戦士の1じとは良こよ……ひとつだけ忠告をせといてくれ。風の戦士だけには氣をつけろ~今までいろんな奴に会つてきたが、あそこまで羨望の眼差しで見てきた奴はいいな~…『氣をつけろ~?』

タツがわざわざ私を呼び止め、伝えてくれたこと…。

にわかにはわからぬことだ…

「変な忠告をするな…!~短パンマンが…~」

また唖然とするタツ…

私は猛スピードで飛び去った…

余計な考えはないにこしたことはない。
風の戦士だつて同じ戦士じゃないか?

羨望の眼差しにせよ。タツが筋肉質で色白だからだろ…

そうだつ…カードからのメールを見よう

『タツちゃんは今、銭湯の前で戦闘中さ。土の戦士」と大宇宙タナ
ーは水の戦士にとつては、天敵だつてのに… タツちゃんも好き者だ
よね…』

タツちゃんにとつては、土の戦士は弱点になるのか… だよな。タツ
ちゃん苦しかったよな

土の戦士はタナーって言つんだな…

『カード… 私はそのタナーを燃やしてしまつたんだ…』との成り行
き上致し方ないことだつたが… して、カード? 風の戦士について少
し知りたいんだけど。良いかな?』

メールを送信した…

ビリビリッと体に電流が走った…

「何が短パンマンだつ？何が！－びっくりして、一瞬思考停止した
んだぞ？精神健康上全く持つて良くない事態だ」

タツが私を追つてきた…

「やり争いは避けられそうない…

「やつてくれたな？タツ…力を持つ者がその力を力を持つ者に使つたとき…それは戦いの合図を意味する」

タツもまたミトコンドリア細胞の特殊な働きによって、電気を生み出す雷人間だらうが…

タナーでわかつたんだ…

体は生身だとね

「おひおこ…敵意はないんだよ? 軽い[冗談]じゃないか?」

私は静かに首を横に振つた…

そして左手を翳し、炎を放つた

「ハヤヒー！」

タツは赤黒く爛れ、真っ逆さまに墜ちていった…

私は自分が冷血な人間になつていてことに気づいていた…

「タツよ？お前の理論が正しければ…傷を負つたのは私だな…」

私はその場から飛び去つた…

Your wind there is .

私はひたすらに、飛び続けた…

こんな自分になりたかったのか？

火の力だつて本当は欲しくなかつたのに…
こんな自分なんて…

「突風だ…君? 怪我はないか?」

怪我はないが…空中で話せる人間は他に考えられない…

真っ黒なタキシードにシルクハット、鼻筋から生えてきたようなまん丸のサングラス…

身の丈は55寸と言つたといじだろうか?

風の戦士か…

私は反射的に右手に力を込めていた…

「突然の突風だつたが…心配ないよ…。怪我はない…風の戦士だな？」

風の戦士らしき男は首を横に振った
じゃあ、何だつて言うんだ？

「違うよ…君が火の戦士さ…僕が風の戦士である前に風が吹いたの
さ…鎌鼬だつて…多分だけ吹くかもね…」

薄気味悪い奴だ…

明らかに風の戦士じゃないか？
面倒くさい…試してやるよ

「鎌鼬？結構じゃないか？巧い具合に吹ぐと良いなつ…！喰らえつ

…！」

私は力を込めていた右手から炎を放った

「うわやーっ…！」

風の戦士らしき男は火達磨になりながら、墜ちていった……

「お前は誰なんだ！？」

墜ちていいく風の戦士らしき男に質問を投げかけた。

「ぼ、僕はター・キー…か、風の戦士…そ」

ターキーか…

防衛本能の引き起しした過ちだらうが、今はまだ罪の意識に苛まれ
ない…

私の自尊心は慣れない場所へ迷い込んでいった…

ターキーは上司

カードの返信でも読んで、気持ちを落ち着かせよう…

確か風の戦士について聞いてたんだったな…

『実は風の戦士ことターキー氏は僕の会社チーフの上司で、なんて言つかなあ…人間のできた人って言うか。頼りになる人でさ…実は、僕に宇宙人を紹介してくれたのがターキー氏なんだよなあ…デコポンにもいすれ、逢わせたいなあ…良い人だよ…仲間想いのさ』

バタンッと携帯を閉めた…

私は勢いに任せたあまり、カードの上司に当たるターキーまで燃やしてしまったのか…

「ウワアーッ！」

私は雄叫びを上げた…

不甲斐なさすぎて、我を疑い始めたのだつた…。

なんで…なんで私のような者が生きているんだ…！

最良の人格者を慕うにしたようなものだ…
自分の未来を自分の手で潰したようなものだな…

「トコポン…まだだ…まだ俺を倒してないだろ?」

聞き慣れた声のする方を向くと…タッちゃんがいた…

「全戦士を倒して初めて光の戦士となるんだ…だが、いくらくトコポンとは言え容赦しないぜ?」

タッちゃんはぐっしょり濡れたTシャツを脱ぎ捨て、ぐっしょり濡

れたGパンをパンパンと叩いて見せた…

光の戦士って何だ?

私は訳も分からず、考えるよりも先に炎を放っていた…

「フハハハツデコポン!! 私は水の戦士ネクトンBだつ!! そんなチンケなチョロ火。かき消してくれる…うぎやーつ!!」

タツちゃんにはビックリ…勘違いしていたんだ。

水を自在に生み出し操れる能力ではあっても
肉体そのものは生身だつてことに気づけなかつたんだ…

「や、さすがだ…テコポン…光の戦士よ…最後に一つだけ教えとい
てやる…くつ…風の戦士を倒しただろ?アレはカードの上司で最高
の人だ……」

赤黒く爛れたタツちゃんの皮膚は見るに耐えず

私は余所を向いてしまった…

「田を逸らすな？—テコポン！—don't miss itだろ
？…フハハハツ」

タッちやんは真っ逆さまに墜ちていった…

私はまだ意味も分からぬまま…涙が流れていることに気がつくばかり
だった…

涙する私を揺すり起こすように、宇宙人の声が頭蓋骨を内側から叩くように響いた…

「オメデトウ…デコポン。キミハコレデヒカリノセンシダ。ワレワ
レノナカマトナツタ。ステノウチュウノチカラヲイノママニアヤ
ツルコトガデキルヨウニナツタワケダガ、ワレワレニハサカラワナ
イホウガイイ…ホウソクニモトヅイタチカラデアルコトヲワスレル
ナ？アト、アクマニハナルナヨ？ワレワレモオマエモソレハオナジ
ダ…カイテンスルベツドイチダイニワレワレのナカマヒトリブンノ
イノチガツカワレテイルノダ…」

宇宙人の長たらしい話が、その一言一言が頭に蓄積されて行くのが
わかつた…

「わ、私が宇宙人と同等の力を手に入れただと? やつた! それなら、やつた! 早速タツちゃんの怪我を治して…いや、戦士達すべての怪我を治したい!」

頭の中には、宇宙人が微笑んでくれたような…

そんな気がした…

が、私はまだタッサヒヤーの癪を治すため、地面に降りたった。

タッサヒヤーは痺せに倒れ込み、グツタリしてこうした…

しかし、どうして重つてもいいやつて治つたひ…

と疑問符を浮かべたのも束の間…瞬時に閃いた。

私はタッサヒヤーを呼び起しあよひにタッサヒヤーの体に触れた…

タツちゃん タツちゃん タツ

「おひっキミ? 何してるんだ?」

や、やばい警官だ…

どうなんだ? 警官に宇宙科学なんて言つて通用するのか?

「いや… 喧嘩ッス。单なる… 大丈夫ッス。こいつタフだからすぐ治ります故」

そんなこんな出鱈田を言つてこるつひたタッちやんの傷は癒えた…

「うううう…お、俺は死んだか? デコポン…デコポンが治していくのか? 光の戦士つてやつか…あの拳銃…一年前のやつのお返しだな…これでキャラだよな?」

私はそれに快く頷く…

奇跡を田の当たりにした私とタッちやんだったが…警笛は止まつた
くの無関係だった…

「怪しい奴らだ……署まで来てもらひおつか？」

私はそのときパッと光を放った

「タツちゃん今のうちに飛んで逃げよう…」

私はタツちゃんの返事を聞くまでもなく、飛び立つたが…

それが…それが…タツちゃんとの最後のやり取りだった…

心から諒めて

「逃げゆつ……♪ポン逃げゆつ……お前がこの町を守れつ……」

私が言つのもおかしな話だが、あの時のタツちゃんは冷静さを欠いていた…

「だ、ダメだ……タツちゃん…」

光から覚めた私はタツちゃんが警笛にしがみつき、動きを抑えているのが見えた…

「や、やめろ！公務執行妨害で逮捕されるの？」

い、いけない…

ビリしたらいいんだ…

タツナちゃんは…タツナちゃんは…

何なんだ！！

「や、そんな口の力が欲しいな！タツナちゃんがやめよーーー光の戦士なんていらなー！」

私はタツちゃんに向かつてありつたけの想いを込めた…
体から、絶対的な自信は消え… 寒気がした…
自分は死んでしまつ… そのくらいの恐怖が私を襲っていた…

「うおーおつ…おーおつ…あーつ…」

タツちゃん… イヤだ…

私はタツちゃんを知らなすぎたのか?

宇宙人の言ったとおり

これは宇宙において絶対の法則なのか?

タツちゃんが…タツちゃんが…悪魔になつた…

「ひつ…ば、化け物…わ、私は悪い夢を見ているのか?」

警官がタツちゃんを振り払おうとしていた
いつそう強く…頑なに…

「タツちゃんつーー!」

フシユーッ…

タツちゃんは…タツちゃんは…死んだ

私の光の戦士と並ぶ称号と共に…

Mr·escape? you ain't simple.

私は空をぶかぶか浮かんだままだつたが、悲しみに暮れている場合ではない。警官はまだそこにいるのだから、タツちゃんが身を挺してまで作ってくれた絶好のチャンスだよな。逃げるなら今しかない。

「でも、まあしかし。肝心の警官は肉の塊になつたタツちゃんを見て吐いていた……

「デコポン。オマエハヒカリノセンシノチカラヲタチカワニアズケタキデイルヨウダガ、マダオマエノモノダ。ウチュウジンニハノウリヨクヲアタエルチカラモソナワツテイルカラナ。キヲツケロ。キヨウクンニシロ。」

また、宇宙人が話しかけてきた。

な、何が教訓だ…タツちゃんの偉大さを知らないからそんなことが
言えるんだ…

タツちゃん」「さあ今、誰がこの町を守るって言つんだ…

「つかーつーあ、悪魔になつてやる…」

私は有らん限りの邪氣を集め、悪魔になつとした…

：

：

「オマエガアクマーナルノハタイヘンムズカシイ…アキラメロ…」

警官の嗚咽がこだまする中…私はなんて純真な心を持ち合わせたのか?などと、思いたくもない自己顯示を余儀なくされた…

「コポンなんて遊びじー呼び名もイヤだ…

これほどの邪氣でさえ…こや、この程度の邪氣しかでない…自分が
イヤだ…

私は見たいものを見る力を使い。

タツちゃん以外の戦士の居所を特定し、傷を癒した…

「私は搖るじゃない…そうだ。決して揺るがぬ天使となつたのか…タ
ツちゃん…この町は良くなるよ…」

無理をしていたのは、自分でもわかつてゐつもりだ……だけど、悪くなるわけじゃない……タツちゃんだつてそれを知つてゐるから……

私は現金な奴だ……それで良い。

まだまだ警官はゲーゲー吐いていりようつだが……
私は無情にもタツちゃんを置いて飛び去つた

血口判断に対する宇宙の法則

「ダメダ。デコポン…タチカワニチカラヲアタエタコトハダメナコ
ウイダ…」

定期的に私が感傷に浸るつとすると

宇宙人が話しかけてくるようになつた…

教訓つてやつだ…

そして…

「トコポン…思い立つてのベッドで一晩過ぐかよ…」

私の家の回転するベッドには、魔羅となり死んだタツちゃんの命が
注ぎ込まれた…

その前に、元から私の回転するベッドに居た宇宙人の魂は…俊也君
のところへ行つたとか…

行かなかつたとか

タツちゃんは毎日毎日私に話してくれる…

なんたる禮々しい待遇やいり…逆に笑けてへるやいり…タツちゃんの魂は生き続けていた…

クルクル回転するベッドがまるで映写機みたいに、ベッド上に映し出される立体的なタツちゃんの虚像はなんだか、切なくて慣れるのに何とか時間が要りそうだ…

「タツちゃん…毎日毎日タツちゃんは…無茶ばっかり言つて。どうせなら、カミカゼとかカーニバルの魂と譲り合つたよ…」

などと愚痴を口にしたつ…

まだまだ前途多難のようだ…

「チガウゾ? デコポン。コレハキヨウクンヲワスレナイタメノワレ
ワレカラノハカライダ。タチカワハシンダノダ…」

宇宙人がタツちゃんより先に諫めてくる…
ああ…私は心底ナーバスだった…

宇宙人となり、宇宙科学の力を持ち合わせても
使い道なんて本当にはない…

それを無理強いして使おうものなら…

「『テ』『ポン。カミカゼやカーニバルのこと忘れないでくれよ？お前
は力を正しく使つべきだ。」

私には不可能だと思えていた、悪魔化の手段が色濃く見えてくる…

勘違いしていたのか…

私もタツちゃんもカミカゼやカーニバルも

変わらぬ野心を胸の内に隠し持っていたんだな…

「チガウゾ? テコポン。オマエガアクマーナルカクリツハウチュウノチリヨリヒクイ。キョウクンニシロ。キョウクンニシロ。キョウクンニシロ。」

リピートにリピートを重ね……宇宙人は私に宇宙の法則なるものを授け賜れた……か？

それなら、タッちゃんなんて忘れないよ……

それでも

宇宙人の洗脳は私の脳内に刻まれつつある……

「つじと」

タブーに興味がある…

何をいきなりと思うだらうが…

毎日宇宙人に頭ごなしに正されていると…気が滅入る

考え方が悪いのか？

悪夢のような無限のループに陥るようなタブーがあるはずなんだ…

だからこそ、タブーを避けたい

タブーに興味があるのはそのためだ

いや、待てよ？

興味がある程度ではダメだ…

違うか…興味程度に在るからこそ丁度良いのか?

ダメだ…タブーらしきタブーも見当たらないのに…タブーを発した
ような無限のループへ入り込んでいる…

タブーを考えていただけなのに…

「ダマレッ!! オマエガムゲンノループニハイリコンダトイウコト
ハ…ワレワレモハイリコンダトイウコトダ…シカシ、ソレハエネル
ギーノネンシユツガタダシクオコナワレテイルトイウコトダガ…」

じゃあ、ダマレッ！－ではないだろ？

しかし…私が無限のループに入り込んだからエネルギーが正しく捻出されていると認知されるだけであって、

エネルギーは正しく捻出されている…よな？

私は人の死に痛みを感じなくなっている…
タツちゃんともベッド越しに話しているし

カーニバルもカミカゼもどこかでエネルギーを生み出しているなん
て…

無限のループに入り込み、淀んだ無限地獄に突き落とされるよう…

「ナンデモイイガ、イミモナクソラヲトブナー！」

そう…私は空を飛びっぱなし…

無意識のうちに私はそれでも、空を飛ぶことに罪悪感を持つていた

宇宙人もそれに気づいているんだろうな…

ピカッ!!

♪ロ♪ロ♪ロ♪ロ...

青天の霹靂とでも言うべきか…
これは…タツの仕業だな…

私は何かを忘れている…
しかし、私はタツに会いに行くのだった

誰が争い

私はタツの元へ急いだが……もう一人浮上してきた……タナーだ……

「タツ……わかつてないんだろうかい？俺っちはおまえ等の攻撃は無効化するけど、傷までは癒せないぞい？」

体中に電気を帯びるタツは、タナーの意見には納得いかないようだ……

「話の判らない人だな……私の傷を癒したのはターキーではない……あなただつ……！」

タツのその台詞を聞くなり、タナーはグッと手を突きだし、どす黒い土塊を生み出した…

「ターキーが傷を癒したに決まつとるやい！－この土巨人で少し懲らしめるしかないな？」

土塊が見る見るうちに巨大な人型を成していく…

ゴーレムってやつか？

「なるほど…偶像対決がお望みか？ならば、出よ雷鳥！…」

タツが電撃を巧みに操り、巨大な鳥を作り出した。雷鳥か。

「止めたまえ！！私こそそなた達に癒されし戦士だ！炎に蝕まれ、息絶え絶えに死を待つばかりだった私を癒したのはそなた達ではないか？！その偶像対決。私も肖ろう…出よ…風魔神！！」

ターキーまで現れた…

ターキーは風で魔神を作り出したようだが…肉眼では見えない…

「黙れ黙れ黙れ！！俺っちは怒ったぞ！ターキーよ？癒すだけ癒して、知らんぷりとは、格好付けてるおつもりかい？やれつ土巨人よつ！」

土巨人が風魔神を殴つた…
突風が吹き荒れる…

「や、やりましたね？風魔神の鎌鼬で切り刻んでやる…！」

細切れにされたタナーのゴーレムが崩れ去つた…

「やつぱり…やつぱりお前が俺っちを癒したのか…」

すると、タツが生み出していた雷鳥が姿を消した…

「そのようだな… ターキー素直になれとは言わないが… 見苦しいほどだ。一ヒルにも程がある。気高い人格者とばかり思っていたのに…」

すると、ターキーもビリヤリ風魔神を収めたようだ…

「良いでしょ… 私が被りましょ… あなた達のどちらかが私を癒したのは一目瞭然ですが… 仕方なりませんね…」

3人は一瞬私の方を見た…

「光の戦士が生まれた以上…あれも生まれる。」

タツがそう言い放った頃合いに3人は各自が方へ散つていった

助言の意図

タツの助言が示唆すること……私はそのことばかりで、頭がいっぱいだつた……。

あれって何だ……

タツちゃんが死んで、水の戦士が不在だから水の戦士が新たに生まれるのか？

それとも、私が火の戦士から光の戦士となつたから、新たに火の戦士が生まれるのか……

飛行能力のある人間に限るはずだ……

はつ！

まさか…見たいものを見る力…つまり、ステイールアイの持ち主が何か能力に覚醒したとしたら…

違うか…

ステイールアイには靈的な干渉が作用されていて、実像を映し出すものが眼のレンズと共に鳴り、情報を得る仕組みになっているわけであり…

そこから、超能力に発展するわけがない…

宇宙人の干渉を許すわけにはいかない！

勝手にダイレクト送信しやがつて
私だつて光の戦士となつた以上
超能力という分野が開けた以上

また…宇宙人か…

「イヤ、ソレガセイカイダ…スティールアイヲショジスルモノガア
ヤツルチカラ…テレパス、サイコキネシス、テレポート…ナドリガ
クテキンカンショウヲムシシタノウリヨクヲミニツケルダロウ…」

「うわーっ…」

ドガーンッ！！

遠方で何かが爆発した…おそらくヒートだろ？…

私にもわかるよくなつてきたんだ

宇宙人の正体

勢い余り、UFOをサイコキネシスのよだもので爆破した私は…
頭でも吹き飛ばされやしないか？

強制的に肉塊にされやしないか？などと

高を括っていた…

スティールアイの力で、他の宇宙人、つまりUFOを確認することはできるのだが…

「コロスナラコロセ…ワタシハコトシデヨンヒヤクナナジユウハウ
サイニナル、モトチキュウジンダ…コノセンレンサレタカラダヲテ
ニイレルマデニヒヤクネンハカカル…ヒヤクネンハヒカリノセンシ
トシティキナケレバナラナイ…アクマニナツタモノヲアマタニミテ
キタガ…ハナシテモキリガナイホドダ。コロスナラコロセバイイ…」

…言葉に詰まり、本来なら出るはずの出るはずであろう想いが胸の内で弾け、体中に不快感を知らせる…

宇宙人は寿命にさえ勝てる…500年近く生きていても、まだ自分の年齢を把握している…

地球人と宇宙人の境界線は100年もあるのか…

途方もない幸福が訪れ、そこに殺意があることさえ、宇宙人には凡庸に思えていたのだらう…

「キヲツケロ…ワタシハチキュウジンカラウチユウジンニナツタガ
…サイショカラウチユウジンダツタウチユウジンガ…サイキンチキ
ユウジンニナツタ…ツウショウ、ツチノコウシャダ…」

土の勇者…

土の勇者つて…火の勇者とか居そなだが…

「カンチガイスルナ？ユウシャトヨバルモノハ、ツチノコウシャ
シカイナイ…ホラ、デコポン？コロスナラコロセ…コロスナラコロ
セ…」

膝がガクガク震えていた。土の勇者とは？

いまいちインパクトには欠ける出逢いだが、決して油断ならぬ存在
生粋の宇宙人にして、地球人になつた土の勇者。

すべての戦士達の根元。

宇宙科学の立案者……いや、創始者か……それに当たる生命体

地球上に引っ張られたとでも言ひつか？

「やあー、テ」「ポン。私が士の勇者タベルだ！　1000年の時を経て、やつと…やつと血肉となれた。宇宙岩石から生まれたタベルだ！…よろしくな？セックス最高！…」

士の勇者タベルは私と同じ身長でありながら恰幅がよく…何より全裸だった…快活な笑顔が眩しく…頬のてかりが印象的だった…

七つの価値を行き来する勇者

私が剩りの出来事にたじろいでいるのを、察してか否か
勇者タベルが更に話しだした

「テ」「ポン君のおかげでやつとコンプできたよ？昆布じゃなくてコンブ。コンプリートの意だよ？意つて意味の意であつて、胃袋の胃ではないよ？つて胃袋を意味するつて意味じゃないし、胃袋を意図するようなことは言つてないよ…わかるだろ？僕は嬉しいんだ…地球人になれても。フフッ まだまだ言い足りないけど…本題に移つても良いかな？」

私はされるがまま頷くよつた…木靈といつか…なんといつか…呆氣にとられていた…

「あつ、そうかい？じゃ話すけど、僕ら宇宙人？まあ、今のところは地球人だけど元は…元来は宇宙人だつて意味でね？僕ら宇宙人？が提唱…いや、君には腹を割つて話そう…僕らにとつてはそれが常軌であり、抗うべきではない価値なんだ…たとい、どんな気分になつてもそれから逸脱することはないんだ…」

私はただ頷くばかりだった…
この空氣に文句があるとするならば、照りつける真夏日つてところだらうか？

館海なら真っ赤になるほどだ…

「ゴホン…それでは、本題を今から話すからね？本題つて言ひつのはさつきも言つたけど、決して逸脱することはない絶対的な常軌だから…。何度も言つても足りないくらいだ…僕らのように岩から進化

したわけじゃないだろ？君達はさ…。それが強みなのはわかるんだけど、デコポン…君の場合は既に光の戦士なんだから、今から話すであろう本題は君が腐った肉畜生にならないための最善…いや、最低限の手段だからね？そういう僕なんかはわざわざ地球人となつたわけだから、かなりのギリギリな宇宙旅行を体験してるわけだけど…良いかな？」

前言を些か訂正したい…一目置いて、今文句を言われているのは他ならぬ私だ…

勇者と言うよりは皇子か？

肝試し…に似たものだろ？カジュアルに縮小された皇子の軌道

…そして、現在…私は少し笑ってしまった…

「なつ…デコポン！笑い事じゃないんだぞ！？…とても、とても大事な話を今からするんだぞ？君が光の戦士になつた以上血肉の騎士

がウイルス化するんだ…それに憑かれた人間は血肉の騎士となり、
我らが宇宙人を駆逐せんと動き出すんだ…きっと君の仲間であつた
カーニバルやカミカゼ…そして、タツちゃんまでも…血肉の騎士と
いう八番目の価値により…敵となり蘇るんだ…」

えつ？タツちゃんが蘇るのか？

カーニバルも？カミカゼも？

私は嬉しくなつた…

「八番目の価値ってなんだい？」

勇者タベルは我に返つたように私の質問に答えた。

「そ、うなんだよ。世の中には、宇宙人、地球人、火の戦士、水の戦士、土の戦士、風の戦士、雷の戦士と七つの価値があるんだ。デコポン…君が八番目の価値に達したおかげで私は土の勇者となつたわけだけど、その代わりに血肉の騎士という異常再生を可能とする我らが敵視する…本当は管理したいんだけど…ウイルスが生まれたんだ…」

こ、これは本題ではないか？

私は八番目の価値であつたのか…

それより…血肉の騎士はウイルスなのか…
どんな注意をしたらいいのか…

「おひと、マザーシップから呼び出しだ…テ「コポンまた会つ日まで…血肉の騎士の感染者には気をつけて、君が感染する心配はないからね？」

やつ言つなり、勇者タベルは田前で姿を消した…
ワープだらうな…

何が本題だったのだろうか？

私は、とりあえず頭を整理するためにも戻してしまった…

ミルキー騎士道

血肉の騎士とはウイルスのことであり、決して…私達のよつた人間を指すものではないのだが…

具体的に血肉の騎士とは何なのだろうか?

私は家路につき、事態の深刻さに気づいた…

ベッドが止まっている…ついにはオーラを放っていたであろうベッドが止まっている…

「 もう…始まっているのか?」

タツちゃんが…タツちゃんが復活した…

タツちゃんが黄泉の国から帰ってきたんだ…。

「ハルヤー…」

突然の叫び声にびっくりした私は尻餅をついた…

声のする方を見ると、タツちゃんが窓の際にしゃがんで立っていた

それは猿か蝙蝠かのような狡猾な格好で…これが俗に言つて悪魔の仕業ってやつかと思わせるほどだった…

「デココボオン? 辛かつたぜ? デコポンみたいなつまらない奴とのベッドトークな日々はさ。俺にだつて宇宙人になる準備つてのがあつたのによ? 台無しだな? 台無しだな… デコポンよ?まあ… 良いよ。俺は知つての通りホーミーを大事にするからさ… デコポンとはこれつきりにせよ、血肉の騎士のクレイジーさを教えといてやるよ…」

そつまつと

タツけやんが目を瞑つた…

禍々しい空氣が辺りを包み込んだ…

なんだ… 前にもこの空氣感じたことあるな…

「ヒツヒツヒツ…久しぶりだね？私だよ鬼婆だよ？」

私のベッドの上には…あの帰り道に見た鬼婆が…

…そんな

私はすでに血肉の騎士に出会っている…

「さらばだ」テ「ポンー。」

タツちゃんは去つていった…鬼婆を残して

消極的な一面

鬼婆とは言え、私はこの地獄から一度抜け出しているんだぞ？
しかも、今となつては光の戦士だ…

恐れるに足らざだな…

「ヒツヒツヒツ…あんたが力を付けているのは百も承知だよ…あんたがあの時別行動をとらなければ、カーニバルのような半端な宇宙人では血肉の騎士の感染者11人も殺せなかつただろう…血肉の騎士のウイルス性はそのようにできているからね…私もかつては宇宙人だつたのさ…」

鬼婆が…宇宙人だつた

…まさか、血肉の騎士の感染者は回転するベッドを介して、移動で

れるのか？

「な、何が鬼婆だつ！それは私の恐怖心ではないか？実体は何なんだ？」

鬼婆は包丁と研ぎ石を取り出し、研ぎ始めた…

「そうだよ…恐怖心とは人の記憶、血肉の騎士はそれを元に再生させる…カラスが光り物を集めるように…もつと正確に…もつと鋭敏に…さて、光の戦士よ？恐怖心を拭い去ることなどできようか？光の戦士から生まれた恐怖心はさぞ屈強な血肉の騎士を産むだろ？…ヒツヒツヒツ」

鬼婆…鬼婆の言つたとおりだ…

「の辺りは既に血肉の騎士に侵されてゐると言つても過言ではない
わけか……

「さあへ述む」と心怖心を生み出しあつて……

……どりする。

「血肉の騎士……捕らえたりつ……」

鶴の一聲とでも言つべきか？

鬼婆が砂になつて消えていった……勇者タベルだ……

「デコポン…消極的構えとは中々見所ありだな？血肉の騎士は恐怖心を喰らうインテリジェンスウイルスであるから、消極的な恐怖心ではうまく働かない…が、しかし退治とまでは行かないな…確固たる強い意志を持ちたまえ。君はそうあるべきだ。」

なぜかまだ、全裸な勇者タベルは的確な指摘を私に授けた…

「ありがとう… 勇者タベル。心強いよ…」

勇者タベルは深く頷いた。

「当然だとも。『デコポン』…血肉の騎士とはあまり長くは続かないものだ…恐怖心を喰らうと孤独に押し潰され…やがて一塊の文字通り血肉の騎士に成長するんだ…それを打ち倒すのが7つの価値と我々というわけだ。つまりだ。『デコポン君は恐怖心に負けてもいいんだぞ?ハツハツハツでは、さらばだ!』

相変わらず、本題を濁す男だ…勇者タベル。

私はしても、相変わらず良しとすることにした…

遅れる幸せと奪われる不幸

私のような、素晴らしい戦士の抱く恐怖心はより強力な血肉の騎士を生み出すよつで…

勇者タベルの計らいで、光の戦士としての行いを制御されてゐる…

「悪く思わないでほしい…」しかしで巧い具合に調整して血肉の騎士を生み出す方が早く退治し終えるんだよ。」

と…わざわざベジドを回転させて、勇者タベルは通信してきた…

優しい嘘つて奴だな…

いぐり、勇者タベルと言えども私の生み出す恐怖心…そこから生まれる血肉の騎士を毎回退治していくは身が持たないと云つわけだな…

定期的に怖い話でもしてくれるのだろうか？最終的な血肉の騎士になるまでに一体何回怖い話を聞くのだろうか？

なんだか腑に落ちない甘さだが…私の潔さが伝わるなり良こだらう…

「因みに…テコポン君。僕も血肉の騎士なんだよ？七つの価値を行き来する際に絶対血肉の騎士の働きが不可欠なんだ…」

出た…怖い話が…

「でも大丈夫だつ。デコポン君が平常心を保てば…私と俊哉君を含む五属性の戦士達が血肉の騎士に感染した者達を退治するからね？君の出番はそうだな…最後に一塊となつた血肉の騎士を討つとき…スパートライトを頼もうかな？ハツハツハツ…冗談だよ。血肉の騎士が完全に駆逐されるまで、光の戦士は秘密だな？」

恐怖心…なのか？
私は打ちひしがれていた…

「むむひ、強力な血肉の騎士が現れたようだ。デコポン君安心して
いておくれ?」

ベッドの回転が止まり、勇者タベルの虚像が消えた…

私もまた血肉の騎士のように孤独に押し潰されかねないような…

どうなっているんだ?

警察犬的座敷犬

強力な血肉の騎士…
気になる…

「あーっ！頭ではわかってても氣になつて仕方ない…見るだけで
も良いから見せてくれー…」

スティールアイを使い勇者タベルの同行を追つた

これはどうやら、チワワの目線のようだ…飼い主に抱き抱えられて
いる…

と題された看板が「デカデカ」と掲げられた会場……

そこに現れたガチのヒール……

「タツちゃん！？」

飼い主がびっくりしてチワワを落とした

「今、ピュンちゃんが叫んだわっ……プードルなのに……」

チワワかと思ったのだが……プードルだったか……

水たまりに移る犬はしかし……田のクリクリした小型？のチワワだった

熱狂的なファンなんだろうな……

私は田線を変えた」とした

飼い主の田線ijoいわ…

「タツちゃん…あい、イヤだわ…私まで…」

どうやら、光の戦士のスティールアイは強力らしく、脳内の言語野
まで刺激してくるようだ…

それはさておき…

タツちゃんを水の球体に閉じ込めているのは後哉君…

タツちゃんはすでに常軌を逸しながらも、人間のとき一番強かつた想いを頼りにSOPに会いに来たのだろ？…

SOPのコーダー、ピュンが自慢の腹筋を見せたときタツちゃんが壊れたらしく…

まだピュンは腹筋を見せてる…

水中で溺れゆくタツちゃんはそのまま通り抜けてソクンのよつね虫に変わり…

やがて、光る砂となり天に昇つていった。.

俊哉君が丁寧にお辞儀した。.

ピュンはせつと、トーシャツを下ろし、俊哉君に向け拍手をしていた。
すかさず観客タベルはピュンやその他のメンバーに握手を求めていた。

タッちやん。.

腹筋を見たら天に召すべきだよ…

私は先程のチワワ（プードル？）の飼い主から涙を流させてしまったようだ…

「あれあれ…どうしたのかしら？涙が止まらないわ…」

私の目線に戻ったとき、私は既に大丈夫になっていたが…

カー二バルの凱旋

地肉の騎士に感染し、醜い姿に変えられたにせよ…

カー二バルのような美意識の持ち主は不死鳥フェニックスとなるらしい…

カミカゼは風神…

タツちゃんに至つては、控え目な性格と搖るがない意志をえなければ、ネクトンではなく、水竜リヴィアサンだったと言うが…

地肉の騎士とは…

「…と言つことだ。デコポン。おまえは御子様だつてことさ。勇者タベルも鬼になつたり天狗になつたり、やりたい放題なのが実状だぜ？」

手乗り文鳥サイズに小さくなつた不死鳥カーニバル・

私の手のひらに頻りに乗りたがつた…

「まさか、デコポンが巨大化できないとはな…健全な奴だ…」

私がタツちゃんの早すぎる死を受け止めきれず、うずくまっていると窓際にフェニックス…炎が立ちこめた…

それがカーニバル…現在火の戦士の臨時の代行を行う勇者タベルのお墨付きの感染者?だ…

私が火の戦士のまだつたら…戦うことになっていたかもな…

「巨大化はできないよ…カーニバルはホント、柔軟だよな…」

カーニバルは私の手のひらから、そつと浮き上がり私の眼前までやつてきた…

「柔軟ねえ…ハハハッ デコポンもそう言えば、あの世から蘇った口だつたな…デコポン? ここだけの話だ。地肉の騎士を有効利用し管理する技術が完成しそうなんだ…勇者タベルが言ってたよ…」

有効利用か…

なんたらの戦士だのなんだの七つの価値に依存するよりは…ってことか?

いやいや、弱気になるな…
勇者タベルは何か秘策を練つている…

私にはわかる……カーニバルが今もっとも注意すべき相手だ

次の世代

「うわあーっ竜だ！！水の…水竜だ…！」の町はびりつちまつた
んだ！…」

館海の声だ…

私は慌てて窓から顔を出してみた…

館海がヒョウ柄の海パンを身につけ、あたかも素潜りでもするかの
よつな意気込みで、水竜を仰いでいた…

水竜…タツちゃんが蘇ったのか？

「ワハハハッ 漂いぞ？俊哉君！…しかし、僕のブリザードには勝てまい！」

上空には勇者タベルと俊哉君。雪男となつた勇者タベルは冷氣を水竜に放ち、カチコチに凍らせてしまった…

「あ、ーつータツちゃん酷こよー？僕のリヴァイアサンを凍らせるのはなしだよ？」

悔しがる俊哉君を見ると、なんとも…ゲーム感覚といつか…ポケモンやデジモンではないかと思ひほどだ…

呪文のよいなものを唱える俊哉君……

「ブラッドバック……ブラッドバック……マイペイン……ブラッドバック
……ミートグッバイ……」

それを聞くなり、俊哉君は両腕を突きだし口を開いた。

「早く、魂抜きをするんだ。既に涼んでもらおう……竜の形をした氷の彫刻さ。」

そ、そ、そ、うだー！館海が近くにいるが大丈夫か？

「おーいっ！俊哉君。びっくりしたじゃないか？」

館海が詠唱中の俊哉君に手を振り声を掛けている…

「ブラッドバック……マートグッバイ……マイペイン……マートグッバイ
…」

しかし、まだ詠唱中のよつだ…

まいい…館海は無事みたいだし…なんだか、人も集まってきたみたいだな…

なるほどな…俊也君そのものがリヴィア イアサンになるのではなく、水の戦士の放出される水力に血肉の騎士を含ませることにより、リヴィア イアサンとなるわけか…

「俊也君…オーライだ。その辺で詠唱は止めたまえ。」

俊也君は構えを解き、力尽きたのか、ぐつたりと地に引き寄せられ

てこつた…

「 しゅ、俊也へーん…。」

それを受け止めた鎧海の両腕の骨が外れた

「 ハヤカウ — ハー。」

転がすよひに俊也君を地面に置いた鎧海の両腕は力なく垂れ下がり、

館海は痛みに悶絶していた…

カミカゼの要求

あの後、勇者タベルは脱臼した館海を見事に治して見せた。

「『テ』『ポン。』いくら温厚そうに見えても、過去に繋がりのあるホーミーに見えて、地肉の騎士に感染したことになりはない……彼らは欲望のままに人間に戻ろうと躍起になつていてるが……それこそが己が身を怪物化する最大の要因であることに気付かないんだよ……」

勇者タベルは窓辺までやつてきて、私に注意を促した……

勇者タベルも地肉の騎士を使つてゐるのに
俊也君も……

よっぽどの自信があるようだ…

カーニバルにせよ…カミカゼにせよね…
私はホーミーを裏切らないぞ。

「カーニバルやカミカゼは、平常心を保てているよ。大丈夫さ。」

勇者タベルは残念そうに首を横に振った…

「違うんだ…『テコポン』私も『テコポン』と同じ意見だ。いや、そうだった…同じ意見だった。しかし…ターキーがカミカゼに倒され、私も渋々ながらカミカゼに風の戦士の称号を与えるを得なかつた…肉の塊となつたターキーはいつ、地肉の騎士に感染するやもわからぬからね…カーニバルにお願いして焼いてもらつたよ…」

そんな…ターキーが悪魔に？

カミカゼが風の戦士の代行に？臨時の？

「そ、そんな…ターキーほどの男が悪魔になるなんて…カミカゼは一体どんな手を使つたんだ？」

勇者タベルは肩を竦め、私の返事にも答へず、背を向けた。

「『トコポン』私も血肉の騎士に感染しているんだ。気をつけたまえ」

飛び去つていく勇者タベル…

置き去りにされたような…

私は宙ぶらつんの気持ちを預けられた局のようだった…

净化の必要

俺は雷の戦士タツだ…人よりも痛みを知り、雷の戦士になつた…

仲間を幾人も集め、宇宙人と交渉したこともあつた…

血肉の騎士についても、誰より早く取り組んできたつもりだ…

俺の左腕は血肉の騎士に完全に乗っ取られている…雷神の腕だ…

俺は地球人として、雷の戦士として血肉の騎士を駆逐した後は左腕を切り落とすつもりだ…

「雷の戦士タツ。君には敢えて伝えるが、君の座を奪う優秀な血肉の騎士の感染者が…狙っている。彼の騎士は麒麟に化ける…僕としてはやはり、地球人に勝つてほしいんだが…血肉の騎士とは宇宙人が持つ特有の細胞でね…」

勇者タベルと名乗る血肉の騎士の化身…地の勇者。俺には真実を話しているらしいが…

「わかっている。勇者タベル…おまえは絶対的な中立の立場だと言いたいんだろ？俺らは血肉の騎士を受け入れ、破滅と再生を受け入れてきたじゃないか？記憶にないのか？どんなに仲間が宇宙人になつても、俺は地球人に拘つた…。左腕を雷神に譲り渡すことでな…野暮は止してくれ」

勇者タベルは薄気味悪く笑つた…

「違うっ！－違うぞ？雷の戦士タツ！－左腕を捨てただと？僕は生粋の宇宙人のさらに上を行く、隕石だったんだ。僕こそ、隕石である絶対的存在価値を捨て、宇宙人となりミトコンドリア細胞を注入された最低な地球人さ！－」

勇者タベルは私の口を右の手で塞いだ…

「雷の戦士タツよ。お前は全身全霊、雷神となり、これからやつてくれるであろう麒麟を倒せ！－」

体中に血肉の騎士が入り込みミトコンドリア細胞を食い尽くし始めた

「へ、ウガガア…アアア…」

気を失つた俺を地面にたたき落とし

勇者タベルは飛び去つた…

フフッ… 宇宙人になつた奴らはすべて血肉の騎士に感染しているが、
それは宇宙社会においてタブーとされている。

血肉の騎士を取りただされるのは、俺のようだ
痛みを知りすぎたようだ…

ジャオの練成師

血肉の騎士に感染した者は、体が変質し化け物となる…

しかし、必ずしも前例のある化け物とは限らない…

一 つ田小僧にせよ、のつペうせひせひせよ、三姥にせよ、

前例があれば、歴史に身を委ね振る舞つゝ…ひともできよつが…

田の前にてのジャオの練成師といづゴムの化け物…

血肉の騎士に感染し、ゴムの性質をひたすらに研究しつぶした結果。
不老不死の域に達したといふ生き字引。

「光の戦士も、もう何代目やひつか？」

ジャオの鍊成師は私に耳朵を引っ張らせてみせた。

伸びた…

「わはは、『ゴムやから…伸びたら縮むのではなく、伸びたら元に戻るさよ。斬りれても燃やされてもな…』

パツと手を離し、耳朶を弾き出した…

ジヤオの鍊成師は元から福耳であり、元に戻った耳朶はふくよかに
ブリーブラ揺れていた…

「それってじつはじゃないか?『ゴムは伸び縮みするものだよ。』

私は謹慎生活による陰鬱な感情も手伝つてか、否定的になつていた…

いや、それでも恰好の話しだと相手だと思つたのも隠しようがない事実だ

それ故に、些か問題発言だつたことは否めない…

「おまえさんは、血肉の騎士のことをわかつとらんな… 人間はトランプタワーのように組織立つひ弱な生き物やが、血肉の騎士を備えた人間は思いのままに体を操れるんやよ?」

そう言つなり、ジャオの鍊成師は帰つて行つた…

ゴムの化け物など今まで前例がない。：

「ほほり… 噂では左手のみの感染だと聞いていたが、どうやら完全に感染したようだな…」

私の住む家の前では、雷の戦士の座を狙つ。 麒麟に化ける、自分のことを雷速の騎士と謳つルーチン

それを迎え撃つ現雷の戦士タツが熱き戦いを繰り広げていた…

タツは二つの間にやらい、雷神と化していく、これではビハリが勝つても感染者が雷の戦士といつて元になる…

「不可抗力に過ぎんつ！お前と一緒にするなつ！雷槍つ！」

タツは蒼い雷の槍を生み出し、投げた

田にも止まらぬ速さ…ゼノンの矢とでも言ひべきか？

ルーチンの右肩に突き刺さった…

「ハーサード…」

空中戦ながら、ルーチンはつづくまつた…
ルーチン…雷速を謳いながら、なぜ避けられないのか？

「付け焼き刃の雷属性の馬並野郎が…いくら素早く動けても、使いこなせなければ意味がない。」

わなわな震えてつづくまつたままのルーチン…

「ヒョウヒョウヒョウ…安心しなされ、ルーチンよ。麒麟に雷の戦士の座を『与えよつや?』

スッと雷の槍を握ったかと思つと槍は霧のように消えてしまつた…

ジャオだ…ゴムの鍊成師ジャオが現れた

「ジャオ様…忝ない。ジャオ様の忠告通り、雷槍を投げてきたのに

…」

ジャオはルーチンの側に立ち、タツを見据えた…。

「勇者タベルにこれ以上好き勝つてやられては困るのだ…どうせ…タツ。このルーチンを馬として使ってみる気はないか？」

突然のジャオの要求に啞然とするタツ…
しかし、思い出したよつにタツは嘲りだした

「ハツ…それじゃまるで茶番だ…わざと俺の雷槍を受けたみたいじやないか？」

ジャオは田を瞑り首を横に振った…

「お主も感染して口が浅いよつやな……雷神とは言え心力のある靈いや、わしから見れば電力でしかない……」

ジャオは腕を伸ばし、タツの左腕を掴み、掻き消した…

「ハヤヒー！」

「つかまるタツを余所にルーチンに跨るジャオ…

「左腕…返してほしくばわしの元へ来るんやな…良い返事を待つて
おるやい?」

ジヤオはルーチンの腹を蹴り、ルーチンは駆け出した…

「…づくまるタツを私はただ見守るばかりだった…」

A i d e a b o r n s r e a l l y

「で、テコポン…」、腕が…

悲痛な眼で私を見つめるタツははずくまい、左腕を抑えていた…

どうしたものか…

鍊成師ジャオはタツに対し、取りにくるように言つていたし…なんか位置的に勇者タベルと同等か、はたまたそれ以上の力を持つてそうだし…

「わかったよ…左腕を再生せらるから…」

私は窓越しに、タツの左腕をタツの細胞に呼びかけ、治した…

何というか…血肉の騎士が手伝つてか。異常なまでに手応えがなかつた…

「わっほいっ！…ありがとう…」テコポン…なんて凄いんだ…光の戦士って奴は…血肉の騎士にも感染してないのに…」

キャラに似合わず、喜び勝るタツだったが…

本当は痛みを拭つ程度になるだろ?と踏んでいたのだが…

理想通りの形が反映されてしまった…これではジャオの鍊成師に顔
が立たない…

「てこひぢりーーー!」

私は、タツの左腕にある催眠を掛けた。

『タツの左腕よ?お前は血肉の騎士を取り除かれ無になつたんだぞ

すると、みるみる内にタツの左腕は消えてしまった…

「すまない… ジャオの方方が私より数段上のようだ… 良いじゃな
いか? タツ… 君はジャオに呼ばれているんだぞ? ルーチンと手を組
み雷の戦士を更なる高みへと昇華すべきや…」

タツは一瞬、私の行いを見抜いたように見えたが… すぐさま自分を
取り戻したようだった…

「……だな。『テコポン』危つくターキーのように、ジャオへの怒りで悪魔になるところだつたよ。ジャオの放つ。諷し、は風の戦士のプライドを著しく傷つけた……いや、この話は光の戦士である『テコポン』には不必要な事実だ……『テコポン』。ありがと」

やがて、タツは飛び去つた。私はターキーの死を著しく悔やんだ……

カードの上司であり、人格者であるターキーがなぜ悪魔になつたのか…
カミカゼもジャオに選ばれた勝つべき男だつたのか…

私は不甲斐なさを憂鬱でかき消すようにしそうへ、タロを見ていた

…

if Turkey's back?

テルハーデンハズハス

シテルハズハズハス

夜も深まる頃、私の家の窓が揺れた。
誰かがノックしているようだ…

誰だらうか…タツちゃんかな？

タツちゃんがまたもや、蘇つたかな？

ないか…タツちゃんは絶対的死である肉塊となつた後蘇つた訳じやない…
アレは…

「ヂテコポン。俺だよーー！カミカゼだよーー！開けてくれーー！」

カミカゼ。

カミカゼも絶対的死を『えられている…

俊哉君のリヴァイアサンでわかつたんだ…

血肉の騎士に感染したものは…もはやこの世のものではないのだと

あれは、私の知るカミカゼではないのが現実だつたんだ…

私は狸寝入りをすることにした…

「テコポン…お前の力があれば、ターキーを蘇らせられるって、ジ
ヤオ様が仰つたんだ…。テコポン詳しい話がしたい。開けてくれ!
！」

テコポンデンドン

テコポンデンドン

すまない…

力ミカゼすまない…

お前なら私でもまだ悪魔にできる…

「ていやつーー！」

私はタツの腕を治した要領で血肉の騎士を探る「」のよいつなものを
見つけていた…

催眠されても…

『カミカゼよ…お前は悪魔だったじゃないか？風神ではなく…悪魔
だったじゃないか？』

シヘドンズンズ

…アーヴィング

窓を叩く音が止んだ

カミカゼが悪魔になつたことは確かだが、やけに静かな…

「ハサヤー…」

静かだな…と思えば
これだ。カミカゼが戦慄き悪魔となつた。

「うがあーつ…」トコポンッ…あ、ーつ・「ややーつ…」

私の力があれば、ターキーは蘇るらしいが…
そうだな…予想はつく

血肉の騎士はすでに、この町に蔓延してゐるから、塵となつたター
キーを具現化することはできなくもない…

だったらなんだ?

だったらなんなんだ?

私はカミカゼが風の戦士になつたことに憤りを隠せなかつた……のだ
うつ

風神から悪魔へスライドさせることとは容易だつた

カミカゼの断末魔も止み……私は窓を開けた

「 やあ？ ハポン。」

そこには、カミカゼのらしき肉塊と勇者タベルがいた

「 期は熟した。血肉の騎士が行えることはもうないに等しい… テ ハ
ポンのおかげだな？ よくぞ… 心の田で見抜いたな。血肉の騎士に感
染したものは、どんな形であれ根っからの化け物であるとな… やが
て、最終段階に入るが、先にも言ったとおりテ ハポンは何もしなく
て良い… では、また…」

勇者タベルはカミカゼの肉塊を焼き消し、飛び去つていった

+の勇者として…

勇者タベルが何の気なく、ベッドを回転させ私と更新をとつてきたり、テレビを使って、妖怪退治の様子を見せてくれたり…

私は光の戦士といつ枠に欺瞞され抱くほど…例えるならハンズフリーな貴族か

頻りに狩りに出たがるプリンスか。と言つ氣分だった…

「『トコポン…僕は』トコポンに一つ嘘を吐いていた。」

テレビから勇者タベルがヨニコーンに跨り、タツヒルーチンを従え（どうやら、ゴムの練成師ジャオとは話は付いたようだ）私に語りかけてきた…

しかし、テレビと言つのは、視聴者には反論の余地のない一方的な通信手段であり、昨今では視聴者の心身や自尊心への気配りを徹底し、一方的でありながら、あたかも電話機でもあるかのような意志の疎通を可能にしている…

アーと言えばカーのよくな…

「デコポン聞いてくれ。僕達の手の内はもはや、デコポンの知るところだ…これで僕達の面目も躍如されたよな?…デコポン、僕はデコポンに士の勇者として、理性的に接してきた…けれど、僕は…僕こそが、隕石から墜ちた騎士…血肉の騎士なんだ…」

血肉の騎士はウイルスだと勇者タベルは言つていたが、血肉の騎士とは隕石から生物化したものを指すのだろうか？

何が嘘なのやら…すべての経験から得た知識を上手く組み替えて、話について行くしかない…

勇者タベルは土の勇者ではなく、血肉の騎士だったと言つわけか…

「血肉の騎士に感染したものはやがて、集合体となり一つの生物と化す…。僕がその際の引力になるのさ…」

なるほど… 勇者タベルが血肉の騎士の核であり、血肉の騎士をウイルスと呼ぶ意図は、最終的な形態がそれら感染者の集合体を血肉の騎士と呼ぶからだらうか？

流暢で便利な言葉には、逆にマイナスの言霊が宿ると云つわけだ…

「デコポン… つまりだ… 僕はもつすべ勇者ではなくなるが、デコポンのような光の戦士に倒されるなら本望だよ… 今までありがとうございました…」

勇者タベルの爽やかな笑顔… 隣のタツもだ。
親指なんか立てやがった…

やがてテレビは砂嵐となつた…

血肉の騎士に感染していないのは地球人と俊哉君とタナー…か
宇宙人は宇宙人と言うだけで、血肉の騎士に感染していると推察で
きるからな…

「はあ…」

私は溜め息混じりに、テレビの主電源を切り、半ばシユールに考え
を巡らすことになつっていた。

「私が血肉の騎士を倒すのか？」

はて…医学書などいちにあつただろうか？

「『テ』ポンさん…妹の俊美です…これから血肉の騎士との戦いに備えて、『テ』ポンさんに俊美を預かつてほしいんです…」

俊哉君から紹介された俊美といつまだ、七歳だといつ少女は栗色の髪を輝かせ、私を見て笑つた…

「アハハハツ隠れメタボみつけ『若秃以下だよ！隠れメタボ！』

私を指さし笑う俊美ちゃんを制したのは俊哉君だった…

「と、俊美っ！…若秃の方が質悪いだろ？！ってか、そうじやなくて、『デ』ポンさんは見るからに小太りじゃないか…って…もう…『デ』ポンさん。すみません…こんな妹ですが、血肉の騎士を打ち倒す

まで、預かつててくれませんか?」

俊哉君…まだ若いのに…お兄ちゃんだから…しつかりしてるな…

「しかし、俊哉君? 血肉の騎士に対抗できる戦士は、君以外にはタナーしかいなけれど、大丈夫なのかい?」

俊哉君は困った顔をした…

「タナー? ああ…土の戦士のおじいちゃんですね…彼は死にましたよ…実は俊美を預かつてもらおつと訪ねたんですけど、わしは戦うだの言つて発狂しまして…悪魔になりつてな具合で…でも、たぶん

血肉の騎士なら、倒せますよ…僕一人で。水の戦士ですし…

タナー…
俊哉君もかなり逸脱した感性を持っているようだ。

私も危なかつたようだが、変なプライドがなくて良かつた…。

「わかつたよ…俊哉君…俊美ちゃんは私が守るつ…そして、テレビ
でも戦いの様子を見るからさ…」

どうも私の発言に不満があるようだ…

俊哉君とこい、俊美ちゃんとこい…

「アハハハツテレビ観戦するつもりだわ。この隠れメタボ。私達も赴くのよー!」

「残念ですが、デコポンさん。妹は嘘が吐けない質でして…そういうことになりますね…」

一瞬、自分は悪魔になってしまったかと思つたが、どうやら、まだ大丈夫のようだ。

「…わかつたよ…」

俊哉君は淡々と予定や場所について話し、愛くるじこ俊美ちゃんを置いて去っていった…

「メタボお…なんで悪魔になんないの?はあ…」

我慢だ…血肉の騎士を滅するまでの我慢だ…
私のスピリチュアルな戦いが切つて落とされたのだった…

Q

俊美ちゃんは俊哉君がいなくなるなり、黙りこくれてしまつた…

「俊美ちゃん…予定では、明日の夕暮れ時に町の公民館前で血肉の騎士が最終段階に入るみたいだけ…家に居ても良いんだよ?」

俊美ちゃんはけつやな背中を私に見せていたが、振り返ってくれた…

「いや…わたし血肉の騎士に感染してるし…なんと、ど直球の悪魔ちゃん…悪魔になつたのに肉塊にならなーの…フフッ」

バカな…

悪魔だと？いや、までまで…

つまり、これにも意味が一分する訳があるんだ…

「俊美ちゃん？血肉の騎士は悪魔になつて肉塊になるわけではないんだ…悪魔となり、肉塊になるのは宇宙人や戦士…宇宙人も血肉の騎士に感染しているけれど…」

話の途中で俊美ちゃんが悪魔になつた…

どす黒い肌となり、牙は突き出て、目はまつ黄色に輝いていた…

「それではコレはなんだ？なぜ、宇宙人は悪魔になると肉塊になる？私はなぜ肉塊にならない？悪魔だろ！？わたしは悪魔だろ！？」

ドガーンッ！！

私の部屋が吹き飛んだ…

悪魔とは言え、まだまだ未熟な力が暴発したようだ…

「俊美ちゃん…私もよく知らないが、宇宙人の前に半宇宙人てのがあつてね。たぶんだけど、地球人から宇宙人になった奴が悪魔になると肉塊になるんじゃないかな？」

私は吹き飛んだ部屋を一瞬で直して見せた

「アハハハッ。気障な奴…違うよ。これはあくまでも化学的な悪魔化け学でしょ？肉塊になる前に変貌する悪魔は科学的な過剰状態…つまり、オーバードースね…わかるかしら？まあ、私は意図的にオーバードースしたときの悪魔に好きなときになれるけどね…」

悪魔から少女に戻った俊美ちゃんは、私の暗い常識を悉く打ちのめしてくれた…

「そ、そつか…俊美ちゃん…凄いな…」

またちつちやな背中を向けて座り込む俊美ちゃん…まるで何もなかつたみたいに…

「予定どおり、明日の夕暮れ時、町の公民館前で勇者タベルがオーバードースするわ…私達はお兄ちゃんがそれを倒すのを見守るだけ。保険とかじやないから勘違いしないでね?」

それ以降一人が話すことはなかった

ナイトメア

夕暮れ前、公民館に行く途中、私はあまりのアバウトさに予定は狂うのではないか?と疑わずに居れなかつた…

「ねえ?俊美ちゃん。俊哉君つてさ。そんなに強かつたかな?まだ、小学生だし…何か凄い力を隠し持つているんじゃないかい?」
「…」

俊美ちゃんは私の方は向かず、淡々と質問に答え始めた…

「持つてるわ…てか、見たことあるでしょ?お兄ちゃんは水の戦士にしてナイトメアと呼ばれる魔法を使えるよつになつたわ…勇者タベルはあんなふうに核心を避けたがる人だから、自分を地球人にしたのはお兄ちゃんのナイトメアの所為だと思ってるの…そんな素振

りだった…

ナイトメア… 悪夢？

オーバードースを促す力か？

「はっ！…そう言えれば、俊哉君はリヴァイアサンを操っていたね。
あれのことかい？」

俊美ちゃんは頷いた

「そうそれ。お兄ちゃんは血肉の騎士を感染させる力を手に入れた

の……私も……お兄ちゃんに作られた悪魔よ……」

いや……待てよ……

そのナイトメアがあるからってどうやって血肉の騎士（い）の場合は、化身と言つ意味で（）をどうやって倒すんだ？

「俊美ちやん……それじゃダメだ……勇者タベルはやがて、血肉の騎士の感染者を集めて、地上最凶の怪物となるんだよ？ 感染させる力があつてもどうしようもないじゃないか？」

俊美ちやんは振り返り、私の脛を蹴った…

「違ひつ……お兄ちゃんがあることは抑制。私達……ほとんどは勇者タベルのだけど、計算によると勇者タベルのストレスはすでに極限化していく、ちょうど今日の夕暮れ、勝手にオーバードースして悪魔になっちゃうのよ。そのまま放つといたら肉塊になっちゃうから、お兄ちゃんが血肉の騎士を使って、引力にするの……だつてそうしないと、町が清浄しないでしょ？」

脛を押さえつかまる私を後田に、俊美けやんは歩き出した…

「な、なるほど……わかるような気はするよ……つまり、勇者タベルはすべての血肉の騎士を吸い込むブラックホールに化けるわけだ…」

また、俊美ちゃんは頷いた

「そうよ。あなたが問題視してるのはその後みたいだけど……気にしないで……」

私はいつたい何のために光の戦士になったのか…

意図もなにもない、恐怖心に急かされたのだ…

そう思つしかない…か

それは胸焼けしそうなほど、不思議な夕日だった。暖かみや親しさが逆手となり、まるで自分のものかのようだった。

「なんか…ストーブみたいだ」

私は公民館前で立ち止まり、思わず漏らした…

世界中がこの夕日を見ているのかと思えばの胸焼けだが…

時間が悪戯に止まってしまったかのよひだった…

その夕日の右部からやや下部辺りに黒い点が見えた…

「残念だわ…予定と少し違ったみたい…勇者タベルはもうすでに…」

その黒い点は次第に大きくなりながらも、夕日に広がる焦げ後みた
いにのっぺり張り付いていた…

気持ち悪くなり、私は公民館の窓に張り付けてある火の用心のポス
ターに目を奪われた…

シェパードイブオブプードルのピュンがパーソナリティを勤め上げ
るドキュメンタリー。『ワタシレスキュー体質』と言つ番組がきっ
かけでアイドルが何気にやつていてこいついた公務活動がやけに表
立つてゐるのが昨今の主流だ

「引き連れてるわね……ダメだわ……お兄ちゃんはもう……」

俊美ちゃんの声に引き戻され、私はまた夕田の方を見つめた…

黒い点は渦のようになり、私でさえも事態を飲み込める範囲にまで迫ってきていた…

「あ、アレは？俊哉君は勇者タベルをブラックホールにできたんだね？」

無理矢理言葉を絞り出したのが悪かつたか…俊美ちゃんは泣き出しつづけた

「なんで？なんでなの？！お兄ちゃんがなんで公民館に先にいないの？！もう終わりだわ…何もかも…」

答える術もなく、黙り込んだ私に呆れてか
俊美ちゃんはすぐさま泣き止んだ。

そして、とりつかれたかのよつて、悪魔に化けた…

「俊美ちゃんが戦うのか…」

私はそれしか考えられずにいた。

横から首根っこを捕まれたみたいに、俊美ちゃんは黒い渦に吸い込まれるように飛び去つていった…

あれは…化けたのか？

わからない…

取り残された私…黒い渦は確かに私に迫ってきていた…

腹上死

黒い渦が無常にも迫り来る…

「は、話が違うじゃないか？私は戦う必要はない」と…」

誰が言つていたのか…

そう言つていた張本人が今、黒い渦となつて迫つてきているのに…

「私が…私が戦うしかないのか…」

とうとう私の眼前までやつてきた。黒い渦は…何やら群をなす鳥か？羽虫か？のように、意志を持つて私の前で止まり、

すぐさま私を避けるよつに前進しだした

フッと私の中で何かが終わり始めていた

なんなんだ…この虚空は？

血肉の騎士だろ？”アレ”は

私は思わず自分の頬を撫でてみた…
いくら避けたとは言え

一粒でも”アレ”が付着していないものだらうか？

私は光の戦士だぞ？

どうやら、頬に血肉の騎士はついていないようだ：

私は緊張の糸が切れたように、尻餅ついでに倒れ込んだ：

そうだ… そうだ…

私は戦う必要はなかつたんだ。

きっと私の知らない戦士か何かが現れて倒すんだろう？

木の戦士か？氷の戦士か？砂の戦士か？

「アハハハハツアハハハハツ」

笑つて更に力が抜けた私はコンクリートにキスをするように俯せになつて氣絶した…

軌跡（前書き）

氣絶したデコポンは、タツちゃんの生涯のアイドル、ショバーデイブオブブードルのリーダー。ピュンと火消しをする夢を見ていた。梯子を使った曲芸を見せるピュン。マッチ一本火事のもと。と叫ぶデコポン…一人の掛け合いがまるで火を起こしたかのような夢…目を見ましたデコポンが見たものは、あまりの現実だった…

軌跡

翌朝、私は公民館の前にまだ居た…
ちょうど、植え込みの木の隙間から漏れる陽射しの所為で一瞬面食
らつたが…

私は氣だるさをはねのける様に一声あげた

「火の用心、火の用心、マッチ一本火事のもとーーー！」

空を仰いだ私は視線をゆっくりと前に降ろした…

岩?

何やらでっかい石つゝろがそこにはあった

「なんだ…血肉の騎士はどうへ行つたんだ…」

周りを見渡した…

早朝だからだろうか?人つ子一人いない

いや…血肉の騎士が吸い尽くしたんだろう?

「トトロボン...トトロボン...」

誰かが私を呼んでいた...辺りには誰も居ないんだぞ?

「...トトロボン...トトロボン...」

幻聴か?

私は耳を澄まし、声のする方向へ近づいていった...

じいやう…と詰つた。今となつては案の定だらうか? でかい石つ
じのかり置くえてへる

「……」ほんやつと気づいたみたいだね…もうすぐ僕は人間の言葉も忘れてしまう隕石なんだ…ごめんねデコポン…君の町は破滅してしまった…僕みたいな地球外物質が飛来したら…ね? ゆっくりゆつくりと僕は地球を新しい段階へ運ばなきやならないんだ…」

私は隕石を蹴飛ばした…

右足に走る激痛

疲れていて、痛みに対する怒りもなく、些かの気持ち良さに変わつていた…

「ば、バカな？私の町が破滅しただと？建物は元のままだし、ひ、人はいないけど…そんな…」

息も絶え絶えに、私は必死で隕石に話しかけていた……

「ドコポン……最後のお願いだ……僕を学会に売つてくれ……宇宙学会に……そして、研究成果を経て地球は新しい段階へと回り出すんだ……」

が、学会……

走馬灯のように今までの異常な体験が頭を駆け巡った……

「学会？数多ある学会の中からなぜ？宇宙学会を？」

また私は隕石を蹴飛ばした。

「なぜ？って…僕は地球外物質だから…わかるでしょ？」

私は足を痛めない程度に、隕石を蹴り続けた…

「わかるわけないだろ？おまえはすでに、疫病を蔓延させたんだ。宇宙学会…う、宇宙学会にどうやって話を付けたらいいんだ？おまえを隕石ですと紹介して信じてもらえるのか？」

話は見えている…

私が伝えなければならない」とは、超常現象のことではなく、隕石

が飛来したこと…

どんな誤解を受けても、それ以外は報告してはならないんだ…

でも…あまりに犠牲が多くすぎて…

私は涙が止まらなくなつた…

地球人として、喜ばしくてもこの町に住むものとして町人として…
これほど惨いことはない…

「頑張つて！君ならできるよ。僕はそれだけの知識と経験を与え

たんだ……か……ら……

それから、何度も話し掛けたり、蹴つたりしたが……隕石は返事をしなかつた……

私の葛藤はそれと同時に片付いた

建物があれば、人は移り住んでくるものだ…
石の上にも三年…とは行かなかつたが…

誰かが不審に思い。隣町ないしどこかしらからやつてくるのではないか?と丸一日、隕石の上に座つて待つていた…

奇しくも公民館の前でだし、簡単だらう…宇宙学会になんて届けずに、もつと信頼できる血の通つた人達に預けるべきだ…

「おーつおーつ…できたか…」いやまた小さこのつ…例年に比べて
「…」

ゴムの鍊成師ジャオが現れた…

私が座つて いる隕石を撫でながら、語りかけていた：

何故だ…ゴムの鍊成師ジャオは何故、血肉の騎士に取り込まれなかつたのか…

「お主、石の声を聞いたか？ 学会がどうとか言つてあつたろ？ 気にしなさんな…やがて隕石は朽ち果て、町に人が満ちる…歴史は再び思い起こされ、辻褄が次第に噛み合つてくる。そして、出来過ぎた文明が人を傲り、また隕石を呼ぶだらう…『コポン』と言つたか？ お主が本期の受信者であるようじやが、今までより些か我慢がなかつたようじやな…」

淡々と話すジャオには、生気が感じられず、おやぢへは幾度となくこの巨大な輪廻を田の辺たりにしてきたのだらう…

現実のようだ、それは単なる悪夢。覚めない夢はないんだ…

「『ゴムの鍊成師ジャオ…私のよひな受信者せどりなつたんだ? 積度もい』のよひな輪廻はあつたと聞くが?」

ジャオは私の問いかけに操られるよひに着飾った派手な編み込みのされた麻のマントをとつた

地肌に纏つたばかりのマントであつた為かいや、そうではない…

ジャオの体中に人の顔が無数に張り付いていた…

「バカな奴らじゃ…お主みたいに隕石に座っていたのは始めてみる…受信者は血肉の騎士を選ばずワシを選ぶ…生きながらえたいやら死にたいや…ワシが血肉の騎士に取り込まれない理由がお分かりだろ?」

マントを羽織ったジャオは私に背を向け歩き出した…

「トコポンとや…良かつたら…ワシを殺してくれんか?」

躊躇なく私は真空の刃を生み出し、右から切り下ろすよつてジヤオを切り裂いた…

「ハハハハッありがとうよ？伸びたじゃないか？すぐ元に戻る…昔はこんななんじやなかつたんだがなあ…」

みるみるうちに傷が塞がっていく…それは伸び縮みするゴムのよう
に思えた…

やがて、隕石は砂のよつて風化し、タンポポの綿毛のよつて町中に
飛んでいった…

完全なる平和

不思議なものだつた
眠りにつく瞬間を見つけられないように、まして町が蘇る瞬間だ

隕石が風化しているのを見ていた内に町に人が戻っていた

boom

boom

メールか…あつ、カードじゃないか?

『テ「ポン...」この町で起きたこと... いつたいどれだけの人間が覚えているんだ? 今、ターキー氏が田の前に現れたよ...』

カード... カードも生きていたんだな...

私は強い鬱と対面したようだ...

「で、テ「ポン...」タツちゃんがメンソーレラブに行きたいって電話掛かってきたんだよ。どういつ風の吹き回しだ?」

例の半被を着たカルテが野生の勘だろ？
私を求めて、公民館前までやつて来た：

そう言えれば…私達はよく公民館に集まっていたな…

野生の勘は訂正じよい…

習慣だ…

「ハハツカルテ。タツちゃんがやつと現実を見だしてくれたかな？
アイドルなんて無理だって気づいたんだよ。きっと」

そうだ…思い出したぞ。

私達はただ、大人としての義務感に苛まれていただけなんだ…

きっと、そんな不安定な気持ちが幻を、リアルな幻を見せたんだな…

「デコポン。妖怪大戦の間どこにいたんだよ？よく無事だったな？」

どこについて…まったく私が張本人と言つても過言じゃないだろうに…

「私は家にいたよ。そして、ここは最終決戦場だ…」

カルテは首を傾げていた…

「デコポン…何が言いたいかはわからないけど、妖怪大戦はアメリカで起きたことだから…俺らの話とは違うだろ？いくら毎日つまらないからって…家でゴロゴロしてるからだよ…デコポンって相変わらず釣れないな…じゃつ、俺これから仕事あるし、タツちゃんと同伴だからw」

私は覚束ない相づちを返しながら、携帯を開いた…

時事をいち早く知るには、携帯が手つ取り早い…

『アメリカ各地でYOUKAIと呼ばれるモンスターが多数発見され、FBIや国防省が動き出す。』

…か。

カルテのやつまさか…蘇った口か？

小気味の悪い笑いがうつすら浮かんだ…

隕石は動き始めたようだ…

inconsistent

何もなかつたかのよつて、いや、血肉の騎士など向ひの『シップ
だつたかのよつて、町は『いつも通り』を着飾り、回り始めていた…

私は少なからず一年は死んでいたし…こんなに平和なら…銃殺じゃ
ないか…

殺人罪が立証されないまでも、殺人未遂ではあるわけだし…

病院側はいったい何を考えていたんだ…

いや…タツちゃんは逮捕されたか…

「やばいな……」

まるで生き物でもなった気分だったが…計算はずれる…

事件はあった
しかし、解決し平和になった

それが私に対し、この町が望むこと

そう言えば、わたしはまだ光の戦士としての力は残っているのだろうか？

一つ曰小僧とか…出ないかなあ

「フフッ…」

私は浮遊感に苛まれていた。
奇しくも死んでいたあの一年間と似た境遇だ

しかし、訳が違う…

私は早速、一つ小僧を呼び出してみた……

「おんや……自分? こつそやのコレやないか?」

冷や汗がブワッと涌いてでた……

そうだった……

あの化け物列車のアレは血肉の騎士の影響ではなく……おそらく、宇宙人の仕業……

地球人を妖怪のように見せていただけなんだ……

私が望む一つ田小僧と言えば…」の敵つい極道屋とこいつとなる

「あつ…ハハハハハツ。に、一年以上も前の話なのに…よ、よく覚えてらっしゃいましたね…」

どうじたものか…

私はこれ以上何も考えられない…

「あんさんな？自分が加害者やからって、都合の良い風に解釈したらあかんで？悪いもんは悪いんや…以後、気つけや…ほんまならどつき回すとこやが…時効や時効…」

そう言つと、極道屋は翻し、背を向け、私に手を振つて去つていった

はて……これでは光の戦士の力がまだあるかどうか……図りかねるな……

関白

宇宙人とは言え、勇者タベルのように隕石から生まれた訳じゃなく、地球人 半宇宙人 宇宙人と進化していった者達らしく、最終的な私の独断と偏見としては、血肉の騎士に感染していたとしか言いようがないわけだが：

私の単なる飛行能力にさえ、血肉の騎士が作用していないわけがないのだ…

故に、町は勇者タベル…いや、血肉の騎士を浄化する為に生み出されたブラックホールにより吸い尽くされた…

例外として、代々の光の戦士。

そして、ゴムの練成師ジャオが生き字引としてか？生き残る…

しかし、光の戦士は私が初めてこの周期を確認したようであり…

例外と言えど、ジャオなんだろうが…

「私は何だと書いだんだろ？…どれ…ソリテーも浮かべてみるか？…
ベタに円盤型の…」

私は天に両手を翳し、念じてみた…

感覚で言つなら、肉眼では確認できないであろうマイクロレヴェルの微粒子、つまり原子レベルの新たな融合。そこは地球外レベルの自由度があり

できないわけがなかつた…としか言えないだろつ

UFOが…直径100寸程度のUFOが浮かび上がつた…

あそこにはUFO内に…そうだな…私が拐かされたときのような宇宙人を配置しよう…

私はコンダクターのよつこ、纖細でエレガントな気分に浸りきついていた…

悦と呼ぶことは余りに遅おじへ…

心の傷が癒えていくのが、しかとわかつた

頂から

「はつ……何をやつているんだ……これじゃ、私が原因になるだろ？……いざれ新たな土の勇者が飛来する……」

私は急いでHFTOを消し、血肉の騎士を浄化した……

「ハツモヤーハ……」

ビリからりともなく叫び声が聞こえた……

なんだらつか……血肉の騎士はすべて浄化したのに……

ジャオはしわくちゃの顔を笑顔にして、私の問いかけに答えてくれた

「ゴムの練成師ジャオ…と言つひとは、血肉の騎士の感染者はまだ
まだ、この町には居て、私の念力により…つまり、い、いや…嘘だ
な。ジャオあなたが生きているのが何よりの証拠だ…」

後ろを振り返ると、ジャオがいた…

「言つてなかつたかな？血肉の騎士をこの地球から完璧に消し去る
ことはできないんぢやぞ？つまり、おまえのような光の戦士が念じ
ない限り、血肉の騎士の感染者のいくらかは、あのブラックホール
から逃れ生き残っていたのじゃが…まさか、念じるとはな…」

「ワシは伸びて縮んだんじゃ……それじゃ、また逢つやの口までなっ。」

ジヤオは砂のように消えた……死んだのか？伸びたのか？

私は血肉の騎士をこの町から消されたのだ……

薔玉菌

穏やかな時間が流れた…

血肉の騎士を淘汰しきつたのは…もしかして、私の思い込みではないだろうか？

私の目の届く視野内では、発見されないだけではないだろうか？

それでも良いか…

今日はカードの計らいで、ターキー氏と話す機会をもらつた…
現在町の喫茶店にいる…

当人たつての希望であると、カードは言つていたが…

世辞に決まつてゐる…

「ふむふむ…血肉の騎士は細菌であるというわけだね…しかも、体を異常化させる悪性の地球外ウイルスだと？」

まだ、オーダーも来ていない中、ターキー氏は私の切り出した話に答えてくれていた…

その話と並びのは、血肉の騎士の危険性についてだ。

人を墮落させ、欲望のままに体を変態させられると血を伝えた
わけだが…

私の淡い期待からは、若干逸れた回答が返ってきていた…

「デコポン君。欲望を具体化すると言つ表現は極端すぎやしないか
い？人を見損なつては駄目だ…私はそう思つ。思惑が高ぶりすぎて、
そう言つた結論が出たのかもしれないね…しかし、どうだい？その
血肉の騎士を有効利用できれば、自己治癒を著しく促進させられる
じやないか？病気や怪我、肢体の欠損部の再生。劣化した臓器の再
生…等々、内科医にとつては、夢のよつたウイルスじやないか？」

いや…ターキー氏はすでにあの血肉の騎士が起こした惨劇を忘れて
いる

血肉の騎士が有効利用されるなんて…判断を鈍らせるだけなんだ

善玉菌？

「そんな…夢みたいなこと…血肉の騎士は人の欲望のみを狙います。絶対に…無欲な人間なんて居たとしても一握りでしょ？忌むべきは血肉の騎士そのものなんです。」

ターキー氏はやつて来たコーヒーを一飲みし、しばし考えるよつこ
目を閉じた…

「デコポン…血肉の騎士とはなんだい？アメリカで流行っているん
だろうか？私も半ば軽返事で済ませていたが…少し考えてみないか
い？もう少しわかりやすく頼むよ。このままでは君の虚言でしかな
い。」

私は冷や汗が溢れるよつこでたことこ戻づいた…

一旦それに気を向けることで落ち着くためだ……

そうなのか……私以外、血肉の騎士を知るものはもういないのか……

アメリカ……そうするしかない……

変人奇人扱いで終わつては……

「アツハハハツ……そうなんですよ。アメリカで今YOUKAIが流行つてゐるでしょ？そのYOUKAIが変態する要因として、私の筋では血肉の騎士というのが有力だつただけですよ……」

失敗だったか… ターキー氏は少し不機嫌になつた様子だった。

「バカにするのも大概になさい…！君は二ートなんだぞ？私はカードに言われて仕事を紹介しに来たんだ…！真面目な話をしなさい！」

二ート…

そうだったのか…

カードはそんな根回しを私に…

私はターキー氏を睡眠状態にさせ、その場を去つた

善玉菌？

血肉の騎士… やんざん否定はしたが… 私の体内には血肉の騎士が必要…

喫茶店から抜け出した私は、心にぽっかり空いた穴を埋めるように、自分を戒めた…

カードとはますます、距離が開いた…

私の伝手の中で、信頼できそうなのは、カードとカルテ…

ブラックホールにより、更新されたこの町では、最早何が起きるか

わからない…

大したことは起きないだろ？が…

光の戦士の力があるからと、驕り高ぶりは良くない…

社会人として振る舞わなければ…

「アッハハハツ……ビリだいベイビー達？俺はついに鳥になつたぜ
？」

ビーハカリともなく声がする…聞き覚えのある声…

タッカちゃんだーー！

タッカちゃんが空を飛んでいる…

「タッカちゃんすばーな？ マジで空飛べるんか？ マジックかと思つた。

」

カルテがメンソーレラブのだらつか？ 女性陣を連れて来ていた…

一体どんな件で空を飛ぶやつが飛ばないやつになつたのか…

私はまた…タツちゃんに頼りやつになつた…

「ダメだ…私は一ートなんだ。タツちゃんせとでも楽しつひだし…」
「のまま去るのがこ…」

私はそれくさと、その場を後にした

「あ…アコポンじゃないか?何やつてんだよ?」

私はその場を後にしたかったのだが…カルテに見つかった…

毒王菌？

制御できない力…そんな後ろ向きな考え方だから、血肉の騎士なんてウイルスに気付くんだろうか？

タツちゃんは滲剤として…空を飛んでいた

「△「ポン。見てみるよ?タツちゃんあり得ないだろ?空飛んじやうんだからな…これはまだまだタツちゃん派の勢力は衰え知らずだな?」

畠下がりの町並みは不思議に見えた。

帰宅するには少し早く、出勤するには遅すぎるのは時間帯にビジネスルックな人がごった返していたからだ…

営業中だらうか？外回りか？

しかし、何より不思議なのは、タツちゃんを見上げる人はすぐさま下を向き、なかつたことにしたいようだつた点だ…

何故だ？

人が空を飛んでるんだぞ？

「あー…凄いじゃないか？タツちゃんは病魔に圍まれているのかい？」

すると、カルテはムツとした…

「違うだろ？ デコポン。僻みにもほどがあるぞ？ アレはアメリカ製のボディヘリウムだろ？ タツちゃんはターキーさんの依頼でモニターとして今仕事してるんだ… 平和つてのはタツちゃんみたいな奴がつくれてるのさ」

しまった… 血肉の騎士はタブーとは言え、私の会話のベクトルはまさに血肉の騎士のそれだった…

病魔に冒されているのかい？ だと… いかれてる…

「悪い……少し具合が悪くて口走ってしまったんだ……ネガティブすぎた……」

カルテは首を横に振った

「ダメだダメだ。デコポンみたいなマイナスイメージはボディヘリウムのモニターにはいらないよ。体がヘリウムに変化するんだぜ？とにかく、デコポンはどうか行ってくれよ。」

私は仕方なく、どうか行くことにした……飛んで

「お、おこつ……あ、デコポンもボディへ持つてんの？」

持つてない。
私は呼び止めるカルテを無視するように飛び去ってしまった

毒HIGA?

「ウハ… バラハ…」

いきなり胸が締め付けられるように痛みだした

バカな…

やはり光の戦士としての寿命は、とうに過ぎていたか…

脈打つ心臓はやがて、体中に熱を持たせ、私はゆっくりと地に降りた…

「はあ……はあ……どうしてしまったんだ……私はもうダメなのか？」

うずくまり

私は電信柱に張り付けてある「融資致します」と電話番号の書かれたチラシに引き寄せられるよつこ、這つた。

「△△ポンつこんなとこにいたか？探したんだぜ？あの後タッち
やんにボディヘリウムなしに空なんて飛べるのかつて聞いたんだよ
…したたらさ、天然の飛行能力はアメリカではもう病人扱いだとわ…
副作用として心臓病になつたり、後天性のダウン症を引き起こすと
ができる。△△コンドリア細胞が体に負荷をかけ過ぎるらしくてね。
知つてるか？△△コンドリア細胞。」

う、うやこつ…

何が△△コンドリア細胞知つてるか？だ…

私はあの地獄を知ってるんだぞ？

怒りのあまり

カルテの奴を眠らせた私は、確固たる後悔を味わうことになる……

これがアメリカナイズされた血肉の騎士の末路か……

私は血反吐を吐き出した。

そばで眠っているカルテを励みに私はフラフラのまま空を飛び

UFOを作り出した…

そこに乗り込んだ私は、気を失ってしまった

目が覚めると辺りは真っ白で、一瞬私はまた拐かされたのかと責任転換していた…

しかし、その思いは力として発揮されず、宇宙人が生まれることもなかつた…

辺りは真っ白な一次元のままだ…

意識すると良いのか?
無意識ではダメなのか?

私はじゅうやら、余程の袋小路に、はまっているらしい…

すべての思惑がエゴに感じ、自分はど畜生のなれ果ての果ての…とにかく最底辺に叩きつけられたよつた…

それでも私はHFOの中に入る…

意識よりは意志なのか?

力はもしかすると失われたのか?

物体の難解さ…

比例するだけの意志が必要となるわけか?

「いや、そもそも力を失つてしまつたのではない?」

私はH.F.Oから外を見たいと念じてみた

すると…丸い窓が現れた

「なんだ…違つたか」

上の窓とは言つたくはないが、上の窓であつた…

私は淀む気持ちを抑え
窓を覗いた

そこから信じられない景色が見えた

「タツちゃん！..！」

手前で眠るカルテの直線上にタツちゃんが血を流し倒れていて、女性陣があたふたしていた…

そんな…ボディヘリウムの効き田がきたのか？

「よ、よし…行つてみよつ」

私は自分の力がまだ健在であることを認知するためにも、UFOを
突き動かしたのだった

タツちゃんの倒れてこないうまじ真上にコントローラーを停めて、私はノーブランなことに気が付いた。

「しまつた……ビリしたものが……ええいっ……ビリヒドもなれだ。」

私はタツちゃんを光で照らし、吸い込んでコントローラー内に取り込んだ…

タツちゃんはびりゅう、ボディヘリウムの効き田がきれて地面に叩きつけられたわけではなく、ボディヘリウムの要求に体が堪えられず、内出血したように体中が紫色に変色していった…

どうやら、流血していたのは、口や耳や鼻などから垂れ流れてきた血のみで…

「最悪だ… 血液中のミトコンドリア細胞が活性化しそぎて血管を膨張… そして破裂させたんだ… くも膜下出血の全身バージョンみたいだ… これは、私が治すわけにはいかない… アメリカの医療スタッフに渡そう… タッちゃんの仕事もそれで達されるだろうし。」

私はアメリカまで飛び、ボディヘリウムを開発した、アメリカ本社の校門前にタッちゃんを置いた…

と注意書きをしても

ホームページの命を託したのだった…

チューーン

胸焼けがする…
ボディヘリウムを開発した会社（アメリカ本社）にタツちゃんを任せ
てはきたが…

胸焼けがする…

人は考えを巡らせるとき、考えがまとまつたと判断するのは、胸
心臓だと言つが…

どうやら、アメリカ本社は芳しくない印象を受けたようだ…

「な、なぜだ！？最高の研究材料じゃないか？タツちゃんだつて、日本の一キャンペーンスタッフを越えて大出世さ！…なんだこの胸くその悪さは？！」

UFO内で私は有らん限りの声を張り上げた

人は常に願うものだ…

天から金銀財宝が降つてきやしないか？

石油でも掘り当てて石油王になれやしないか？

すべての人類に愛されて、大富豪になれるはしないか？

など…

しかし、どうだ？この胸焼けは？

私はそれほどの善行をやせつたに決まっている

「治れ！…治れ！…私は爽快感に満ち足りたい…！」

やがて、私の行き場のない願いは一つの存在感を生み出すことになる

それは、奇しくも「ゴムの練成師ジャオだつた

プリオン

相違点がある

昨今の情報社会において、事件性を示唆することにより、外部からの個人情報へのアプローチが可能な時代に…

協調性のなさは、相違点となり、猜疑心を生み、言つなれば疑心暗鬼。やがては集団心理の主軸として、表向きには興味や関心として、保護されるべき個人情報へのアプローチを可能にしてしまつ…

「つまり、デコポンよ？今の閉鎖的なおまえの感性では、すべての物事が自分に向けられた悪意に見えるんじやよ。皆、お前について関心があり、歩み寄るうとしておるのじや。太刀川・タツちゃんに起きた異変はまさに集団心理…お主への罪の仮借故の事故…民族精神に則り、人は思いやりで体を維持するものなのじや」

嫌悪感の最終地点は決まって人道的な救いに満ちているが

いきなり現れたジャオは、大きな嘘を一発した…

一発目で私の注意を引き、二発目で生理現象であると思わせた

ジャオの後ろには幾人もの人間が見えるものだ…

「ち、違うっ…わ、私は女にちやほやされるタツちゃんこそ間違

つていてる。なんて思つてない……いつもいつも……タツちゃんのやることにはついていけないんだ……」

私はそれでも、ジャオのした嘘に依存するよつた大声で、なんとも情けない言い訳じみた返答をぶつけた

「おーっおーっ威勢の良いことじやな……して! ハポンよ? タツちゃんの安否は気にならんか? いくら、製造元であるアメリカ本社とは言え、にわか仕込みの信頼など如何様にもならんと思うのじやがな……ワシなら日本支社に連れて行き、ことの成り行きを説明するものじゃが……」

冷や汗がでた……

私は盲信的にアメリカ本社にタツちゃんを見つけさせれば、タツちゃんの命は保証されるとばかり思つていたが……

「つ、つまり、タツちゃんは死に、尊い犠牲のようになると
いたいのか？あちら方だって対応力くらい備えてあるや…」

私は心許なくなり、どんどん声が小さくなつた

「そういう意味ではない…タツちゃんを丸投げされたアメリカ本社
の気持ちになれと書いてあるんじゅよ…」

「そつだな…これではあまりに任せつけりゃ…」

大切なタツちゃんなのに…

「わかったよ。ちょっとタツちゃんの様子見てくるよ。」

それを聞くなり
ジャオはにっこり笑つた

「わたりんじや、タツちゃんも喜ぶじやない？」

真っ白なHFO内は、人の温かみに飢えていたかのように嬉しそう
だった

ボディヘリウムを取り扱う会社。世界各地に支社があり、本社はアメリカにある。表向きには、各国の天才を集結させた超エリート企業だと謳われるが、実のところはガリレオ・ガリレイ…いや、コペルニクスか？

わかりやすく言つて、まあ…思想犯だらう

まず大前提として

鉄の塊が空に浮くのは、勢いがあるからである。と言つたところか？

キヤピタリズムの基礎と言つても過言ではないが…

そうではなく、鉄というのは磁力に左右されるものだと提唱する集まりなのだ

私は丁度かつぎ込まれる寸でのタツちゃんを見つけた

「H · h e y? l o o k u p? w h a t · s . . . w h y?
R u s s i a?」

どうやら、一人の作業員が私…ではなくじつは氣づいたようだ

カルテみたいにもじや もじやした髪の毛は天然のブロンドがプリン
化していく、黒髪が入り交じっていた

白衣から覗くジーパンは意外だったが、新品そのものだった

「F*ckin' why? Russia!! you under
stand us?!? F*ckin' why!」

もう一人が顔を真っ赤にして怒っている

ツルツル頭に銀縁メガネの男だ

「大変なことになった…しかし、タツちゃんは大丈夫そうだな…引き返すとしよう」

私は小窓から顔を引っ込め、アメリカ本社から立ち去った

タツちゃんなら、もう大丈夫だろうな…
言つても本物の天才達だからな…

円周率を数えるのが面倒で、御 様なんてほざいてた私などは、見
栄の利いた…ラッキーボーイだろう…

「いや、運ではない…巡り合わせだ…」

少し天才達が小さく見えた気がする

だつて考えてみてくれよ?

私が念じて生み出したH.F.Oに嫉妬していたんだ

「それでは、どうやって生み出したんだ? 根拠は? テーゼは? ハハ
ツ... 私などここまでじゃないか?」

ひょっとすると、予知する力が人より弱いのかもしれない

偶然まったく、その場に居合わせたラッキーボーイなのかも

「ひゃあーっはははははーーーラッキーだ。大幸運、超幸運だつ！
！ UFOが生まれたときに傍にいて、空が飛べて、動き出すときに
動けと念じたんだーーー！」

私は名もなき達磨だ……

手足などなくとも……幸運が助けてくれる

「タツちゃんのようなリアリストにならなかったかな……」

行き場をなくした私は……

予想通りにやがて飛来するだらつ隕石を迎え入れ、妖怪を浄化する
算段を考えるばかりになつていった……

対隕石

これからは、私の隕石に対する防衛手段のことばかりになるだらうが…

私にとって隕石はまったくもって悪いものではない…

それは利潤を満たすものであり、老廃物の効率的な循環を保つ上でこれほどの薬薬はない…

しかし…何事にも問題点と言つものが生じる

世界は隕石の飛来によって再生するのだから

これでは、私にとって地球は体内、つまり胃袋の中というわけだ

飲み込んだ薬が胃袋で溶け、染み渡るような
胃袋の中にいて、世界がどのように再生していくのかを頭に叩き込
まれるわけだ…

まるで井の中の蛙

私こそが世界の循環を知っているのに…

隕石は魔法のように人を動かすのだから、動いた人間こそ世界を知
るものなのだ…

よつて…私の独断と偏見により、隕石は悪意となつていいくのであつ
た

金の盾

コードネーム『金の盾』

戦場において、鉄や鋼はまさに硬度を求められ、実際に防御力を問われる材質だが

金に至つては、意味が違つ。

金と言うのは硬度も去ることながら、希少価値が高く戦場では、傷つけるからにはそれなりの覚悟、つまり必要以上の気力を消耗してしまつ…

よつて…対隕石の最初の手段として、地球を覆うシールド、大気圏の強化を行うことに対する

既に隕石の軌道から落下地点はアメリカによつて解明されていて、
後はそのデータを元に私の力を使い、大気圏を濃厚に強化すれば
いわけだ…

隕石は意志のない地球外物質の塊

それ故に、強化された大気圏に気づくことはない

私の作る大気圏の盾は、鉄や鋼のような硬度に加え金のような負荷
価値さえも帶びている

コードネーム『金の盾』

果たして…隕石は金の盾の価値を知っているのだろうか？

懸念

完璧な作戦である『金の盾』に懸念されることが多いなんであるのか?

ある訳ない…

私は少し広めに大気圏を分厚くしたから、大丈夫だろ？…

しかし、アメリカの宇宙開発局のデータを理解する方が大変だった

いくら、光の戦士の力を持つてしても、大気圏に細工を施すまでの
スパンは洒落にならないほど大変だった…

まず、隕石の軌道

これは計算はすでにされていて、要は大気圏のどこを通過するのか
を知りたいわけだから、私はコンピュータに独自のコネクトを結び、
大気圏の厚みを調整する準備をした

隕石の軌道を映したディスプレイに則り、軌道と大気圏の接点にある大気圏濃度を濃いくする

まあそれで終わりなんだが…

私の頭は熱を帯び、意識は混沌していた…

後は、見たいものを見る力で隕石の様子を追跡すれば良いだけだな

「どれどれ……隕石は今どの辺かな？」

私は目を瞑り、宇宙空間へと視界を移した

ば、バカな！

無数の隕石が群を成し、こちらに向かってきていた

「流星群だつ……しまつた……あのデータは研修生が過去の事例から割り出した課題に過ぎない……どうしたものか……今から練り直して間

に会つか?」

コードネーム『金の盾』

どうやら、次の段階にレヴェルを上げなければならぬいよつだ

プルシャ

しかし、隕石の接近に伴い妖怪騒動が起きているのは事実だし…

コレはすでに…

隕石の飛来を止めては、私が体験した、あの再生が起きなくなるのではないか？

と言ひ思考が頭を過ぎつた…

勇者タベルのようなものも現れなくなるだらうし…いや、そのような模倣的再生かどうかはわかりかねるが…少なからず、隕石ができるであらう再生を妨げた場合…

今回せめ再生の働きはないのか？

「どうあるべき私の力で再生するよりは、隕石に任せた方が自然で美しいのではないか？」

懸念すべき点はないはずだったのに、事態は一転し、一石一石の隕石に前を付けたくなるほど、いきなり愛情がにじみ出でた…

「このまま隕石を…見過」した方が良いのか

漏斗を付けるまつて引力で囲い、金の盾に隕石群を集中させる作

戦もあつたが…

未然に破壊しても良いだろ？…

でもダメだ…

格好付けてコードネームなどと企ててみたが、
蛇足に至るか？

私は自然治癒に賭けてみることにしたのだった

atmosphere

金の盾も取り外し、通常どおりの大気圏となつたわけだが、妙な違和感が残る

あそこまで考え抜いた結果、隕石のデータは過去のもので

しかも、隕石は一つではなく流星群：

半ば諦めも手伝つた感は否めないか…

流星群は地球を襲い

大損害を受ける…が、隕石は地球に根ざし地球をより強靭な星に作

り上げるだらう

「オッケーっ！ストライクーー！」

私は町中で人の目も気にせず叫んだ

この後すぐ……隕石が……流星群が降り注ぐ

... בְּנֵי יִשְׂרָאֵל

10

■ ■ ■ ■ ■

人の目は白くなり、私を襲むようなヒソヒソ話がこだました…

「ハツハハツ監さん流星群が地球に到来しましたよ？お気をつけくださいね」

すると、監督と笑い出した

「アハハハハツ真っ昼間に流星群拌めるかよー見たかつたら、アメリカとか行けよw」

ヒソヒソ話はボリューム最高潮となり、私の胸に突き刺さつた…

目を閉じてスティールアイを使った

流星群は大気圏で見事に消化され、宇宙の藻屑となっていた

「そ、それもそうですね…」

私はUFOを呼び、その場を飛び去った

購い

とんだ赤つ恥をかいたものだ…

あの疎外感…なかなか忘れられるようなものではない…

しかし、そんなこと光の戦士という譽れな力を手に入れてからは、
いつも思つよつにしている

疎外感など誰しも一つや二つ持つているものだと、アメリカでは f
ew - talk と言い、ポジティブな会話法として現在主流となり
つつあるのだ

英語において、few や often など日本語ではあまり使われないユアンスの表現を排他的に用いることにより格差を緩和させようという動きもある

もちろん、苦手を克服するのが何よりだが、近年、苦手克服とは立場の交代でしかないといつ見方が強く、あまり世の中からはよく見られない傾向にある。最近では、一世を風靡したバランスのよいミニマムなモデルも、リアル思考なモデル社会では懸念されたりと…

世の中はつまらないくなつては来ている

とまあ、私が立ち直るまでにかなりの世論にかじり付いたが…

煙は、病は気からと叫づけだ…

「し、しかし、それでは隕石が飛来して欲しいみたいじゃないか？」

「ああ……何か気休めでも構わないから
この罪を購つようなものはないだらうか？」

「苦しみである奴ひじやな？ワシもこんなつまらんことをほつたら
かされて辛かつたもんじや……そんなときはコレ、ムキムキガム。
一噛み、また一噛みする度にアーティコンドリア細胞が筋肉に作用し、
ムキムキになるひじや一発明品じや。ハント味じや。ホレッ！」

「ジャオに渡されたガム……薄緑色のムキムキガム……フラボノガムみたいだな……」

「これって、ボディヘリウム作ってる会社の商品？」

ジャオは頷いた

「やうなんじゅよ。最近マントラノードリーム細胞に働きかける商品が多
数日本でも出回っておるよひじやな…」

早速、食べてみた…

口の中マントラの香りが広がり鼻からスースと抜けていく…

そして、右の一の腕がパースが狂つたように膨れ上がった…

「空氣を肉に変えているというかな… 化學式を見せてもらつたが、
はつきり言つて理解不能じゃつたな… 成り立つと言えば成り立つの
かもしかんが… 罗列されたに過ぎんと書つかな…」

なるほど… ジヤオは博識なんだな

インストント

軽い…右腕が軽い…

本当に空気みたいだが、意味が違う

ずつしり肉の重みはあるのだが、自転車…窓から見える走行中の自転車を片手でひょいと持ち上げたくなるような軽さ

「ほほう…お主は右腕を一番大事に使っているようじやな。このムキムキガムに嘘はつけんぞ?何せ世辞などは言えぬからなw」

楽しそうにジヤオは私の腕を撫でた

ジヤオの話によると、ムキムキガムの効き目は一時間だそうだが、個人差があり中にはそれをそのまま持続させるタフネスもいるとかで…

一時間の夢であるはずのムキムキガムがそんな結果をもたらすとは…

日常生活に話を戻してみて、
インスタントフードも民族精神によつては宇宙に通ずる画期的食品、
地球の食文化を宇宙に伝える手段となるのではないか?…いや、逆
か?

宇宙食をモチーフにしたインスタントフードか…お湯なんて地球上
にしかないからな

まあ…それぐらい今右腕は力が漲つていると言つわけだ…

「コレは凄いガムだな？出回っているとは言つが、安全性は確かなのか？体への負担云々よつ、治安とかさ」

ジャオは少し考え込んだようだが、すぐさま私を見つめ話し出した

「治安か…お主からほその言葉ができるひづな…世の中性善説。たとい、傷害事件に至つても、それは善意だとワシは思つ…おかげの？」

わかるわけないだろ？傷害事件の増加＝治安の悪化なんだから…

わかるわけない…

私は一時間は持続させるはずのムキムキガムの効き目を10分で萎ませた

contents of application

「納得いかないよ。じゃの?今、お主の内情はムキムキガムへの疑惑で満ちておるよ。じゃが、ムキムキガムは夢の商品でのう。」

夢の商品か

夢…憧れ…ウルトラマンのように怪獣を打ち倒すことが憧れでは、現実問題…問題がある

「それではジャオよ?ムキムキガムを持つていない人間はどうする?怪獣か?違う…きっとウルトラマンはラストヒーローなんだ」

察しのいいジャオのことだ、私の心情を読みとつてくれるだらう

「ラストヒーローか……確かにウルトラマンは古にな……安心しなさい。ボクシングもその昔はアンダーグラウンドな格闘技であったが、今やスポーツにまで昇華された。ムキムキガムはすでにその域じゃない。」

いや、私の言つたラストヒーローとは……つまり、強さへの憧れは最後には使命感に至るというか……ウルトラマンと怪獣の違いは憧れと使命感ではないか?と言つた

まあ、意味は同じか……

「じ、じゃあ、どうだ? ムキムキガムによつて食中毒が起きたらさ? 危険な商品じゃないか?」

ジヤオは少し困った顔をした

「ぢのやう、ムキムキガムはお戻りにななかつたようじやな…ワシもそのくらいは考えつゝ、夢を語るものある限り、それに異議を唱えるものが生まれるのじや」

殺伐とした空気がHFO内に流れた

「や、そうだ…！ムキムキガムの力に負けて、暴力に走るような奴を怪獣と呼ばうじやないか？それを私達が取り仕切ると書つのはど

うかな？夢の為にや」

ジャオは玩具を取り上げられた子供のよひにまらないうな表情を浮かべていた

「なつ？なつ？」

しかし、私とて最早、引き下がれない氣でいた

ギルティセンス

「では……テストをしよう。人が人を裁くのであれば、人と人との間には信頼が必要だ。わかるかな？」

「テストか……」

「ムキムキガムを気に入っていると受け取って欲しかったのだが、まあ私はそのつもりで挑もう

「わかった。そのテスト受けよう……して、どんなテストだ？」

少し考える時間のあつたジャオだが、ゆっくりその口を開いた

「ワシがムキムキガムでムキムキになった部分でお主を叩く。それでどうじゃ？それに耐えられたら合格じゃな…」

な、何だと？

ムキムキガムを気に入つていると受け取つてもらつたために叩かれなきやならないのか？

馬鹿げてる…いや、待て待てあのコボコボのジャオが一体どの部位を鍛えてこると言つんだ？

はつーわかつたぞ！
そう言つ意味か…

道理が通つたな…

「良いだね。受けて立つよ」

これはジャオにとつても試練になるな…

自分が一番酷使している部分で叩くなど、ジャオの美德に反するからな…ましてムキムキガムで意図的に膨れ上がった部位なんて、ジャオのような賢者には耐え難いものがある

最悪、腕とかなら

ジャオがギブアップするやもしれん

ジャオは徐にガムを噛み始めた……が

…な、何…変化がない
ジャオの体にはまったく変化がない

何だ？ ジャオはフラボノガムでも食べたのか？

「変わり映えしないが？ ジャオよ？ いつたいムキムキガムをちゃんと食べたのか？」

ジャオは深く頷いた

「無論、ワシはムキムキガムを食べた…その証拠にワシの鼓動が酷く落ち着いておる…1分間に1、2回深くゆっくり力強く動いておる…」

し、心臓が…ムキムキになつたのか？

ジャオ…なんて奴だ

「バカな！！私だって右腕より心臓を酷使しているはずだ！！バカ
な！！」

ジャオは左胸に手を当て、私に問いかけた

「さて……」Jで矛盾が生じたな？心臓ではお主を叩けない……わかる
な？」

裁けないと言つわけか…

またもや

UFO内に流れる殺伐とした空氣…少しでも面白くならないかと私は変な顔をジャオに向けていた

「誤魔化しても無駄じゃ……お主は他のよつた賊者になる必要はないのじやよ……恐らく現れはあるじやない……裁きし者がな」

ヒトの内の殺伐とした空氣はやがて、蔓延していく。

今回の白肉の騎士の正体は……それだと核心した

人+口=?

UFO内はなかなか快適にリフォームされた

ジヤオの発案でミトコンドリア細胞が異常な人間をピックアップする装置を生み出したり、私の脳味噌はオーバーヒートしていた

「800000人が…売り上げは総計でも7000000人は購買していると言われてあるに…お主の作ったこの装置は正確なのかの?」

さあ…(、ー、)

それはわからないが…7000000人がボディヘリウムやらムキムキガムを購入したにせよ。7000000人が一斉に使い始める訳じゃないと受け取るしかないよな…

「80000人が常に同じ人間とは限らないだろ？泡ぶくのように入れ替わり立ち替わりしてるので」

ジャオはこわさかつまらなそ'だ…

「しかし、これでは事件性までは追及できんな…白か黒か…お主ならできるじやない？」

白か黒か…って、それを決めつけるのが良くないつて詰じやなかつたのか？

ジャオが何を考えているやらねっぱりわからんが…

「由黒はつけたいが、数多ある商品の使用方法に則った善悪を、私が把握できていない故に、安易に分けるのはどうかと思つが？」

ジャオせまいにまらなそいつなオーリを放つた

「良こんじやよ…」これは余興じやて、お主の独善的線引あで良このじや。女性の胸を触つたら黒とか、そんなんで構わん」

女性の胸…か

「じゃあ、それにしようつ……出歯龜ついでに見に行つても良いな
？」

「いいのう……つまり、ミトコンドリア細胞に著しい異常があり、女性の胸を触っている人物が黒くなるわけじゃな？」

私は頷いた

「まあ、これくらいのことなら簡単だから、すぐ機能を追加できるよな」

私は早速、ミトコンドリア細胞異常発見装置に白黒判断機能を追加すべく、念力を込め始めた

「ぐつ……があつ……あ、一つ……！」

UFOのリフォームに力を使いすぎたのか？
私の頭はどうやら限界に達していたようだった

採掘場は聖地

頭を酷使しそうな所為か、まるでお告げかのよつた夢を見せられた

夢は頭に優しい

様々な出来事を自分の身の程程に要約して教えてくれるから…

私の右脳はそのとき宇宙一明晰だったに違いない…

「ト「ポン　おまえ土下座じゆよへ。」これは聖地だぞ？」

仮面ライダーの戦闘シーンに出できそうな砂利が山のよつてに積まれた荒れ地と言つか…

タツちゃんは神話に出できそうな神々の出で立ちで、ロープを左肩から掛け着ていた…
葉っぱでできた冠をつけ、タツちゃんは土下座し始めた

「た、タツちゃん…何やつてんだよ?…こんななんの変哲もない場所でさ?」

タツちゃんは土下座の姿勢を崩さぬまま顔だけ私の方へ横に向かた

「い」はな？良質なアルミニウムが採掘されるんだ…荒れ地は荒れ地だけど、ここは神様が住まう大切な土地。人は先を急ぐあまり大切なことに気付かないんだよ？」

心の底からバカにされたような…

しかし、否定はできず
私は仕方なしに土下座した

「テ「ポン。今どんな気分だ？辛いか？嬉しいか？」

もはや、謎の質問…愚問でしかない

「私の感情は抜きに、ここはアルミニウムの採掘場なんだろう？立派なサンクチュアリじゃないか？」

それを聞くなり、タツちゃんは腹を抱えて笑い出した

「アツハハハハツ！…テコポン？違うだろ？ここは採掘場だよ。アルミニウムの採掘場だろ？サンクチュアリ？アツハハハハツ！！聖地な訳ないじゃないか！アツハハハハツ！…アツハハハハツ！！」

な、なんだ！！た、タツちゃんがつて土下座してたろ？

何なんだよ…私は何なんだよ

夢の世界がぼやけ始めた…そうか、夢が覚めるのか

ものの記憶

目が覚めると、そこはHFO内に備え付けられたベッドの上だった
ジャオが運んでくれたんだろうつか？

実は光の戦士になる前から、私にはものに宿る記憶を読みとる力があつた…

しかし、見たいものの記憶などないに等しい

好奇心はやがて使命感に変わり、使命感はやがて抱えきれないほど膨れ上がり、後悔になる

誰もが知り得ないものではなく、誰かが誰かの目をかいくぐり行つ
ている場面をのぞき見るよつな……

あまりいい気分はしない…

「じゅぢゅ、ジャオが運んでくれたよつだな…腕とかムキムキだ…
はあ…」

私の、ものの記憶を読みとる力の所為で、ジャオがかなり熟達した
ムキムキガムの使い手であるとわかつてしまつた…

しかし、フラボノガム説も捨てきれない…

「せめてあの時、ジャオの鼓動を確かめるべきだったかな…」

などと早速後悔している私を見かねたか？
閃きの神とでも言つべき導きがあつた…

ジャオの言つていた、胸を触つた//トロンドリア細胞異常者を発見
するメカニズムを閃いたのだ

例の白と黒を判別する装置だな…

「せうだー。おひさまに聞いてみよー。」

そして、恥ずかしげもなく、私は叫んでいた

顯示欲

判別装置のメカニズムは至って簡単

ミトコンドリア細胞の異常は探知できるので、後は胸を触ったときに感じるミトコンドリア細胞の変化を装置に記憶させれば良い

私の力は星の記憶を頼りに、数多のセックスセンスを分析し

ある種の規定値を見つけだした…

この規定値を満たしたものが黒く表示され
満たさないものが白く表示される

とこうわけだ

規定値には煩惱や支配欲、つまり顯示欲を満たす要素を総合的に計算している

性欲とはつまり、もつと高尚な感覚とこうわけだ…

「しかし、ジヤオはどう行ったのか…まさか…おっぱいを…」

早速、私はジャオのミトコンドリア細胞データを駆使し、ジャオの位置を特定した…

「ぐ、黒つーー。」

ジャオの位置を示す点が黒く染まっていた。
地図と照らし合わせ、私はジャオの元へ向かった

ルゴール

勤修されてそうなジャオにハレンチ疑惑が…
確かに欲求の階級として性欲は高尚だとは言つたが…

「まだまだ試作段階だ…きっと何か違う異常があつたに違いない…」

ふと、私は窓の外を眺めてみた…

「えつ？あれ…」

私はまるで掛け違えたボタンに気付いたみたいな軽い驚きを見せた
が…むしろ逆だ…

重すぎて「反応を抑えてしまったのだ

町は隕石群の飛来により、火の海と化していた…

「バカな…おっぱい何たら言つてる場合じゃなかつた」

私は遊び心を一切捨て、スティールアイでジャオの様子を確認した

「…」
「…」

ジャオが何やら女性を覆つむつと倒れ込み、丁度ジャオの手が女性の胸に当たっていた…

この隕石群の襲来で、ジャオは瓦礫の下敷きになつてこむよつだ…

ジャオのことだ…気にしているんだろう

当たつてこむところよつは、触れている程度じゃないか？

ん?

ジャオが覆つっていた女性の体が見る見る男性に変わっていく…

私は目をHFO内に戻し、判別装置を見た

「白くなつた…」

ジャオを示す点が白くなつていた

地滑り

「いやあ…助かつたわい。ムキムキガムの効力も切れかけておったから…館海の奴の女水^{おんなみず}の効力は切れてよいのじゃが…」

私はジャオ発見後、すぐさま現場に行きUFO内に救出した

あの女性らしき相手は館海で、女水と言ひ、リトコンドリア細胞からDNAに働きかけ、男性から女性になれる水を使っていたようだつた：

そんな館海も一緒に救出し、今UFO内にいる

「昨今、ミトコンドリア細胞に作用し、人智を超越する変化をもたらす商品が出回っていて……俺はやけに高額な水だと思いグルメ気取りに買ってみたんだ……女水。軟水というか。良さそうだろ?」

館海が私に経緯を伝えていた

「そうか……館海には軟水に見えたのか

女性向けのホルモン薬剤^{おとじみず}に男水もあるが、それは硬水に見えたんだ
るつ……

「あ、ああ……それは災難だつたな……ジャオとは偶然会つたのかい?」

館海は少し困った様子を私に見せた

「災難？ 災難と言えば災難だが… 地球と運動している気分だよ。まさかこんな…あり得ないことをすぎるだろ？ しかも、JFOの中に今俺はいるんだ… 因みに、ジャオとは偶然会ったんだ… 彼の方からアプローチがあつてね…」

真面目な正確が好評で、常にクラスのメードメーカーだった館海。

「トコポンよ…ひやり、今回ばかりは再生のしおりがなさそうじやの…隕石がまだまだ熱を帶びておる…」

ジャオの見解が正しひやう間違いやう…熱を帶びておるから再生は困難なのか？

唯一の安全な場所。UFO内で冷静すぎるくらいの話し合が、地
球の存亡を賭けた話し合が始まるつとしていた

「ちょっとすまん…鍛えたいんだが?」

早速、館海の意味深な発言から地球の存亡を賭けた話し合いの火蓋が切つて落とされた

「かのような御老体が私を庇い…しかし、申し分ないほどの肉体をその歳まで維持し続けているなんて…いや…情けないばかりだ…鍛えさせてほしい…」

私とジャオは目を合わせ、吹き出した

「館海よ？あの筋肉もお主が飲んだようなミトコンドリア細胞に作用するアメリカの新製品なんじゃよ？ムキムキガムと言つんじゃがな」

ジャオはムキムキガムを館海に渡した

「ムキムキガム…知らなかつた…」

館海はムキムキガムを受け取り、席を外した。

そして館海は
それ以降話さなくなつた

「して、トコポンよ？」の町並み…絶望的じゃな…お主の力さえあれば、いかとか無理矢理ではあるが再生…いや、復元は可能じやろうが…ワシも初めてのことわからんのじゃよ…今回はアメリカの新製品の影響で隕石の受信者が大量生産されたようじや…」

なるほど…

さすがアメリカと云うわけか…光の戦士が大量生産されたわけか？

いやいや…待てよ

光の戦士など大量生産されるわけがないだろ？

現にジヤオだつて

血肉の騎士の恩恵を受けているに過ぎない

光の戦士が大量生産されていっているのは言い過ぎだ

「確かに…町の復元はできるかもだが…隕石群の襲来に関しては受信者の大量発生とは結びつかない気がするが?」

顎に手を当て、ジャオが少し考え込んだ

「うーむ…では、今回の光の戦士は異常なようじゃの…お主と言わず、歴代の光の戦士とは比べものにならんほどの引力を持ってゐる

そう言われてみれば…

私は既に型遅れの光の戦士だ…

それを加味しただけでも、今回の光の戦士は背筋が凍るほどヤバい…

「た、確かに。この町は壊滅状態だが、今回はアメリカも絡んでる…地球が危ういってことだよな？」

私達は凍てついた沈黙を、恰も平和でもあるかのように大事がつていた

妙貞問答

沈黙はやがて惰性にまで達した…

良いものだ

先の見えない答えを宙に浮かべ、よもや神だと論するよりは、こつじた沈黙こそが近道な気もするが…

ドガーンッ！

凄まじい衝撃がコトコト内に走る

どうやら、隕石がコトコト直撃したようだ…

「『覗が当たつたか?』」

私とジヤオは口を揃えて言った

「お、おい? 隕石が直撃したんじゃない? どんだけ頑丈なUFO
なんだ?」

館海が話し始めた…

館海…なんて頼もしい奴だ

「やつだな……私も強度までは計算してなかつたが、かなり頑丈みた
いだ」

館海はつまらなやつにまた黙り込んでしまつた

強度までは計算してなかつた。なんてのがまた分からんんだらう
な……

「しかし、どうしたものかの？隕石の直撃を凌ぐ云々よりも、まだ
まだ隕石が飛来しておる……」のままでは地球が保たんのではないか
？」

本当に… それなんだよな

ジャオの言つとおり、いや、ジャオが言つからには、隕石の襲来が止まない限り再生は始まらない…

次の時代が始まらないんだ…

「ジャオ。私が強制的に隕石を止めるつてのはどうだうつか？」

一度は白紙に戻した。金の盾をもう一度立て直すしかない…

「じゃの、…それが考えられ得る最善策であるようじゃな…」

二人は頷いた

試しに館海の側へ田をやると、窓から外を無気力に眺めるばかりだった

s o t a k e y o u u p . . .

さてさて…

ジャオの実働的觀念も館海の所為で核心に極まつていいようだ…

私は今地球附近の宇宙空間に面る…

光の戦士と銘打たれて、ここまでできるとは…

宇宙空間において、地球上と同じ働きを自分の体に促すには、特殊なフィルターが要る…

これに関しては、私は全くのノーアイデイアであり、ジャオから貰

つたスペーススタイル（色はスケルトン）を着用し、宇宙空間でありますながら、地球上と同じライフパフォーマンスを実現させていく…

私はやつてくる隕石を一つかつ風漬けに破壊すると、
ツブに明け暮れていった…

なんだか宇宙空間にまで出できたら、金の盾作戦がバカらしくなつたからだ…

「Great you!! I had taking you up so hard. Could you make a good at space-times?」

もちろん…スペーススタイツはアメリカが作り出した新商品だが、地球上と同じライフパフォーマンスを実現させているが故に通信も楽々というわけだ…

「イエス。アイゴティット…」

「you·re super hero · never mind?」

うーむ…しかし、これほどの隕石が地球にやつて来るなんて…星が一つ爆破したか?

はつ…!

「へ、へイ? ゴーキヤンシーザーマーン?」

「oooh . . . I am a single gentle
y . . . deep jokes . . . I love invent
ion .」

ビリヤ、云々ってないようだが…

仕方なく

私は自分で月があるかどうか。確認することにした

流星のじゆく

地球の衛星として、存在する月

その月が爆破し、地球目掛けて隕石を放つていいとしたら…

宇宙にでる前の調べでは、世界各地で隕石の襲来があつていいよう
だつたが…

月が爆破して、地球全体に隕石が襲来するにはどんな星同士の動き
があつたのだろうか？

一つに月が爆破し、地球の自転により隕石が世界各地に広がつたと

同時にとはいひないが

説明はつく

もう一つに用が地球を公転する際に少しずつ朽ちていった場合だ…

それも考えられる…

'There's moon on your space. Do
n't worry about it. Keeping you
work.'

あれ？ 月はある…

アメリカからもどうやら、月は既存であると報告されたようだ…

私はため息混じりにまた、隕石を風潰しに破壊し始めた

土の勇者

「はあ……」

根元を突き止めれば、隕石群の襲来は止められると思っていた私だつたが、月はあるし、それ以外、太陽系の星々もあるようだ…

ため息は宇宙レベルに色濃くなり

どこからともなく飛んでくる隕石群に私は嫌気がさしていた…

「私の代の頃はよかつたな… 勇者タベルが何かと世話を焼いてくれて、今思えば、勇者タベルが元凶だったと言わざるを得ないが、起

承轉結終わりがあつた…」

せめて地球に飛来した隕石群が熱を冷まし、風化すれば…再生するはずなんだが

その考えそのものが違うのだろうか?

土の勇者たるもののが地球について…それが根元なのではないだろうか?

星の爆発が根元ではなく…隕石を多量に生み出している者が居たとしたら?

士の勇者を探すべきだったな……悪魔にして……隕石にしなければいけなかつたのかもしれない……

宇宙空間では、しかしそれ以上の思慮はなく、士の勇者が呼吸をするかのように絶えず生み出す隕石群を壊すことしかできなかつた……

「勇者タベル……そして、新しい光の戦士が巡り会い織りなすことを願うばかりだ」

スペーススタイルのおかげで体は保温されているが、心はどうやら宇宙空間にチューんしているようだつた……

t e a r i s f e a r o f t h e o n e

「現れたぞー！テゴポンよ。ワシも心待ちにしておった…光の戦士と名乗る者が今TVで、タベルと地球を救う為に条件があると話しておる」

タベル？

またタベルだつたか…

それに光の戦士

地球を救う為に条件がある？

隕石を破壊しそぎた所為か…といふか
溜まりに溜まつた疲労の所為か…

苛立ちを隠せずにいた…

早くしてくれ…こつちは隕石の襲来を食い止めてるんだぞ？

「ジャオか？悪いが、なんとかＴＶ局に繋いで話をさせてくれないか？条件なんて聞いてられない…タベルを悪魔にするんだブラックホールに。」

焦りがあったのは確かだ…

しかし、そこには確かなプライドがあった

「な、何を言つとるか？新たな光の戦士と勇者タベルが掲げた条件とは、地球を一度殺すことじや そうじや… それほど再生力を想定しておるやうじや。確かにの… 新光の戦士と勇者タベルがそう言つんじやからの…そして… デコポンよ？もう一つ条件があるんじや」

地球を殺すだつて？破壊するつてことか？正氣なのか？まさか、勇者タベルは先の私との対立を記憶してあり、それを考慮した上で… 悪魔になる気はないといつのか？

「な、なるほど… ジャオ、わかるようなわからないような… 地球」と再生するわけだな？で、もう一つの条件つてなんだ？」

少し間があつたが、ジャオは意を決したように話し始めた

「ト「ポン…お主の死じや…地球が破壊されればお主も=死ぬと奴
らは思つておる…しかし、『コポンよ?お主の死なしにせ、再生は
起きなこと言つのは事実のよひじやな」

そ、そんな…

私の命が地球を救うのか?

そうか…まだ私が光の戦士の力を携えているから…地球がこんなこ
とに…

「やうだつたのか…それではこゝへり隕石を破壊しても、地球は救え
ないんだな…」

すべての事柄が一つに繋がったような…そのような覚悟は前からあつたんだ

「トコポン…?トコポン…?」

ジャオの応答には堪えられずこいつたが、私の田から溢れ出る涙は、それでいて喜びに満ちていた

私は早速、金の盾作戦に切り替え、勇者タベルと新光の戦士の元へ向かつた

構わない… 地球の為なら命など…

「新たに生み出した移動術ワーピングもこれきりか…」

私は大気圏のストレスを受けないほどの粒子にまで分解し、地球と宇宙を行き来していたのだ…

その際に地球の磁力に集中することにより、迅速に地球に戻れるというわけだが…

「まあ……良いだろ？」「

私は甘い判断を自分にした

宇宙から見る地球は美しく、絵や写真で受け取る印象とはまったく別物だった……

まあ……良いだろ？……と私は自分に甘い判断をしていたのだった

私は粒子のまま、磁力を勇者タベルに合わせ
勇者タベルにやつづけてもらひに行つた

「よつて……頃合いだ」

私は勇者タベルの眼前で実体に戻つた

暖かいといつか……湿っぽいといつか……じんわりと何か液体が体中に
染み込んでいくような……

「キャーッー！…で、『コポン現るよつー…キャーッー！』

勇者タベルの磁力に確かに従つたはずだが…

そこには、真っ白く透き通つた肌をもつ、金髪の女性が真っ青な目を私に向け、恐怖におののくように体を震した…

「もう…『コポン…』あなたを待つていたのだけど…シャワー室に現れるなんて…サブ返し？」

サブ返し?

さて…私の時間は止まってしまった。

再生不可

「今回の光の戦士はまだ、五歳の女の子なのよ。」

シャワー室から一転して、私は談話室に通された。

談話室には、面談用の机と椅子が対に1・2の割合でフセツト置いてあった

私達以外は誰も居らず、奥から一番目の席に着いた

真っ黒なスーツに着替え終わった勇者タベルは、スカートから覗く足をポリポリ搔きながら座った

「まあ…座つて、なんて言うのかしら…加減を知らないといふか。

私が再生の話を先にしてしまったからかしらね？彼女天才だから、半永久的に地球に隕石が飛来するシステムを作っちゃったのよ…」

「…そのシステムは私にはわからないが、私の目はまだ黒い

「土の勇者本人を前に、『こんな』ことを言つのもなんだが、隕石の問題ではなく、結果あなたが隕石となることにより、再生は始まるのではないか？」

核心だったのだろうか？
しばしの時間があつた

が、勇者タベルは心配そうに私を見てきたのだった

「あらあら…男なのに以外とラジカルなのね…そう…あなたは話を前に進めたい一心みたいね…でも、違うのよ?あなたの力、発想力、念力、気力程度ではあの子には勝てないの。要はあの子が私よりあなたを選べるかどうかね…」

壁に苛まれたような。無理矢理志氣を奪われたような…

ホルモントークで男が女に適うわけがない…

私が五歳の女の子に気に入られるわけがないだろ…

「し、しかし…それでは隕石を半永久的に飛来させるのはナンセンスじゃないか」

パンツ

私は頬を打たれ、椅子から投げ出された

「違うのっ！－あなたよりあの子の方が強い力を持っているのよ？
彼女の意志を尊重しなくては駄目なのよ？な、何よナンセンスって？」

身震いがした…

そうなのか、私ではどうすることもできないみたいだ

どこか女々しく抱き寄せてやりたいが…たった一枚の壁がそれ以上
を求めてくるようだつた

パヴァーヌ

「つ、連れてくるから…」

私が情けなく頬を覆い見つめていると
たまらなくなつたのか勇者タベルは談話室から出て行つた

このままの体勢で居ようかな？

私は妙な気持ちになり、とても悪戯な気持ちになつた

「そ'うだつー！ケーキなどを用意しよ'う。天才光の戦士と言ふど、五歳の少女じゃないか？フフッ… もてもて…」

私は早速念じ込み、サグラダファミリアのよつなパンケーキを生み出した

雪のよつにまぶされた砂糖がチョコレートベースの生地を彩り、きっと「食べるのが勿体ない」などと…

「食べるのが勿体ないっ」

!-----!

確かにケーキを置いた机の椅子から声がした。：

ガチャッ

「お待たせ。」

勇者タベルが談話室に入ってきた

が、天才光の戦士は居ないようだ

「御免なさいね？彼女キヌって言つんだけどね…土臭そうなケーキは食べたくないって…プツッ」

私は何か閃いたような、物事が繋がったようにケーキのあるテーブルを見た

「ジャンジャジャーン！－キヌよ？私はキヌ。おキヌちゃんよ－！－ケーキは美味しく戴いたわ！－！」

キヌと言つ…

天才光の戦士は秋田小町のような…その…お菊人形のような…不思議な雰囲気を持っていた。45寸程の身の丈に、派手な着物を着て

立っている

「」「困ったな… 美味しかったかい？」

彼女は私の問いに頷き、お返しにことでも言わんばかりに満面の笑顔を見てくれた

「美味しかった！ 美味しかった！ 美味しかった！」

何度も言つもんだから、私はもう一度ケーキを出してあげようとしたんだが…

「もう止せっ……貴様っ……」

七つの声が同時に重なったようなおぞましい声が私の心臓を直撃した…

嫌な予感が、すべての力を出し切っても太刀打ちできないような…
程遠い力を感じた

そう…どうやら私の長い夢が覚めるときが来たようだ

死んでいた

わたしはすっかり萎縮していたが、淡々とキヌは私のこれまでの経緯を尋ねてきた

「そう……化け物列車で円周率のことを考えてたら、おっぱいにね……そこから……あなたの伝説は始まつたのね……」

私とキヌはあのケーキがあつた机で話している

キヌは涼しげな顔を私に向かってかと思うと、勇者タベルの方に振り返った

「残念だけど……このタイムラインは死んでるわ……」

談話室の出入り口となるドア付近に凭れるように腕を組み、立っていた勇者タベルは、それを聞くなり、居たたまれない顔をした

「…そつ…彼には次の周期まで残つて欲しかつたけど、残念だわ」

勇者タベルはドア付近から、私達のところまで歩み寄り、私を見て
話し始めた

「私のからの提案よ？あなたは実はその同窓会の帰りの電車内で睡眠
薬による自殺を図つた…そしてここはあなたの夢の続きの世界…わ
かるかしら？夢から覚ましてあげたいのよ」

どうやら…

二人の天使が現れたようだ

彼女達は私に天国への切符をくれると言つているのだ…

「バカな…私は臨死体験までしたし、すべて現実だと受け入れてきた。そんなはずはない…」

勇者タベルは呆れた顔をした

「あなた…光の戦士なのに時間の概念もないの？光の戦士ならタイムトラベルは地球の自転の巻き戻しと早送りにより可能なことを理

解すべきよ？あなたはその同窓会の帰りの電車内に戾り自殺するしかないの…」

それは曲がりなりにも、光の戦士として無敵を誇っていた私には、単にラストオーダーを聞きに来る店員のそれでしかなかつたのだが…

否定する文句がすぐ浮かばない…

それは不可能なことではないからだつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0766u/>

円周率の天才

2011年10月10日12時26分発行